

Red Data Book of Wakayama Prefecture

その他無脊椎動物の概要

和田 恵次

和歌山県のレッドデータブックでは、これまで無脊椎動物からは昆虫類と陸産淡水産貝類だけしか取り上げられてこなかった。しかし近年、昆虫類や貝類以外の無脊椎動物それに海産の無脊椎動物も国や他府県のレッドデータブックで取り上げられるようになった。特に最近発表された岡山県のレッドデータブックではほとんどの動物門からレッドリスト種が上げられている。和歌山県は陸域環境、海域環境とも多様で、生物相も豊かかつ特徴的であることから、昆虫類・貝類以外の動物群や海域に見られる動物群も注視していくべきと考え、今回これらのグループを取り上げることにした。ただし、海域の動物群についてはその生息状況が把握しやすい海岸部や河口域の潮間帯を主たる生息場所としているものに限定した。

レッドリスト種として上げられたのは、刺胞動物 5 種、紐形動物 2 種、腕足動物 2 種、環形動物 15 種、節足動物 104 種（節口綱 1 種、クモ形綱 20 種、ムカデ綱 3 種、ヤスデ綱 6 種、軟甲綱 74 種）、半索動物 3 種、棘皮動物 5 種、尾索動物 1 種となった。和歌山県の海岸生物には紀南の海岸に特徴的な造礁サンゴ類があるが、これらも生息圏が潮下帯のためリストには上げられなかった。当然サンゴ類に共生する甲殻類等も入っていない。海綿動物、外肛動物（コケムシ類）、頭索動物（ナメクジウオ類）も同様に主分布域が潮下帯とみて取り上げなかった。ただし海産・淡水産の扁形動物や海産・陸産の線形動物、淡水性の海綿動物・刺胞動物・外肛動物は、県内の状況を把握するのが困難とみて取り上げていない。また陸産・淡水産の類線形動物（ハリガネムシ類）や鰓尾類（甲殻類）も、県内の状況がいまだに把握されていないとみて取り上げていない。さらに節足動物軟甲綱の中で種数の多いフクロエビ類は、陸産の等脚類だけしか取り上げていないが、これも生息状況の確定的な把握が困難とみたためである。これらの動物群については専門家による今後の分類学的生態学的研究に期待するしかない。

各種に対する評価は、絶滅が 1 種、絶滅危惧Ⅰ類が 2 種、絶滅危惧Ⅱ類が 3 種、準絶滅危惧が 33 種、情報不足が 80 種、学術的重要が 17 種となった。無脊椎動物は、実際の生息個体数を把握するのが困難なものが多いため、基本的には記録の頻度をみて評価するようにしている。結果的には情報不足が際立って多くなっているが、これは近年の記録の趨勢が把握できないものが多いからである。また生息可能域の調査自体がまだ不十分とみられるものも情報不足としている。そんな中であって、生息個体数が長年モニタリングされていてその趨勢が明らかな種があることを特筆しておく。それは紀の川河口域で国土交通省が 1998 年から実施しているシオマネキ、ハクセンシオマネキ、タイワンヒライソモドキの個体数調査による成果である。海産のベントス種で、これだけ長期に亘ってその個体群サイズの変遷を追った調査は日本で他には知られていない。

評価ランクの高い絶滅と絶滅危惧Ⅰ類に挙げられたのは、わずか 3 種である。このうち絶滅とされたカブトガニは個体群の回復は期待しにくい、絶滅危惧Ⅰ類のカネコトタテグモとシオマネキは、現在残されている個体群が今後も維持できるよう、生息地への人為的改変事業は避けつつ、その地の環境保全に配慮していくことが肝要である。

以下に主要分類群について概要説明を行う。

ササラダニ類の概要

山本 佳範

本県の位置として、黒潮が海岸線近くを流れていることから、温暖・多湿な環境が維持されており、ササラダニ類においても南方系の種が多く出現しているが、一方で紀伊山地には1,000 mを越す山々が連なり、北方系の種も多く生息している。また、急峻な地形がより多くのササラダニ類の生息を可能としている。

島嶼におけるササラダニ類についても特徴的であり、島の面積が大きいほど、多くの種数が生息可能とされるが、和歌山県の友ヶ島の場合、面積は西表島の約200分の1でありながら、種類は98種と西表島とほぼ同じ種数である。田辺湾の神島でも、面積は西表島の9,642分の1であるものの、ササラダニ類の種数は118種と西表島を上回っている。また、それぞれの島嶼からは、南方系の種が多く出現している。

ザトウムシ類の概要

鶴崎 展巨

ザトウムシはクモ形綱の1つの目を形成する動物群で、ずんどうの体に4対の長い歩脚をもつのが特徴である。乾燥に弱く通常は森林内にのみ生息する。小昆虫やミミズ等を捕食するが、地面に落ちた漿果やおむすび等も摂食する。乾燥に弱く移動性が低いため地域的な形質分化が発達しやすい。日本には約80種、和歌山県では3亜目17種が記録されている（鶴崎・湊, 2000）。カイキザトウムシ亜目のカワザトウムシ科には染色体数が地理的に変異する種が多いが、和歌山県内でも2種で染色体数が地理的に変異することがわかっており、交雑帯と考えられる染色体数が多型となる集団も知られている（鶴崎ら, 未発表）。このような交雑帯は生物学的に貴重である。

鶴崎展巨・湊 宏, 2000. 和歌山県のザトウムシ類, 南紀生物, 42 (1): 3-8.

クモ類の概要

関根 幹夫

クモ類（クモ目）は、クモ形綱の中ではダニ目に次いで種数が多く、日本では60科約1,700種が記録されている（谷川, 2020）。クモ類は陸上生態系を代表する捕食者で、食物網の中間的な栄養段階という重要な地位にあるが、近年の環境の変化はクモ類の生息状況にも影響をおよぼしている。クモ類は、住み場所の要件が種によって大きく異なること、また種によって分散能力が異なることから、周辺景観まで含めた生息場所の状況を色濃く反映するとされている。

和歌山県におけるクモ類の研究は、和歌山師範学校（現和歌山大学教育学部）の専攻科卒業論文を基に出版された湯原清次（1931）の「蜘蛛の研究」（第3章真正蜘蛛類の分類及び記載に146種が掲載）と、同じく和歌山師範学校出身の植村利夫（1936）による「和歌山県産蜘蛛目録（28科178種）」に始まる。湯原清次の著作単行本は、日本のクモ類図鑑の先駆であり、植村利夫の目録は、日本のクモ類リストの代用として利用されたこともあり、この二人は、日本のクモ学発展の礎を築いたと言っても過言ではない。1996年には、その後の採集記録を含め38科316種をまとめた「和歌山県産クモ類目録」が東條 清により作成され、東條 清と米田 宏を中心とした「和歌山クモの会」（1991年結成）により旺盛な調査研究が行われた。

現在、和歌山県で報告されているクモ類は、44科351種であり、これは、隣接する大阪府の50科454種、奈良県の48科373種と三重県の50科608種よりかなり少ない（新海ら,

2020)。その理由は、和歌山県における調査が、近年滞っているためであり、今後の調査が進めば、和歌山県のクモ類はさらに増加すると考えられる。

和歌山県のレッドデータブック作成にあたり、環境省のレッドリストに掲載されている種、生息条件の悪化等で個体数が減少傾向にある種、和歌山県が種の模式産地である種、全国的に見て特異な分布を示す種を評価対象種とし、絶滅危惧Ⅰ類（CR+ER）1種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）1種、準絶滅危惧（NT）2種、情報不足（DD）3種を選定した。カネコタテグモは、県内の生息地が限定されていて、生息地も減少しているので絶滅危惧Ⅰ類とした。ワスレナグモは、個体数が少なく、生息条件が明らかに悪化しつつあると考えられるので絶滅危惧Ⅱ類とした。キノボリトタテグモ、キシノウエトタテグモの2種は、生息条件の悪化により減少する可能性が高いと考えられるので準絶滅危惧とした。和歌山県には、海浜性のクモ類が生息する。ヤマトウシオグモは、白浜町湯崎が種の模式産地であり、イソタナグモは、白浜町白浜が種の模式産地である。いずれの種も生息条件の悪化により、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得るが、生息情報が十分ではないので情報不足とした。全国的に見て特異な分布を示し、希少性が高いヒトエグモは、生息情報が十分ではないので情報不足とした。

新海 明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生. 2020. CD 日本のクモ ver. 2020. CD, 著者自刊.

谷川明男. 2020. 日本産クモ類目録 ver. 2020R3. Kishidaia, 117: 162-238.

多足類（ヤスデ類・ムカデ類）の概要

石井 清

多足類は、節足動物門、多足亜門に属するヤスデ類、ムカデ類、コムカデ類、エダヒゲムシ類の4類である。ここでは、ヤスデ類とムカデ類を対象とした。

和歌山県産のヤスデ類は、Verhoeff (1937) が那智を模式産地としてブチババヤスデ *Parafontaria marmorata* (Verhoeff, 1937)、三好 (1954, 1959) が東牟婁郡北山村（北山峡）を模式産地としてキイオビヤスデ *Epanerchodus aculeatus* Miyosi, 1954 とキタヤマタカクワヤスデ *Xystodesmus serralatus* (Miyosi, 1952) を記載したのが最初の記録である。県内でのファウナ解明の調査は、1960年代になって湊 宏博士により南紀のヤスデ類を中心に行われ、その結果がおもに「南紀生物」(1968, 1969, 1970, 1971, 1987, 2000) や和歌山県自然環境研究会による「大塔山系大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林自然環境調査報告書」(2002) においてリストの形で報告された。また、地理的分布上注目すべき熱帯・亜熱帯系のギボウシヤスデ類の未記載種 *Siphonophora* sp.、ヨシダヒメヤスデ類の未記載種 *Yosidaiulus* sp.、生息域が限られるネンジュヤスデ *Sinostemmiulus japonicus* Murakami, 1980 等を発見し、未記載種にはそれぞれキイギボウシヤスデおよびクロゾウヨシダヒメヤスデという仮称名を与えた。その他、Tanabe & Shinohara (1996) はキタヤマタカクワヤスデ、Tanabe, Katakura & Mawatari (2001) および Tanabe (2002) はミドリババヤスデ *Parafontaria tonominea* (Attems, 1899)、西川・村上 (1991, 1993, 1994) はヒラタヤスデ *Brachycybe nodulosa* (Verhoeff, 1935)、フトケミコシヤスデ *Diplomaragna takakuwai* (Verhoeff, 1929)、アカヤスデ属の数種 *Nedyopus* spp. とヤケヤスデ属の数種 *Oxidus* spp.、イボオビヤスデ *Epanerchodus gibbosus* Takakuwa, 1954、ヤマトオビヤスデ *Epanerchodus japonicus* (Carl, 1902)、ケナガシロハダヤスデ *Kiusiunum longisetum* Miyosi, 1958、ブチババヤスデを県内から記録した。これら既知種を整理したところ、分類上再検討を要する種を除いて8目16科25属34種となった。また、レッドデータブック2022版の発刊にともなう現地調査が2017年から行われて2

科4属8種が新たに追加され、県内には8目18科29属42種が生息していた。また、少なくとも9種が未記載種と判断され、いずれリストに加わることになる。

一方、ムカデ類は、断片的な報告として高桑(1940)がヤマトベニジムカデ *Strigamia maritima japonica* (Verhoeff, 1935) を那智、カシマセスジアカムカデ *Scolopocryptops rubiginosus kasimensis* (Miyosi, 1957) を田辺市新庄町神島、ニホンメナシムカデ *Cryptops japonicus* Takakuwa, 1934 を高野山、Jonishi & Nakano (2022) がケアカムカデ *Scolopocryptops elegans* (Takakuwa, 1937) を東牟婁郡(詳細産地不明)、Uliana, Bonato & Minelli (2007) がニホンナガズジムカデ *Mecistocephalus japonicus* Meinert, 1886 を那智から記録している。県内のムカデ類のファウナに関する報告は、和歌山市加太町沖の島で調査を行った湊(1984)が最初である。その後、吉田(2007)は各地で採集された標本に基づいてリストを作成した。これらの報告では4目13科15属31種が記録されている。2017年から行われた現地調査において新たに1科5属11種の生息が確認され、既記録種とあわせて4目14科20属42種が県内に生息する。また、現地調査でおよそ9種の未記載と思われる種が見出された。

和歌山県は気候的に温暖で年降水量も多く、地形も複雑で入り組んでおり、照葉樹林や大塔山系に見られるブナ林が発達し、ヒブリアカヤスデ *Nedyopus hiburizimensis* Miyosi, 1955、キイギボウシヤスデ、アマビコヤスデ *Riukiaria semicircularis* (Takakuwa, 1941)、タカクワヤスデ類 *Xystodesmus* sp.、キレコミヤスデ *Prosopodesmus sinuata* (Miyosi, 1958)、ケナガシロハダヤスデ、オカツクシヤスデ *Kiusiozonium okai* (Takakuwa & Miyosi, 1949)、トビズムカデ *Scolopendra mutilans* L. Koch, 1878、アオズムカデ *Scolopendra japonica* L. Koch, 1878、ブチナガズジムカデ *Mecistocephalus marmoratus* Verhoeff, 1934、ゴシチナガズジムカデ *Mecistocephalus diversisternus* (Silvestri, 1919)、ニホンナガズジムカデ、ニホンメナシムカデ、ヒロズジムカデ *Dicellogophilus pulcher* (Kishida, 1928)、サキブトジムカデ等、多くの南方系種やクロヒメヤスデ *Karteroiulus niger* Attems, 1909、ダテイスンムカデ *Bothropolys actidens* Takakuwa, 1941等の北方系種も生息する。多足類は一般に安定した生息環境を好み、気候変動、土地開発による生息域改変等の影響を強く受ける。『和歌山県レッドデータブック2022年改訂版』では、多くの地点の調査にもかかわらず生息地域や生息場所が極めて限定的と判断されるカシマセスジアカムカデ、モモジムカデ、カチベニジムカデ、クロゾウヨシダヒメヤスデ、クロヒメヤスデ、キイギボウシヤスデ、ヤケヤスデ属の1種、キイオビヤスデ、ネンジュヤスデを選定した。

Jonishi, T. & Nakano, T. 2022. Taxonomic accounts and phylogenetic positions of the Far East Asian centipedes *Scolopocryptops elegans* and *S. curtus* (Chilopoda : Scolopendromorpha). *Zoological Science*, 39 : 1-13.

- 湊 宏. 1968. 紀伊半島南部の倍脚類について. *南紀生物*, 10 (1 & 2) : 19-25.
 湊 宏. 1969. 紀伊半島南部の倍脚類について (II). *南紀生物*, 11 (1) : 3-6.
 湊 宏. 1970. 高野山・荒神ガ岳のヤスデ類. *南紀生物*, 12 (2) : 39-40.
 湊 宏. 1971. 紀伊半島南部の倍脚類について (III). *南紀生物*, 13 (2) : 45-47.
 湊 宏. 1983. 友ヶ島の大形土壌節足動物. 友ヶ島学術調査, p. 167-171. 和歌山.
 湊 宏. 1987. 紀伊半島のヤスデ類相 (1). *南紀生物*, 29 (2) : 127-128.
 湊 宏. 2000. 紀伊半島のヤスデ類相 (2) —マクラギヤスデ白浜に産す—. *南紀生物*, 42 (2) : 141-142.
 湊 宏. 2002. 黒蔵谷を中心とする大塔山系のヤスデ類(倍足類)相. 大塔山系大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林自然環境調査報告集. p. 189-194. 和歌山県自然環境研究会, 田辺.
 三好保徳. 1954. 日本産倍足類及び唇足類の分類学的研究 X. オビヤスデ属の2新種. *動物*

- 学雑誌, 63 (7) : 288-291.
- 三好保徳. 1957. 日本産倍足類及び唇足類の分類学的研究 20. ヤスデの 1 新属とムカデの 1 新種及び 1 新亜種. 動物学雑誌, 66 (6) : 264-267.
- 三好保徳. 1959. 日本の倍足類. 223 + 19pls. 東亜蜘蛛学会, 大阪.
- 西川喜朗・村上好央. 1991. 日本産倍脚類の分布記録 (I). 追手門学院大学文学部紀要, (25) : 291-313.
- 西川喜朗・村上好央. 1993. 日本産倍脚類の分布記録 (II). 追手門学院大学文学部紀要, (27) : 261-275.
- 西川喜朗・村上好央. 1994. 日本産倍脚類の分布記録 (III). 追手門学院大学文学部紀要, (29) : 207-225.
- 高桑良興. 1940. ジムカデ目 (唇足綱-整形類). 日本動物分類. 9 (1). 156pp. 三省堂, 東京.
- 高桑良興. 1940. オオムカデ目 (唇足綱-整形類). 日本動物分類. 9 (2). 88pp. 三省堂, 東京.
- 高桑良興. 1954. 日本産倍足類総説. 241pp. 日本学術振興会, 東京.
- Tanabe, T. & Shinohara, K. 1996. Revision of the millipede genus *Xystodesmus*, with reference to the status of the tribe Xystodesmini (Diplopoda : Xystodesmidae). *Journal of Natural History*, 30 : 1459-1494.
- Tanabe, T., Katakura, H. & Mawatari, S. F. 2001. Morphological difference and reproductive isolation : morphometrics in the millipede *Parafontaria tonominea* and its allied forms. *Biological Journal of the Linnean Society*, 72 : 249-264.
- Tanabe, T. 2002. Revision of the millipede genus *Parafontaria* Verhoeff, 1936 (Diplopoda, Xystodesmidae). *Journal of Natural History*, 36 : 2139-2183.
- Uliana, M., Bonato, L. & Minelli, A. 2007. The Mecistocephalidae of the Japanese and Taiwanese islands (Chilopoda : Geophilomorpha). *Zootaxa*, 1396 : 1-84.
- Verhoeff, K. W. 1935. Über Scolioplanes (Chilopoda). *Zoologischer Anzeiger*, 111 : 10-23.
- Verhoeff, K. W. 1937. Zur Kenntnis Ostasiatischer Diplopoden. *Zoologischer Anzeiger*, 117 : 309-321.
- 吉田元重. 2007. 和歌山県のムカデ類. 南紀生物, 49 (2) : 135-136.

カニ類の概要

和田 恵次

和歌山県からのカニ類の記録には、尾崎光之助、永井誠二、丸村眞弘といった紀南在住の研究者の貢献が大きい。彼らにより記録された種の多くは、浅海から深海までの潮下帯のものであるが、記録された種の多さには驚くべきものがある。例えば、現在日本産のカニ類は 1,500 種以上に及ぶが、永井誠二氏が和歌山県近海から記録した (丸村・小阪, 2003) 種は 554 種にもなっており、それだけでも日本産の種の 3 割以上を占めている。これは和歌山県が黒潮の近接する位置にあって熱帯・亜熱帯性の種の集積するところになっていることと、多様で広い海岸線が多様な種の生息場所を提供しているためとみられる。

今回レッドリストに取り上げられた種は、このうちで淡水域あるいは潮間帯から潮上帯を主な生息場所としているものの中で、記録頻度や生息個体数が少ないものとした。絶滅危惧Ⅰ類が 1 種、絶滅危惧Ⅱ類が 2 種、準絶滅危惧が 22 種、情報不足が 19 種、学術的重要が 6 種の

計 50 種である。記録頻度が極めて少ないものや記録頻度や生息地での個体数が明らかに減少しつつあるものを絶滅危惧Ⅰ類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧のランクに入れたが、記録が少ないながら、調査自体がまだまだ不十分とみられるものは情報不足のランクに入れた。学術的重要としたのは、記録が少ないだけでなく、和歌山県からの記録がその種の地理的分布情報として重要とみなせるもの（タイワンオオヒライソガニ、ヒメシオマネキ、ベニシオマネキ等）、あるいは和歌山県以外からの記録がほとんどないもの（ミナミアカイソガニ、タカノケフサイソガニ類似種等）である。

ランクの高い絶滅危惧Ⅰ類・Ⅱ類に評価されたシオマネキとクシテガニはいずれも河口域塩性湿地とその周辺域を生息場所としている種である。このような環境は護岸工事等で破壊されやすいところであり、そのため和歌山県に限らず全国的に個体群の衰退が見られるものである。海岸整備事業等ではこれらの種への配慮が今後ますます重要となろう。同様に礫浜海岸の高潮帯から潮上帯に住み、和歌山県が基産地となっているマメアカイソガニも護岸工事や埋め立ての犠牲になりうる種である。

地理的分布特性の観点からは、南方系の種で和歌山県が分布域の北限近くになっていて記録が少ないもの（ミナミトラノオガニ、アゴヒロカワガニ、タイワンオオヒライソガニ等）と、反対に温帯性で和歌山県が地理的分布域内に入っているものの、県内での記録が少ないもの（ムツハアリアケガニ、マメコブシガニ、オサガニ、ウモレマメガニ、フタハピンノ等）がある。これらの種が記録される地域では、保全上これらの生息状況を注視してゆく必要があろう。

丸村眞弘・小阪 晃. 2003. 永井誠二コレクション カニ類標本目録. 73pp. 和歌山県立自然博物館, 海南.

●絶滅 (EX)

カブトガニ

●絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)

カネコトタテグモ

シオマネキ

●絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ワスレナグモ

クシテガニ

ムツハアリアケガニ

●準絶滅危惧 (NT)

ウメボシイソギンチャク

ツバサゴカイ

ムギワラムシ

ヒトハリザトウムシ

コウヤスベザトウムシ

キノボリトタテグモ

キシノウエトタテグモ

マングローブテッポウエビ

ヤドリカニダマシ

ウチノミカニダマシ

オキナワヤワラガニ

マキトラノオガニ

ミナミトラノオガニ

マメコブシガニ

フジテガニ

ウモレベンケイガニ

ユビアカベンケイガニ

ハマガニ

マメアカイソガニ

ヒメアシハラガニ

ミナミアシハラガニ

トリウミアカイソモドキ

トゲアシヒライソガニモドキ

タイワンヒライソモドキ

ヒメヒライソモドキ

オオヒライソガニ

アリアケモドキ

カワスナガニ

チゴイワガニ

オサガニ

スナガニ

ハクセンシオマネキ

ワダツミギボシムシ

●情報不足 (DD)

カイウミヒドラ

コマイハナゴケ

ホソイソギンチャク属の1種

ムシモドキギンチャク属の1種

オロチヒモムシ

ムラサキヒモムシ

ミドリシャミセンガイ類似種

スズメガイダマシ

ニッポンオフエリア

タマシキゴカイ

シダレイトゴカイ

チリメンイトゴカイ

イトメ

クロブチボウセキウロコムシ

ニッポンフサゴカイ

クビレクガビル

サナダユムシ

スジホシムシモドキ

ムラクモスジホシムシモドキ

アンチラサメハダホシムシ
 キイコナダニモドキ
 アラゲコナダニモドキ
 ツノコナダニモドキ
 オオギホソダニ
 ケタスケチビイブシダニ
 チビハネアシダニ
 エボシダニ
 イソタナグモ
 ヤマトウシオグモ
 ヒトエグモ
 カシマセスジアカムカデ
 モモジムカデ
 クロヒメヤスデ
 キイギボウシヤスデ
 ネンジュヤスデ
 シマトラフヒメシャコ
Phreatoasellus minatoi (和名なし)
 ツノホラワラジムシ
 キイホラワラジムシ
 ミナカタハヤシワラジムシ
 イシダコシビロダンゴムシ
 ケナガコシビロダンゴムシ
 オニヌマエビ
 ザラテテナガエビ
 コンジンテナガエビ
 シラタエビ
 ハシボソテッポウエビ
 カワテッポウエビ
 クボミテッポウエビ
 アナジャコ
 コブシアナジャコ
 イザナミツノヤドカリ
 ヨモギホンヤドカリ
 アリアケヤワラガニ
 ヒメテナガオウギガニ

ミナミオカガニ
 ヘリトリオカガニ
 カクレイワガニ
 ハシリイワガニモドキ
 ウモレマメガニ
 ヒメアカイソモドキ
 シタゴコロガニ
 スネナガイソガニ
 ヒメケフサイソガニ
 アゴヒロカワガニ
 ケフサヒライソモドキ
 ヒメカクオサガニ
 メナガオサガニ
 ギボシマメガニ
 アカホシマメガニ
 ホンコンマメガニ
 フタハピンノ
 ヒメギボシムシ
 ミサキギボシムシ
 イツツメクモヒトデ
 ウチノミクモヒトデ
 ジンガサウニ
 モトシマクルマカギナマコモドキ
 イボイボクルマカギナマコ
 ヒトエシモフリボヤ

●学術的重要 (SI)

エビヤドリミミズ
 ヒコナミザトウムシ
 アカサビザトウムシ
 コシビロザトウムシ
 カシマイボテカニムシ
 カチベニジムカデ
 クロゾウヨシダヒメヤスデ
 ヤケヤスデ属の1種
 キイオビヤスデ

ムラサキオカヤドカリ
ナキオカヤドカリ
ミナミアカイソガニ
タカノケフサイソガニ類似種

台湾オオヒライソガニ
ミナミスナガニ
ヒメシオマネキ
ベニシオマネキ

カブトガニ	<i>Tachypleus tridentatus</i> (Leach, 1819)	節足動物門	節口綱	剣尾目	カブトガニ科
県カテゴリー	絶滅 (EX)	旧県	2012	—	国 絶滅危惧 I 類 (CR + EN)

- 和歌山県における本種の最も古い記録は有田市誌 (1974) 上の報告で、有田市で昭和初期に多く捕獲されていたとされている。他の和歌山県町誌でも、1974 年に広川町から記録されている (広川町誌, 1974) ほか、美浜町の本ノ脇海岸、日高川河口及び日高町北井で、1977 年に記録されている (美浜町史, 1988)。1977 年には白浜町で記録があり (田名瀬, 1977)、1978 年には湯浅町から記録がある (楠井, 1978) が、それ以降記録はない。和歌山県北中部は、瀬戸内海沿岸を中心に分布していた本種の貴重な分布東限であったが、当地域からは 1978 年以降に絶滅したものとみられる。本種は卵期や幼体期に干潟・砂浜域を生息場所とするため、戦後盛んに行われてきた干潟や砂浜の埋め立てが本種幼期の生活場を奪ったことで再生産を失い絶滅したのであろう。
- 執筆者 (和田恵次)



- 参考文献・情報
- 1 有田市誌編集委員会. 1974. 有田市誌. 有田.
 - 2 広川町誌編集委員会. 1974. 広川町誌 下巻. 広川.
 - 3 楠井善久. 1978. 和歌山県湯浅町におけるカブトガニの記録. 南紀生物, 20: 42.
 - 4 美浜町史編集委員会. 1988. 美浜町史 上巻. 美浜.
 - 5 田名瀬英朋. 1977. 和歌山県白浜町でカブトガニ採集される. 南紀生物, 19: 58.
- 写真: 和田恵次撮影 (県外産)

カネコトタテグモ	<i>Antrodiaetus roretzi</i> (L. Koch, 1878)	節足動物門	クモ形綱	クモ目	カネコトタテグモ科
県カテゴリー	絶滅危惧 I 類 (CR + EN)	旧県	2012	—	国 準絶滅危惧 (NT)

- 腹部背面は濃い茶褐色、頭胸部は黒褐色。メスは 12~15 mm、オスは 10~13 mm。崖地に深さ 10~20 cm の横穴を掘り、入口に糸で裏打ちされた両開きの扉 (観音開き戸) をつけている。地中の住居内に居ることから、メスはほとんど移動せず、繁殖期にはオス成体のみが徘徊する。成長が極めて遅いので、繁殖力が弱い。山形県、岩手県以南から兵庫県、岡山県までの間で局地的に生息。和歌山県では、橋本市 2、高野町 1、海南市 4、紀美野町 3、有田川町 2、有田市 1、由良町 1、田辺市 1、すさみ町 1 の計 16 ヶ所での生息が確認されていたが (2001 年)、この報告から 20 年余を経過し、確実な生息情報は有田川町の 1 ヶ所にとどまっている。北米および日本に 2 属 30 種が知られ、日本産の種以外はすべてアメリカ合衆国産であり、動物地理学的に重要な種である。
- 住宅建設・道路工事等による崖地の破壊やコンクリート化により生息場所が減少していると考えられることから絶滅危惧 I 類 (CR + EN) に選定した。
- 執筆者 (関根幹夫)



- 参考文献・情報
- 1 稲垣成二. 1996. 最近採集したクモ数種について. 和歌山クモの会会報, 6: 5.
 - 2 関根幹夫. 2016. 和歌山県有田川町で確認したクモ. くものいと, 49: 7-8.
 - 3 東條 清. 1991. 海南市藤白神社~藤白峠観察会クモ類リスト. 和歌山クモの会会報, 1: 10-11.
 - 4 東條 清. 1993. 1992 年度「和歌山クモの会」総会と観察会報告. 和歌山クモの会会報, 3: 3-8.
 - 5 東條 清. 1998. 春日の森のクモ類. 和歌山クモの会会報, 8: 1-4.
 - 6 東條 清. 2001. 和歌山のクモ. 242pp. 著者自刊.
- 写真: 関根幹夫撮影

シオマネキ <i>Tubuca arcuata</i> (De Haan, 1835) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 スナガニ科						
県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	旧県	2012		—	国 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

東京湾以南沖縄島までに分布する大型のシオマネキ類の1種である。塩性湿地周辺の泥干潟に穴居するが、記録される地域の大半で生息数は少ない。和歌山県沿岸では紀の川、有田川、日高川、切目川、田辺湾、富田川からの記録があるが、いずれの地域でもその生息数は近年減少傾向にある。和歌川河口では戦前にはいたという情報があるが、埋め立てによるヨシ原の消滅により絶滅したものと思わ



選定理由 生息数が県内で最も多いとみられる紀の川の河口域では国土交通省による生息数調査が1998年以降定期的に行われており、推定生息数は100~700個体を上下しているが、2015年以降は100個体以下と減少傾向にある。有田川河口や日高川河口でも近年個体数が10個体を下回り、数年前に比べて明らかに減りつつある。切目川河口、田辺湾も見られる個体数は10個体を下回り、富田川河口では近年1個体も見つかっていない。

本種の繁殖期は6~7月で、この期間には雄は片方の巨大はさみ脚を上下させる waving display を行う。また本種の巣穴はその開口部に筒状の泥の塚 (chimney) が造られることが多く、その特徴から本種の生息を確認することができる。

執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 藤川八郎. 1989. 和歌浦のシオマネキ類について. 紀州生物, 18: 11-14.
- 2 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
- 3 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. 平成30年度モニタリングサイト1000 磯・干潟調査報告書.
- 4 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
- 5 切目川ダム環境委員会. 2009. 切目川ダムにおける環境評価について. 和歌山.
- 6 古賀庸憲. 私信 (切目川河口から記録).
- 7 国土交通省近畿地方整備局. 2021. 令和2年度紀の川水系河川整備計画に基づく事業等の進捗点検に関する報告書.
- 8 丸村眞弘. 2000. 内之浦干潟でシオマネキ類2種の生息を確認. くろしお, (19): 62.
- 9 丸村眞弘・小阪 晃. 2003. 永井誠二コレクション カニ類標本目録. 73pp. 和歌山県立自然博物館, 海南.
- 10 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
- 11 野元彰人・木邑聡美・田中義之・黒田美紀・内野 透・唐澤恒夫. 2005. 和歌山県富田川河口域で確認されたシオマネキ (スナガニ科). 南紀生物, 47: 179-181.
- 12 大阪市立自然史博物館所蔵標本 (白浜町安久川河口、田辺市滝内、田辺市内之浦、日高川河口から記録)
- 13 和田恵次. 1978. 和歌山県産スナガニ類とその分布について. 南紀生物, 20: 18-22.
- 14 和田恵次専門調査員現地調査記録 (有田川、日高川、切目川、田辺湾から記録).
- 15 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (日高川、富田川から記録).

写真: 和田恵次撮影

ワスレナグモ <i>Calommata signata</i> Karsch, 1879							節足動物門	クモ形綱	クモ目	ジグモ科
県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	旧県	2012		—		国	準絶滅危惧 (NT)		

選定理由

メスの腹部背面、頭胸部は茶褐色をしているが、オスは全体が黒色で体型が細く非常に小型であるため別種のように見える。メスは13~18 mm、オスは5~8 mm。畑、草原、庭、社寺の境内等の比較的乾燥した明るい場所に10~30 cmの縦穴を掘り、管状の住居をつくる。住居には蓋がないが、入口を糸で塞いでいる場合もある。夜間、住居から前足を出し、獲物を待つ。オスは秋に成熟しメスを探して徘徊する。子グモは、8月頃にバルーニング（空中移動）により分散する。本州・四国・九州に分布。本属のクモ類で日本に生息するのは本種1種のみである。和歌山県では、県下全域で生息確認されていたが個体数は少ない。社寺境内では、石灯籠や敷石の際等、土壌の比較的安定した場所で発見されることが多い。



土地造成、草地の開発、社寺の改修による地表面のコンクリート化や境内の過度の清掃により生息場所が消失していると考えられる。また、殺虫剤散布により生息条件が明らかに悪化しつつあると考えられることから絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に選定した。

執筆者（関根幹夫）

- 参考文献・情報 1 東條 清. 2001. 和歌山のクモ. 242pp. 著者自刊.
写真：関根幹夫撮影（県外産）

クシテガニ	<i>Parasesarma affine</i> (De Haan, 1837)			節足動物門	軟甲綱	十脚目	ベンケイガニ科
県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	旧県	2012	—		国	準絶滅危惧 (NT)

選定理由

東京湾から九州までの広い範囲に分布域を持っているが、その中でも大河川の河口域塩性湿地に限定的に出現する種である（日本ベントス学会, 2012）。和歌山県沿岸では和歌山市内原（亀の川）、日高川河口、富田川河口の3地域から記録があるが、これらの地域でも近年は本種を見ることが困難で、分布域、生息数とも減少していることは間違いない。対岸の徳島県や高知県でも近年本種の記録は少なくなっている。



執筆者（和田恵次）

- 参考文献・情報 1 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
2 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
3 和歌山県立自然博物館所蔵標本.
4 大和茂之・丸村真弘. 1992. 富田川河口域の甲殻類. くろしお, (11): 28.
写真：和田恵次撮影

ムツハアリアケガニ <i>Camptandrium sexdentatum</i> Stimpson, 1858 節足動物門 軟甲綱 十脚目 ムツハアリアケガニ科						
県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧 (NT)

日本では宮城県松島湾から長崎までの範囲に分布するが、記録される地域は少ない（日本ベントス学会，2012）。和歌山県では田辺湾からの記録しかなかったが、近年太地町森浦湾から記録された。なお田辺湾の記録は本種に類似のチゴイワガニ *Ilyograpsus nodulosus* の可能性がある。いずれにしても和歌山県では記録情報が極めて乏しい稀少種であることは間違いない。



執筆者（和田恵次）

参考文献・情報

- 1 永井誠二．1990．和歌山県沿岸のカニ類相Ⅳ．南紀生物，32：115-119．
- 2 日本ベントス学会．2012 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック．285pp．東海大学出版会，秦野．
- 3 和田恵次・渡部哲也専門調査員現地調査記録．
写真：和田恵次撮影（県外産）

ウメボシイソギンチャク <i>Actinia equina</i> (Linnaeus, 1758) 刺胞動物門 花虫綱 イソギンチャク目 ウメボシイソギンチャク科						
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	—

和歌山県沿岸での本種の記録は和歌山市加太周辺、日高町小浦・阿尾、田辺湾畠島、太地町灯明崎から知られる。他には白浜町臨海周辺からも知られる。ただ近年は、和歌山市加太周辺の海岸で多数の生息が見られるが、それ以外の地域で本種を見ることは困難である。田辺湾の畠島では1969年以降1983年まで記録が続いていたが、その後、記録が途絶え、現在は当地で見ることはいない。本種は岩礁潮間帯の中上部を生息場所としているので容易に見つけることができる。それにもかかわらず、現在は加太周辺や日高町阿尾以外では、本種を見ることはできず、県内の分布域は明らかに減少しているとみて準絶滅危惧と評価した。



執筆者（和田恵次）

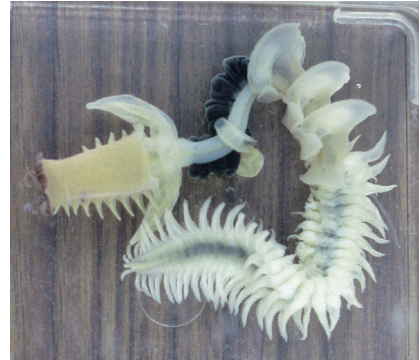
参考文献・情報

- 1 河村真理子．私信．
- 2 古賀庸憲．私信．
- 3 大垣俊一・田名瀬英朋．1984．畠島磯観察記録，1949-1983 その1．南紀生物，26：56-61．
- 4 岡西政典．私信．
- 5 大阪湾海岸生物研究会．2018．大阪湾南東部の岩礁海岸生物相 -2011~2015 年の調査結果．自然史研究，4：17-38．
- 6 内田紘臣．1983．太地町灯明崎付近の潮間帯の動物．くろしお，(2)：21．
- 7 内田紘臣．1996．日高町小浦海岸で観察された刺胞動物と環形動物．くろしお，(15)：37-38．
- 8 上出貴士．私信．
- 9 和田恵次専門調査員現地調査記録．
写真：和田恵次撮影

ツバサゴカイ	<i>Chaetopterus cautus</i> Marenzeller, 1879	環形動物門	溝副触手綱	ツバサゴカイ目	ツバサゴカイ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国

選定理由

北海道から九州までの砂泥性干潟に穴居するが、特徴的な棲管が干潟上に突出するので本種の生息は確認可能である。しかし、全国的には減少傾向にあり（日本ベントス学会，2012）、和歌山県でも和歌川河口、広川町西広海岸、田辺湾内之浦、田辺湾畠島から知られるに過ぎない。田辺湾の畠島では1967～1977年まで記録されたが、それ以後、記録は途絶えた。1990年代になって田辺湾の内之浦や鳥の巣海岸で見つかり、内之浦では現在も少数ながら見つかる。現在見つかる地域（和歌川河口、西広海岸、田辺湾）での生息数はそれほど多くないため、個体群として絶滅する可能性は高い。



執筆者（和田恵次）

参考文献・情報

- 1 環境省自然環境局生物多様性センター．2019．平成30年度モニタリングサイト1000 磯・干潟調査報告書．
- 2 古賀庸憲私信（和歌川河口から記録）
- 3 大垣俊一・田名瀬英朋．1984．畠島磯観察記録，1949-1983 その2．南紀生物，26：105-111．
- 4 日本ベントス学会．2012．干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック．285pp．東海大学出版会，秦野．
- 5 和田恵次専門調査員現地調査記録（広川町西広海岸から記録）
写真：佐藤正典提供（県外産）

ムギワラムシ	<i>Mesochaetopterus japonicus</i> Fujiwara, 1934	環形動物門	溝副触手綱	ツバサゴカイ目	ツバサゴカイ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国

選定理由

三河湾以南九州までの砂質から砂泥質の干潟に生息し、和歌山県では和歌川河口から西広海岸までに分布する。分泌物と砂粒で深さ400 mm程度のI字型の棲管を作る。地表から20 mm程突出し、底にはシャワーの先端のような多数の小孔が開く。棲管内にはヤドリカニダマシが共生することがある。本種は保全された良好な環境の干潟にしか生息せず、和歌山県内においてもそのような環境は決して多くないため、準絶滅危惧種とした。



執筆者（渡部哲也）

参考文献・情報

- 1 関西総合環境センター．2003．紀の川河口をフィールドにした生態系等の調査・研究（干潟調査報告書）．
- 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義．2004．和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相(I)．南紀生物，46：31-36．
- 3 和田恵次専門調査員現地調査記録（和歌山市名草ノ浜、有田市矢櫃海岸から記録）．
写真：和田恵次提供

ヒトハリザトウムシ*Psathyropus tenuipes* L. Koch, 1878

節足動物門 クモ形綱 ザトウムシ目 カワザトウムシ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧 (NT)
--------	------------	----	------	---	---	------------

選定理由

体長 6 mm 内外。背の腹部第 2 背板に 1 本の針状突起がある。ザトウムシでは唯一の海浜性種で、砂浜をともなうような海食崖、河川感潮域の岸辺の空隙等に生息する。年 1 化卵越冬で、成体は 7~11 月頃に見られる。日中は海食崖の窪みや岩陰に体を寄せ合い密な集合をつくる。海岸のコンクリート護岸化が進んでいる瀬戸内海沿岸では生息地が消失傾向で、環境省版レッドリストにおいて準絶滅危惧に指定されている。和歌山の海岸では北部を中心にこれまで数度探索しているが、生息地は現在のところ白浜町の京大瀬戸臨海実験所とその近辺の海岸で確認されているのみである。染色体の異数性（同一集団内および同一個体内で染色体数がばらつく現象）の原因となる B 染色体の数に地理的変異があり、瀬戸内海沿岸の集団では平均値が 2 以下であるが、白浜の集団では多く、平均 6.6 である。



執筆者（鶴崎展巨）

参考文献・情報

- 1 久保田 信. 2007. ヒトハリザトウムシの瀬戸臨海実験所北浜への規則的な出現. くろしお, 26 : 19-20.
 - 2 Tsurusaki, N. 1993. Geographic variation of the number of B- chromosomes in *Metagagrella tenuipes* (Opiliones, Phalangidae, Gagrellinae). Memoirs of the Queensland Museum, 33 (2) : 659-665.
 - 3 鶴崎展巨. 2021. 海浜性ザトウムシの外部形態と B 染色体数の地理的分化. 海洋と生物, 43 (1) : 43-49.
 - 4 鶴崎展巨・湊 宏. 2000. 和歌山県のザトウムシ類. 南紀生物, 42 (1) : 3-8.
 - 5 Tsurusaki, N. & Shimada, T. 2004. Geographic and seasonal variations of the number of B chromosomes and external morphology in *Psathyropus tenuipes* (Arachnida : Opiliones). Cytogenetic and Genome Research, 106 : 365-375.
- 写真：鶴崎展巨撮影（県外産）

コウヤスベザトウムシ <i>Leiobunum kohyai</i> Suzuki, 1953							節足動物門		クモ形綱		ザトウムシ目		カワザトウムシ科		
県カテゴリー		準絶滅危惧 (NT)		旧県		2012		—				国		準絶滅危惧 (NT)	

選定理由

体長 7 mm 内外。紀伊半島のブナ帯の固有種で、和歌山県高野山がタイプ産地。雄の交尾器形態の差により高野型（高野山・護摩壇山と大阪府金剛山）、大台ヶ原型（白浜町将軍山、田辺市果無山系、大塔山系、狼屹山周辺と奈良県大台ヶ原山）の 2 地理品種が識別される。生息が高標高域に限定されるため県内ではもともと生息域が狭いが、近年はシカ害による林床の乾燥等によりいずれの地域でも個体数の減少が顕著である。年 1 化卵越冬で成体は 7~9 月に樹幹上で見られる。他のザトウムシの生息にもシカ害影響が顕著と思われる護摩壇山~龍神山周辺では、早急のシカ害防除が望まれる。



執筆者（鶴崎展巨）

参考文献・情報

- 1 Suzuki, S. 1953. Studies on the Japanese harvesters. VI. Some new and little known species of the genus *Leiobunum* C. L. Koch from Japan, with special reference to the comparative study of penis. Journal of Science of the Hiroshima University (B-1), 14 : 173-200.
 - 2 Tsurusaki, N. 1985. Taxonomic revision of the *Leiobunum curvipalpe*-group (Arachnida, Opiliones, Phalangidae). I. *hikocola*-, *hiasai*-, *kohyai*-, and *platypenis*-subgroups. Journal of the Faculty of Science of Hokkaido University, VI. Zoology, 24 : 1-42.
 - 3 鶴崎展巨・湊 宏. 2000. 和歌山県のザトウムシ類. 南紀生物, 42 (1) : 3-8.
- 写真：鶴崎展巨撮影（県外産）

キノボリトタテグモ <i>Conothele fragaria</i> (Dönitz, 1887)	節足動物門	クモ形綱	クモ目	トタテグモ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	国
				準絶滅危惧 (NT)

暗紫色で、腹部に斑紋がない。メス 10~12 mm、オス 8~10 mm。日光の直射しない適度な湿度が保たれている岩上や古木の樹皮上に、コケや樹皮をはりつけた長さ 2~3 cm の落花生の殻によく似た袋状住居をつくり、入口に糸で裏打ちされた片開きの扉をつける。メスはほとんど移動せず、繁殖期にはオス成体のみが徘徊する。成長が極めて遅いので、繁殖力が弱い。本州・四国・九州、南西諸島に分布。本属のクモ類で日本に生息するのは本種 1 種のみである。



選定理由

和歌山県では県下全域で生息確認されていたが、近年、本種の生息が確認されず、古い住居跡のみられることが多い。乾燥化とコケの生えた古木の減少により生息条件が悪化していると考えられることから準絶滅危惧 (NT) に選定した。

執筆者 (関根幹夫)

参考文献・情報

- 1 稲垣成二. 1998. 和歌山クモの会 総会と観察会 (1997 年度). 和歌山クモの会会報, 8: 7-9.
 - 2 稲垣成二. 1999. 雲取温泉でクモを採る. 和歌山クモの会会報, 9: 12-14.
 - 3 関根幹夫. 2022. 和歌山県北部のキノボリトタテグモの新産地. くものいと, 55: 6-7.
 - 4 東條 清. 1991. 海南市藤白神社~藤白峠観察会クモ類リスト. 和歌山クモの会会報, 1: 10-11.
 - 5 東條 清. 1992. 1991 年度「和歌山クモの会」総会と観察会. 和歌山クモの会会報, 2: 3-5.
 - 6 東條 清. 1998. 春日の森のクモ類. 和歌山クモの会会報, 8: 1-4.
 - 7 東條 清. 2001. 和歌山のクモ. 242pp. 著者自刊.
 - 8 和歌山クモの会事務局. 1997. 和歌山クモの会 総会と観察会 (1996 年度). 和歌山クモの会会報, 7: 11-12.
 - 9 八木沼健夫. 1955. 友ヶ島のクモ. In 友ヶ島の自然. Nature Study 臨時号: 20-21.
- 写真: 関根幹夫撮影 (県外産)

キシノウエトタテグモ <i>Latouchia typica</i> (Kishida, 1913)	節足動物門	クモ形綱	クモ目	トタテグモ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	国
				準絶滅危惧 (NT)

腹部背面は茶褐色で、4~7 対の灰白色の帯が左右斜めに走っている。メスは 12~20 mm、オスは 10~15 mm。社寺の境内、人家近くの崖地や石垣の目地土等の比較的明るい場所に、5~20 cm の住居を掘り生息している。住居入口には、糸で裏打ちされた片開きの扉をつけている。地中の住居内に居るため、メスはほとんど移動せず、9~10 月にかけてメスの住居に移動する途中のオスを発見することが多い。



選定理由

成長が極めて遅いので、繁殖力が弱い。本州・四国・九州に分布。和歌山県では和歌山市、海南市、白浜町、那智勝浦町の 4 市町で生息が確認されている。

現時点での生息地では安定しているものと思われるが、都市またはその周辺部に生息するので、都市部での開発や社寺の改修等によって、減少する可能性が高いと考えられることから、準絶滅危惧 (NT) に選定した。

なお、6 月末~7 月初旬にかけて、冬虫夏草のクモタケが生えていることで、住居を見つけることができる。

執筆者 (関根幹夫)

参考文献
・情報

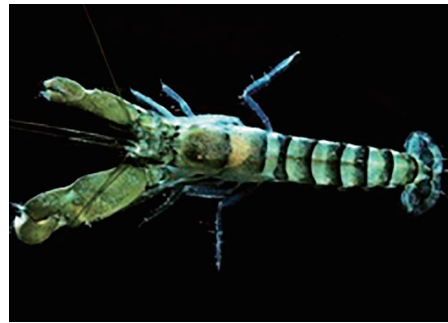
- 1 青木大和. 2019. キシノウエトタテグモは営巣場所としてどのような石垣を好むか? (和歌山城における調査). くものいと, 52: 13-14.
- 2 日本蜘蛛学会. クモ類生息地点情報データベース. <http://www.arachnology.jp/DDBSJ.php> (参照 2021 年 6 月).
- 3 須賀瑛文. 2006. 和歌山県白浜町にキシノウエトタテグモ. 蜘蛛, 39: 904.
- 4 東條 清. 1995. 海南市で発見されたクモタケ (冬虫夏草) について (第 2 報). 和歌山クモの会会報, 5: 1-2.
- 5 東條 清. 2001. 和歌山のクモ. 242pp. 著者自刊.
写真: 関根幹夫撮影 (県外産)

マングローブテッポウエビ *Alpheus nomurai* Anaker, 2023 節足動物門 軟甲綱 十脚目 テッポウエビ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧種 (NT)
--------	------------	----	------	---	---	-------------

選定理由

和歌山県から沖縄本島にかけての泥干潟に生息する中型のテッポウエビ類で、体長は 30 mm ほどになる。マングローブの名が付いているが、マングローブ環境との強い生態的な繋がりはない。本種は有明海から *Alpheus euphrosyne richardsoni* として報告されているが (Miya, 1995)、ニュージーランドがタイプ産地であるこの亜種とは形態的相違点が認められ、近縁の別種 (未記載種) と思われる。県内では田辺市内之浦と御坊市日高川河口から記録されている。



県内では産地が限られた希少種であり、県外においても少産種であることと干潟の衰退に伴う生息環境の悪化に基づき環境省レッドリストにおいて準絶滅危惧種に指定されている。また、本種は日本もしくは東アジア海域の固有種である可能性が持たれる。

執筆者 (野村恵一)

参考文献
・情報

- 1 林 健一. 1998. 日本産エビ類の分類と生態 (101), テッポウエビ科-テッポウエビ属⑩. 海洋と生物, 117: 289-293.
- 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
- 3 Miya, Y. 1995. Four species of *Alpheus* from intertidal and shallow water mudflats in the Sea of Ariake, Kyushu, Japan. Bulletin of the Faculty of Liberal Arts, Nagasaki University, Natural Science, 35: 271-288, figures 1-4.
- 4 大垣俊一・田名瀬英朋・和田恵次. 2001. 和歌山県田辺湾内之浦の海岸生物記録種, 1976-2001. 南紀生物, 43: 102-108.
- 5 大阪市立自然史博物館所蔵標本 (田辺市内之浦産)
- 6 諸喜田茂充・武田正倫. 1991. 汽水・淡水十脚甲殻類. 環境庁 (編), 日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-無脊椎動物編. 213-230. 自然環境研究センター, 東京.
- 7 鏑浦海中公園研究所所蔵標本 (海南市, 有田市有田川河口, 田辺市内之浦産).
- 8 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (日高川産).
- 9 和田恵次所蔵標本 (田辺市内之浦産).
- 10 吉郷英範. 2009. 日本の河口域とアンキアラインで確認されたテッポウエビ科エビ類 (甲殻類: エビ目). 比和科学博物館研究報告, 20: 221-273.
写真: 野村恵一撮影

ヤドリカニダマシ <i>Polyonyx sinensis</i> Stimpson, 1858		節足動物門	軟甲綱	十脚目	カニダマシ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国 準絶滅危惧 (NT)

選定理由

三河湾以南九州までに分布する。和歌山県では和歌川河口から知られている。本種は砂泥質の潮間帯に生息する多毛類であるムギワラムシの棲管内に共生することが知られている。記録が和歌川周辺に限られること及び宿主のムギワラムシの分布域も県北部から中部に限られていることから、準絶滅危惧とした。

執筆者（渡部哲也）



参考文献・情報

- 1 関西総合環境センター. 2003. 紀の川河口をフィールドにした生態系等の調査・研究（干潟調査）報告書.
 - 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141. (和歌川河口から記録)
 - 3 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 4 大阪市立自然史博物館所蔵標本 (和歌川河口から記録)
 - 5 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (和歌川河口名草ノ浜から記録)
- 写真: 渡部哲也撮影 (県外産)

ウチノミカニダマシ <i>Polyonyx utinomii</i> (Miyake, 1943)		節足動物門	軟甲綱	十脚目	カニダマシ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国 絶滅危惧 I B 類 (EN)

選定理由

別名ウチノミヤドリカニダマシ。国内では伊豆半島以南九州有明海までに分布し、基産地は和歌山県白浜町。潮間帯に生息するツバサゴカイの棲管内に共生する。ツバサゴカイの多い地域では10%近い共生率であるが、和歌山県ではツバサゴカイの生息数が多くなく、近年の採集記録もないが、紀伊半島で確認されていることから準絶滅危惧種とした。

執筆者（渡部哲也）



参考文献・情報

- 1 Miyake, S. 1943. Studies on the crab-shaped Anumura of Nippon and adjacent waters. Journal of the Department of Agriculture, Kyushu Imperial University, 7: 49-158.
 - 2 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 3 締次美穂. 2017. ウチノミカニダマシの再発見と生態観察の記録. 南紀生物, 59: 35-39.
- 写真: 渡部哲也撮影 (県外産)

マメコブシガニ <i>Pyrhila pisum</i> (De Haan, 1841)		節足動物門	軟甲綱	十脚目	コブシガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国 —

選定理由

青森県陸奥湾から奄美大島までの範囲に分布するが、生息数は少ないところが多い。干潟の滞筋でよく観察されるが、和歌山県沿岸では北部地域に限られる。これまでの記録は紀の川河口、和歌川河口、有田川河口からである。和歌川河口では近年見られる個体数が減少するとともに、体サイズも小型化する傾向がみられる。

執筆者（和田恵次）



- 1 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
 - 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
 - 3 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 4 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
 - 5 大阪市立自然史博物館所蔵標本.
 - 6 坂田直彦・古賀庸憲・柚原 剛・鈴木孝男・中川雅博・佐々木美樹. 2016. 和歌川河口妹背山周辺の干潟において 2010 年に実施した「干潟生物の市民調査」の結果. 和歌山大学教育学部紀要自然科学, 66: 25-29.
 - 7 坂田直彦・古賀庸憲・柚原 剛・鈴木孝男・中川雅博・佐々木美樹. 2017. 和歌川河口干潟の妹背山観海閣周辺において 2011 年の春と秋に実施した「干潟生物の市民調査」の結果. 和歌山大学教育学部紀要自然科学, 67: 31-39.
 - 8 和歌山県立自然博物館所蔵標本.
 - 9 和田恵次専門調査員現地調査記録.
- 写真: 和田恵次撮影

オキナワヤワラガニ *Neorhynchoplax okinawaensis* (Nakasone & Takeda, 1994) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 ヤワラガニ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	—
--------	------------	----	------	---	---	---

選定理由

静岡県以南、沖縄諸島までに分布する。潮間帯中部から下部に生息し、泥に浅く埋まった石の下等に生息する。同所的にミヤコドリ（貝類）が見られることがある。

和歌山県では田辺湾や那智勝浦町等、県南部に記録が偏る。生息数は多くなく、生息環境がやや特殊であるため準絶滅危惧種とした。

執筆者（渡部哲也）



参考文献・情報

- 1 乾 直人・山川宇宙・碧木健人. 2020. 神奈川県田越川および静岡県青野川から採集された注目すべきカニ類 4 種. 神奈川自然誌資料, 41: 27-31.
 - 2 Ng, P. K. L. & Chuang, C. T. N. 1996. The Hymenosomatidae (Crustacea: Decapoda: Brachyura) of Southeast Asia, with notes on other species. The Raffles Bulletin of Zoology, Supplement, 3: 1-82.
 - 3 環境省. 2020 年度磯・干潟報告書データファイル <http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/>
 - 4 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟（和歌山県那智勝浦町）の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
 - 5 和歌山県立自然博物館所蔵標本（田辺湾から記録）
 - 6 渡部哲也専門調査員現地調査記録（ゆかし潟から記録）
- 写真: 渡部哲也撮影

マキトラノオガニ *Pilumnopus makianus* (Rathbun, 1931) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 ケブカガニ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	—
--------	------------	----	------	---	---	---

選定理由

愛知県以南、瀬戸内海から九州までに分布する。潮間帯中部から下部に生息し、干潟のカキ群集の間隙を好む。

和歌山県では北部から南部まで比較的広範囲から記録があるが生息数は多くなく、生息環境がやや特殊であるため準絶滅危惧種とした。

執筆者（渡部哲也）



参考文献
・情報

- 1 伊勢田真嗣・大谷道夫・木村妙子. 2007. 外来種 *Rhithropanopeus harrisii* ミナトオウギガニ (和名新称) (甲殻亜門: カニ下目: Panopeidae 科) の日本における初記録. 日本ベントス学会誌, 62: 39-44.
- 2 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
- 3 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. 平成30年度モニタリングサイト1000 磯・干潟調査報告書.
- 4 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
- 5 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
- 6 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
- 7 渡部哲也専門調査員現地調査記録 (ゆかし潟から記録).

写真: 渡部哲也撮影

ミナミトラノオガニ *Pilumnopus marginatus* (Stimpson, 1858) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 ケブカガニ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	—
--------	------------	----	------	---	---	---

選定理由

紀伊半島以南沖縄諸島までに分布する。潮間帯下部に生息し、潟湖や河口部の比較的大きな転石下に見られる。

本州における記録は限定的で、紀伊半島南部から三重県を含めた東部までのみである。和歌山県では串本町、那智勝浦町から記録があるが、生息数は多くない。

執筆者 (渡部哲也)



参考文献
・情報

- 1 岸野底・米沢俊彦・野元彰人・木邑聡美・和田恵次. 2001. 奄美大島から記録された汽水産希少カニ類 12 種. 南紀生物, 43: 15-22.
- 2 締次美穂. 2015. 三重県で初記録のミナミトラノオガニ. 南紀生物, 57: 25-26.
- 3 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
- 4 渡部哲也. 2002. 和歌山県で得られたミナミトラノオガニ *Pilumnopus marginatus* (Stimpson, 1858) (オウギガニ科). 南紀生物, 44: 173.
- 5 渡部哲也専門調査員現地調査記録 (闇野川から記録).

写真: 渡部哲也撮影

フジテガニ *Clistocoeloma nobile* Lee, Ng & Ng, 2023 節足動物門 軟甲綱 十脚目 ベンケイガニ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧 (NT)
--------	------------	----	------	---	---	------------

選定理由

本種の国内からの記録は、1998年に紀の川河口で見つかったのが最初で、その後千葉県、静岡県、島根県、徳島県、愛媛県、福岡県、熊本県、沖縄県から記録されているが産地は限られている。和歌山県では、紀の川河口で発見されて以降、和歌川河口と那智勝浦町のゆかし潟から見ついている。本種は河口域の潮上帯付近の転石またはゴミの下に生息するため、護岸工事等で破壊されやすい潮上帯付近の環境の維持が、本種の保全上重要である。

県内で記録される3地域ともその生息数は少なく、個体群としての存続性が危惧されるため、準絶滅危惧と評価した。

執筆者 (和田恵次)



参考文献
・情報

- 唐澤恒夫・木邑聡美・黒田美紀・野元彰人. 2006. 和歌山県和歌川河口域で記録されたフジテガニ（ベンケイガニ科）. 南紀生物, 48: 60-62.
 - 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 野元彰人・淀 真理・木邑聡美・岸野 底・酒野光世・和田恵次. 1999. 紀ノ川河口域で記録されたイワガニ科の6稀種. 南紀生物, 41: 5-9.
 - 大澤正幸・桑原友春・倉田健悟. 2017. 日本海沿岸からのフジテガニの初記録. ホシザキグリーン財団研究報告, (20): 213-218.
 - 高倉仁史・駒井智幸. 2019. フジテガニ *Clistocoeloma villosum* (A. Milne-Edwards, 1869) (十脚目: 短尾下目: イワガニ上科・ベンケイガニ科) の伊豆半島及び房総半島からの新たな記録. Cancer, 28: 25-31.
 - 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (和歌川河口から記録).
 - 和田恵次専門調査員現地調査記録 (ゆかし潟から記録).
 - 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
 - Yuhara, T., Yokooka, H. & Taru, M. 2017. Range extension of the sesamid crab *Clistocoeloma villosum* along the eastern Pacific coast of the Izu Peninsula, Japan. Marine Biodiversity Records, 10: 19.
- 写真: 和田恵次撮影

ウモレベンケイガニ <i>Clistocoeloma sinense</i> Shen, 1933				節足動物門	軟甲綱	十脚目	ベンケイガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	

選定理由

新潟県と東京湾以南沖縄までの塩性湿地に分布する希少種。塩性湿地内の高レベルにある打ち上げ物の下から見つかる。記録される地域は限られているが、東京湾では比較的多く分布している。沖縄の集団は本土産のものとは別種の可能性が高い。集団サイズが小さいことは、本種集団の遺伝的な多様度が低いこと、さらに地域間での遺伝的な分化が顕著にみられることからうかがえる (Yuhara *et al.*, 2014)。和歌山県ではこれまで紀の川河口、和歌川河口、有田川河口、日高川河口、田辺湾周辺、ゆかし潟といった地域からの記録が知られている。ただしいずれの地域でも生息数は少ない。塩性湿地内でも高いレベルに生息することから、護岸等の工事によって生息場所が破壊されるおそれの高い種でもある。



執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- 伊藤正一・本間義治. 2001. 新潟県の沿岸・沖合に産するカニ類. Cancer, 10: 25-34.
 - 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
 - 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. 平成30年度モニタリングサイト1000 磯・干潟調査報告書.
 - 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
 - 永井誠二. 1990. 和歌山県沿岸のカニ類相 IV. 南紀生物, 32: 115-119.
 - 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
 - 大阪市立自然史博物館所蔵標本.
 - 和田恵次専門調査員現地調査記録.
 - 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
 - 和歌山県立自然博物館所蔵標本.
 - Yuhara, T., Kawane, M. & Furota, T. 2014. Genetic population structure of local populations of the endangered saltmarsh sesamid crab *Clistocoeloma sinense* in Japan. PLOS ONE, 9: e84720.
- 写真: 和田恵次撮影

ユビアカベンケイガニ <i>Parasesarma tripectinis</i> (Shen, 1940)	節足動物門	軟甲綱	十脚目	ベンケイガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	国
			—	準絶滅危惧 (NT)

選定理由 神奈川県以南沖縄諸島までの広い分布域をもつが、個体数が数多く見られる地域は限られる。河口域塩性湿地の上部付近を、巣穴をもたず徘徊する。和歌山県では紀の川河口、亀の川、有田川河口、日高川河口、田辺湾、富田川河口、那智勝浦町浦神、ゆかし潟から記録されているが、いずれの地域でも生息数は多くはない。塩性湿地内でも特に高いレベルのところを好むため、護岸工事等で生息地が破壊されやすい。



執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- 1 福井康雄・和田恵次. 1983. 田辺湾南岸の異尾類・短尾類とその分布. 南紀生物, 25: 159-167.
- 2 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
- 3 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. 平成30年度モニタリングサイト1000 磯・干潟調査報告書.
- 4 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
- 5 丸村眞弘. 1993. 日高川河口域のカニ. くろしお, (12): 54-55.
- 6 丸村眞弘・小阪 晃. 2003. 永井誠二コレクション カニ類標本目録. 73pp. 和歌山県立自然博物館, 海南.
- 7 永井誠二. 1990. 和歌山県沿岸のカニ類相 IV. 南紀生物, 32: 115-119.
- 8 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
- 9 大垣俊一・田名瀬英朋・和田恵次. 2001. 和歌山県田辺湾内之浦の海岸生物記録種, 1976-2001. 南紀生物, 43: 102-108.
- 10 和田恵次専門調査員現地調査記録 (富田川河口、日高川河口、ゆかし潟から記録)
- 11 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
- 12 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (亀の川、紀の川、日高川から記録).
- 13 大和茂之・丸村眞弘. 1992. 富田川河口域の甲殻類. くろしお, (11): 28.

写真: 和田恵次撮影

ハマガニ <i>Chasmagnathus convexus</i> (De Haan, 1833)	節足動物門	軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	国
			—	準絶滅危惧 (NT)

選定理由 宮城県以南沖縄までの広い範囲に分布するが、各地で生息数が減る傾向がみられる。河口域塩性湿地の上部から潮上帯にかけて深い巣穴を掘って生息している。ヨシ等を食す植食者で、夜間摂餌活動がみられる。和歌山県では、紀の川河口、有田川河口、日高川河口、田辺湾、富田川河口、ゆかし潟から記録される。塩性湿地上部に樹林帯を擁する日高川河口やゆかし潟では樹林帯下部で比較的多く生息している。護岸工事で破壊されやすい潮間帯上部から潮上帯が生息地になっているため、このような高レベルの岸辺の保全が本種の保全上重要である。



執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- 1 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
- 2 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. 平成30年度モニタリングサイト1000 磯・干潟調査報告書.

参考文献
・情報

- 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
- 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
- 大垣俊一・田名瀬英朋・和田恵次. 2001. 和歌山県田辺湾内之浦の海岸生物記録種, 1976-2001. 南紀生物, 43: 102-108.
- 和田恵次専門調査員現地調査記録 (ゆかし潟から記録).
- 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
- 大和茂之・丸村眞弘. 1992. 富田川河口域の甲殻類. くろしお, (11): 28.
写真: 和田恵次撮影 (県外産)

マメアカイソガニ <i>Cyclograpsus pumilio</i> Hangai & Fukui, 2009				節足動物門	軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	情報不足 (DD)	

選定理由

礫浜の高潮帯から潮上帯にかけて分布する日本固有種で、和歌山県白浜町の海岸 (田辺湾) がタイプ産地である。同属の大型種アカイソガニ *Cyclograpsus intermedius* と混生することがあるが、アカイソガニの生息レベルよりもさらに上部の礫層下部に潜んでいるためアカイソガニよりも見つかりにくい。餌となる打ち上げ海藻が堆積する礫浜に偏って分布する。本種が新種として報告されて以降、各地で調査が進められ、現在は、太平洋岸では房総半島以南種子島まで、日本海岸では石川県以南長崎県までに分布することがわかっている。和歌山県沿岸では、田辺湾の他に、加太周辺、広川町以南すさみ町までの海岸、さらに太地町等から見つかった。しかし生息数はいずれの地域でも少なく、生息地が護岸等により破壊されるおそれが強いため、準絶滅危惧と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- Hangai, R., Kitaura, J., Wada, K. & Fukui, Y. 2009. A new species of *Cyclograpsus* (Brachyura: Varunidae) from Japan, co-occurring with *C. intermedius* Ortmann, 1894. Crustacean Research, 38: 21-27.
- 大阪湾海岸生物研究会. 2018. 大阪湾南東部の岩礁海岸生物相 - 2011~2015 年の調査結果. 自然史研究, 4: 17-38.
- 中岡由紀子・和田恵次. 2014. 礫浜の希少カニ類マメアカイソガニの地理的分布と生息場所特性. 地域自然史と保全, 36: 109-114.
- 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (和歌山市加太、広川町西広海岸、由良町小引、由良町三尾川から記録).
写真: 和田恵次撮影

ヒメアシハラガニ <i>Helicana japonica</i> (K. Sakai & Yatsuzuka, 1980)				節足動物門	軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧 (NT)	

選定理由

砂泥性の干潟に穴居する肉食性のカニである。房総半島以南に広く分布するが、生息密度はどこでも低い。イワガニ類の中では珍しく、鉗脚を垂直に振り回す waving display を示す。和歌山県沿岸では、紀の川河口、和歌川河口、琴の浦、有田川河口、日高川河口、南部、田辺湾、那智勝浦町浦神といった地域から記録があるが、いずれの地域でも生息数は少ない。特に、和歌川河口や田辺湾では、近年目撃



選定理由 例が減っているため、準絶滅危惧と評価した。

執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 1 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
 - 2 丸村眞弘・小阪 晃. 2003. 永井誠二コレクション カニ類標本目録. 73pp. 和歌山県立自然博物館, 海南. (那智勝浦町浦神から記録)
 - 3 永井誠二. 1990. 和歌山県沿岸のカニ類相 IV. 南紀生物, 32: 115-119.
 - 4 Nara, Y., Kitaura, J. & Wada, K. 2006. Comparison of social behaviors among six grapsoid species (Brachyura) of different habitat conditions. Crustacean Research, 35: 56-66.
 - 5 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 6 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
 - 7 大垣俊一・田名瀬英朋・和田恵次. 2001. 和歌山県田辺湾内之浦の海岸生物記録種, 1976-2001. 南紀生物, 43: 102-108.
 - 8 大阪市立自然史博物館所蔵標本 (日高川河口から記録)
 - 9 坂田直彦・古賀庸憲・柚原 剛・鈴木孝男・中川雅博・佐々木美樹. 2016. 和歌川河口妹背山周辺において 2010 年に実施した「干潟生物の市民調査」の結果. 和歌山大学教育学部紀要自然科学, 66: 25-29.
 - 10 坂田直彦・古賀庸憲・柚原 剛・鈴木孝男・中川雅博・佐々木美樹. 2017. 和歌川河口干潟の妹背山観海閣周辺において 2011 年の春と秋に実施した「干潟生物の市民調査」の結果. 和歌山大学教育学部紀要自然科学, 67: 31-39.
 - 11 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (日高川河口、海南市船尾から記録)
- 写真: 和田恵次撮影 (県外産)

ミナミアシハラガニ <i>Pseudohelice subquadrata</i> (Dana, 1851) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 モクズガニ科						
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧 (NT)

選定理由

神奈川県以南沖縄までの広い範囲に分布するが、本土では記録される地域は限られている。沖縄諸島ではマングローブの落葉の重要な分解者となっており、生息数も多い。和歌山県沿岸では日高川河口、日置川河口、ゆかし潟、熊野川河口から記録があるに過ぎない。ハマボウ等の水際樹林の下部を好んで生息するため、護岸工事による生息地の破壊が危惧される。和歌山県内の生息地では、いずれも生息数が極めて少ないため、準絶滅危惧と評価した。



執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 1 唐澤恒夫・野元彰人. 2007. 和歌山県日置川河口域で採集されたミナミアシハラガニ (ベンケイガニ科). 南紀生物, 49: 71-72.
 - 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
 - 3 和田恵次専門調査員現地調査記録 (ゆかし潟から記録).
 - 4 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
 - 5 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (日高川河口から記録).
- 写真: 和田恵次撮影

トリウミアカイソモドキ <i>Sestrostoma toriumii</i> (Takeda, 1974)		節足動物門		軟甲綱		十脚目		モクズガニ科	
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—		国	準絶滅危惧 (NT)		

選定理由

砂泥性干潟に穴居するアナジャコ類・スナモグリ類の巣穴に共生する小型種。青森県以南沖縄諸島までの広い範囲に分布するが、生息数はそれほど多くはない。和歌山県では、紀の川河口、和歌川河口、有田川河口、西広海岸、日高川河口、田辺湾、ゆかし潟から記録があるが、生息数は少ないことから準絶滅危惧と評価した。

執筆者 (和田恵次)



参考文献・情報

- 1 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
 - 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
 - 3 丸村眞弘. 1993. 日高川河口域のカニ. くろしお, (12): 54-55.
 - 4 丸村眞弘. 1994. イワガニ科2稀種の新産地. 南紀生物, 36 (1): 65-66.
 - 5 丸村眞弘・小阪 晃. 2003. 永井誠二コレクション カニ類標本目録. 73pp. 和歌山県立自然博物館, 海南. (日高川河口から記録).
 - 6 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
 - 7 大阪市立自然史博物館所蔵標本 (和歌川河口、内之浦から記録).
 - 8 上出貴士・高橋芳明. 2008. 和歌山県田辺湾内及び内之浦の潮間帯のコアマモ群落におけるベントス群集. 日本ベントス学会誌, 63: 42-55.
 - 9 和田恵次専門調査委員現地調査 (ゆかし潟から記録).
 - 10 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (和歌川河口、西広海岸から記録).
- 写真: 渡部哲也提供 (県外産)

トゲアシヒライソガニモドキ <i>Parapyxidognathus deianira</i> (De Man, 1888) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 モクズガニ科						
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

千葉県以南の河川汽水域上流部の転石下に分布する。和歌山県では、紀の川、有田川、日高川、切目川、芳養川、富田川、ゆかし潟、熊野川から記録されているが、いずれも生息数は少ない。その分布特性から、河口堰設置により生息場所を失うおそれの大きい種であり、その点から準絶滅危惧と評価した。

執筆者 (和田恵次)



参考文献・情報

- 1 浜崎健児・山田 誠・青木美鈴・田中薫子・遊佐陽一・保智巳・和田恵次. 2014. 紀伊半島河川群における十脚甲殻類・水生昆虫・魚類の生息と流域環境との関連性評価. 和田恵次 (編), 源流から河口域までの河川生態系と流域環境との連環構造—紀伊半島の河川群の比較より—, 75-101. 奈良女子大学共生科学研究センター, 奈良.
- 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
- 3 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
- 4 野元彰人・淀 真理・木邑聡美・岸野 底・酒野光世・和田恵次. 1999. 紀ノ川河口域で記録されたイワガニ科の6稀種. 南紀生物, 41: 5-9.
- 5 和田恵次専門調査員現地調査記録 (富田川河口、ゆかし潟から記録).
- 6 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.

参考文献 7 和歌山県立自然博物館所蔵標本（日高川河口、芳養川河口から記録）。
・情報 写真：渡部哲也提供（県外産）

タイワンヒライソモドキ		<i>Ptychognathus ishii</i> Sakai, 1939		節足動物門		軟甲綱		十脚目		モクズガニ科	
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—		国		準絶滅危惧 (NT)			

選定理由

房総半島以南沖縄諸島までの河川汽水域上流部の転石下に分布する。近年記録される地域が増えてきたが、汽水域の上流部に限られるため、河口堰による生息場所破壊が危惧される種である。和歌山県では全県的にほとんどの河川河口域から記録されており、生息地は数多いが、生息数はそれほど多くはない。紀の川河口域では、河口堰の建設に伴って本種の移植が堰下流部になされ、移植先を含む堰下流部の生息数が2001年以降定期的に調べられている（国土交通省近畿地方整備局，2021）。それによると近年は当初の生息数のおよそ1／3くらいに減少している。紀の川河口域での近年の傾向を考慮し、準絶滅危惧と評価した。



執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 1 Fukui, Y. & Wada, K. 1986. Distribution and reproduction of four intertidal crabs (Crustacea, Brachyura) in the Tonda River Estuary, Japan. Marine Ecology Progress Series, 30 : 229-241.
- 2 浜崎健児・山田 誠・青木美鈴・田中薫子・遊佐陽一・保智巳・和田恵次. 2014. 紀伊半島河川群における十脚甲殻類・水生昆虫・魚類の生息と流域環境との関連性評価. 和田恵次（編），源流から河口域までの河川生態系と流域環境との連環構造－紀伊半島の河川群の比較より－，75-101. 奈良女子大学共生科学研究センター，奈良.
- 3 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査（干潟調査）報告書.
- 4 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46 : 137-141.
- 5 国土交通省近畿地方整備局. 2021. 令和2年度紀の川水系河川整備計画に基づく事業等の進捗点検に関する報告書.
- 6 丸村眞弘. 1993. 日高川河口域のカニ. くろしお, (12) : 54-55.
- 7 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44 : 115-121.
- 8 野元彰人・淀 真理・木邑聡美・岸野 底・酒野光世・和田恵次. 1999. 紀ノ川河口域で記録されたイワガニ科の6稀種. 南紀生物, 41 : 5-9.
- 9 大垣俊一・田名瀬英朋・和田恵次. 2001. 和歌山県田辺湾内之浦の海岸生物記録種, 1976-2001. 南紀生物, 43 : 102-108.
- 10 大阪市立自然史博物館所蔵標本（日高川河口、串本町袋より記録）.
- 11 和田恵次専門調査員現地調査記録（富田川河口、ゆかし潟から記録）.
- 12 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟（和歌山県那智勝浦町）の大型底生動物相. 南紀生物, 64 : 26-31.
- 13 和歌山県立自然博物館所蔵標本（紀の川、西広海岸、亀ノ川河口、日高川河口、白浜町阪田から記録）.
- 14 大和茂之・丸村眞弘. 1992. 富田川河口域の甲殻類. くろしお, (11) : 28.

写真：和田恵次撮影

ヒメヒライソモドキ <i>Ptychognathus capillidigitatus</i> Takeda, 1984				節足動物門	軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧 (NT)	

房総半島以南沖縄諸島までの河川河口域の転石地に分布する。本土の生息地では生息数は多くない。和歌山県の富田川河口がタイプ産地であり、本種の生活史も当地で調べられている。県内では、紀の川河口、有田川河口、日高川河口、芳養川河口、会津川河口、富田川河口、日置川河口、鬨野川河口、串本町、田原川河口、太田川河口、ゆかし潟等から記録があるが、生息数はいずれの地域でも多くはない。河川の汽水域に分布するが、近縁種のタイワンヒラドモドキよりは塩分濃度の高い下流部に分布が偏る。



執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 Fukui, Y. & Wada, K. 1986. Distribution and reproduction of four intertidal crabs (Crustacea, Brachyura) in the Tonda River Estuary, Japan. Marine Ecology Progress Series, 30 : 229-241.
- 2 浜崎健児・山田 誠・青木美鈴・田中薫子・遊佐陽一・保智巳・和田恵次. 2014. 紀伊半島河川群における十脚甲殻類・水生昆虫・魚類の生息と流域環境との関連性評価. 和田恵次 (編), 源流から河口域までの河川生態系と流域環境との連環構造—紀伊半島の河川群の比較より—, 75-101. 奈良女子大学共生科学研究センター, 奈良.
- 3 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
- 4 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46 : 137-141.
- 5 丸村眞弘. 1993. 日高川河口域のカニ. くろしお, (12) : 54-55.
- 6 丸村眞弘. 1994. イワガニ科2稀種の新産地. 南紀生物, 36 (1) : 65-66.
- 7 丸村眞弘・小阪 晃. 2003. 永井誠二コレクション カニ類標本目録. 73pp. 和歌山県立自然博物館, 海南.
- 8 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44 : 115-121.
- 9 野元彰人・淀 真理・木邑聡美・岸野 底・酒野光世・和田恵次. 1999. 紀ノ川河口域で記録されたイワガニ科の6稀種. 南紀生物, 41 : 5-9.
- 10 大阪市立自然史博物館所蔵標本 (有田川河口、日高川河口、串本町袋より記録).
- 11 Takeda, M. 1984. A new crab of the family Grapsidae from Japan. Bulletin of the national Science Museum, Tokyo, Series A, 10 : 117-120.
- 12 和田恵次専門調査員現地調査記録 (富田川河口、ゆかし潟から記録).
- 13 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64 : 26-31.
- 14 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (有田川、日高川河口、日置川から記録).

写真：和田恵次撮影

オオヒライソガニ <i>Varuna litterata</i> (Fabricius, 1798)		節足動物門		軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	—

甲幅が最大で 50 mm 近くになる比較的大型の種。河川汽水域から淡水域まで幅広い塩分環境下に分布する。遊泳に適した歩脚をもち、海域でも河川域でも高い分散力をもつとみられる。日本の沿岸では太平洋岸では福島県付近以南、日本海沿岸では新潟県以南と広い分布域をもっている。一方、和歌山県ではこれまで日高川、印南川、太田川、ゆかし潟、熊野川といった紀南地方に限って記録があるが、記録



選定理由 される個体数は多くない。

執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 1 浜崎健児・山田 誠・青木美鈴・田中薫子・遊佐陽一・保智巳・和田恵次. 2014. 紀伊半島河川群における十脚甲殻類・水生昆虫・魚類の生息と流域環境との関連性評価. 和田恵次（編），源流から河口域までの河川生態系と流域環境との連環構造－紀伊半島の河川群の比較より－，75-101. 奈良女子大学共生科学研究センター，奈良.
 - 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物，46：137-141.
 - 3 和田恵次専門調査員現地調査記録（ゆかし潟から記録）.
 - 4 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟（和歌山県那智勝浦町）の大型底生動物相. 南紀生物，64：26-31.
 - 5 和歌山県立自然博物館所蔵標本（日高川河口から記録）.
- 写真：和田恵次撮影

アリアケモドキ	<i>Deiratonotus cristatus</i> (De Man, 1895)	節足動物門	軟甲綱	十脚目	ムツハアリアケガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	－	国

選定理由

北海道から沖縄島までの河川汽水域上流部に分布する。生息基質は主に泥質であるが、干潟上の転石下やヨシ原内、さらには潮下帯の泥質地まで幅広い。大量に見つかるところもあるが、生息数が少ない地域がほとんどで、最近では減少傾向にあるところが多い。そのため日本ベントス学会（2012）では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。和歌山県では中南部に分布が限られ（日高川、芳養川、富田川、浦神、熊野川）、いずれの地域でも確認できる個体数は少ない。本種の日本沿岸の集団は遺伝的に大きく3つのグループに分かれるが、和歌山県の集団は、そのうちの太平洋沿岸グループに入る（Kawamoto *et al.*, 2012）。



執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 1 Kawamoto, M., Wada, K., Kawane, M. & Kamada, M. 2012. Population subdivision of the brackish-water crab *Deiratonotus cristatus* on the Japanese coast. Zoological Science, 29：21-29.
 - 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物，46：137-141.
 - 3 永井誠二. 1990. 和歌山県沿岸のカニ類相 IV. 南紀生物，32：115-119.
 - 4 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑－海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会，秦野.
 - 5 大阪市立自然史博物館所蔵標本（芳養川から記録）.
 - 6 和田恵次. 1983. 和歌山県におけるアリアケモドキの記録. 南紀生物，25：190.
 - 7 和田恵次専門調査員現地調査記録（熊野川から記録）.
- 写真：和田恵次撮影

カワスナガニ	<i>Deiratonotus japonicus</i> (Sakai, 1934)	節足動物門	軟甲綱	十脚目	ムツハリアケガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国
					準絶滅危惧 (NT)

選定理由

房総半島以南沖縄諸島までに分布する日本固有種。清浄な河川河口域の上流部の転石下に生息する。河口堰等で破壊されやすい生息地をもつため、各地で生息数を減らしつつある。地域集団間の遺伝的な相違が顕著であり、和歌山県内に限っても、地域間での遺伝的な分化が認められる。そのため個々の地域集団を保全する意義は大きい。和歌山県では、日高川以南熊野川までの多くの河川河口域から記録されているが、いずれの地域でも確認できる個体数は少なく、近年は見つからない河川もある。



執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 Fukui, Y. & Wada, K. 1986. Distribution and reproduction of four intertidal crabs (Crustacea, Brachyura) in the Tonda River Estuary, Japan. Marine Ecology Progress Series, 30 : 229-241.
- 2 浜崎健児・山田 誠・青木美鈴・田中薫子・遊佐陽一・保智巳・和田恵次. 2014. 紀伊半島河川群における十脚甲殻類・水生昆虫・魚類の生息と流域環境との関連性評価. 和田恵次 (編), 源流から河口域までの河川生態系と流域環境との連環構造—紀伊半島の河川群の比較より—, 75-101. 奈良女子大学共生科学研究センター, 奈良.
- 3 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
- 4 Kawane, M., Wada, K., Kitaura, J. & Watanabe, K. 2005. Taxonomic re-examination of the two camptandriid crab species *Deiratonotus japonicus* (Sakai, 1934) and *D. tondensis* Sakai, 1983, and genetic differentiation among their local populations. Journal of Natural History, 39 : 3903-3918.
- 5 Kawane, M., Wada, K. & Watanabe, K. 2008. Comparisons of genetic population structures in four intertidal brachyuran species of contrasting habitat characteristics. Marine Biology, 156 : 193-203.
- 6 丸村眞弘・小阪 晃. 2003. 永井誠二コレクション カニ類標本目録. 73pp. 和歌山県立自然博物館, 海南.
- 7 和田恵次専門調査員現地調査記録 (ゆかし潟から記録).
- 8 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64 : 26-31.

写真: 和田恵次撮影

チゴイワガニ	<i>Ilyograpsus nodulosus</i> Sakai, 1983	節足動物門	軟甲綱	十脚目	オサガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国
					—

選定理由

神奈川県以南沖縄諸島までに分布する日本固有種。泥質干潟の低潮部付近に分布するが、記録される地域は限られ、生息数も少ないところがほとんどである。和歌山県では、紀の川河口、和歌川河口、琴の浦、有田川河口、日高川河口、田辺湾、ゆかし潟から記録があるが、いずれの地域でも生息数は少ない。田辺湾の個体群については生活史が調べられている (Nakayama & Wada, 2015)。カニ類の中では珍しく雌が雄よりも大きくなる性的二型を示す。



執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46 : 137-141.
- 2 Nakayama, M. & Wada, K. 2015. Life history and behavior of a rare brackish-water crab, *Ilyograpsus nodulosus* (Sakai, 1983) (Macrophthalmidae). Crustacean Research, 44 : 11-19.

参考文献
・情報

3 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44 : 115-121.
4 大阪市立自然史博物館所蔵標本（白浜町池田浦から記録）.
5 和田恵次専門調査員現地調査記録（太地町森浦湾、ゆかし潟から記録）.
6 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟（和歌山県那智勝浦町）の大型底生動物相. 南紀生物, 64 : 26-31.
7 和歌山県立自然博物館所蔵標本（田辺市内之浦、有田川河口から記録）.
写真：渡部哲也提供

オサガニ <i>Macrophthalmus abbreviatus</i> Manning & Holthuis, 1981		節足動物門		軟甲綱		十脚目		オサガニ科	
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	－		国	準絶滅危惧 (NT)		

選定理由

宮城県以南九州までの河川河口部や内湾の干潟低潮帯に生息するが、多くの地域でその個体数は少ない。同属のヤマトオサガニやヒメヤマトオサガニの生息地よりも海寄りの砂質性の干潟に穴居する。和歌山県では、紀の川河口、和歌川河口、海南市船尾、西広海岸、日高川河口、みなべ、田辺湾から記録があるが、その生息数は多くない。比較的多く見られた和歌川河口でも、近年は少なくなっており、また西広海岸や田辺湾では近年見ることができない。



執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

1 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査（干潟調査）報告書.
2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46 : 137-141.
3 永井誠二. 1990. 和歌山県沿岸のカニ類相 IV. 南紀生物, 32 : 115-119.
4 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44 : 115-121.
5 大阪市立自然史博物館所蔵標本（紀の川河口、和歌川河口、西広海岸から記録）
6 坂田直彦・古賀庸憲・柚原 剛・鈴木孝男・中川雅博・佐々木美樹. 2016. 和歌川河口妹背山周辺において2010年に実施した「干潟生物の市民調査」の結果. 和歌山大学教育学部紀要自然科学, 66 : 25-29.
7 和田恵次. 1978. 和歌山県産スナガニ類とその分布について. 南紀生物, 20 : 18-22.
8 和田恵次専門調査員現地調査記録（田辺市内之浦から記録）.
9 和歌山県立自然博物館所蔵標本（紀の川、和歌川、船尾、西広海岸、日高川河口から記録）.
写真：和田恵次撮影（県外産）

スナガニ	<i>Ocypode stimpsoni</i> Ortmann, 1897	節足動物門	軟甲綱	十脚目	スナガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国

選定理由

北海道函館湾から種子島までの砂浜海岸に分布する。近年同属の南方系種のツノメガニやナンヨウスナガニが各地の海岸で増えており、その影響で本種が個体数を減らしたり、消滅したりする地域が西南日本沿岸から知られるようになった。田辺湾でも1970年代には広範にみられた本種が、近年は畠島でごく稀に見つかるに過ぎない。和歌山市の名草ノ浜や琴の浦でも明らかに生息数が減っている。現在和歌山県内では、和歌山市から日高町までの海岸と田辺湾、それに那智勝浦町周辺の海岸が本種の生息地である。本種の全国的な減少傾向を考慮し、和歌山県内の本種集団を準絶滅危惧と評価した。



なお、本種は夜行性であるが、人気の少ない砂浜では昼間活発に地上活動しているのが観察され、特に6月頃の繁殖期には体色が赤くなって活発に waving と発音行動をしているのが見られる。

執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
- 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
- 3 中島東夫. 1988. スナガニの摂食集団と waving 集団について. 南紀生物, 30: 45-50.
- 4 Nakano, T., Kawamura, M., Kobayashi, G., Koizumi, K., Nakayama, R., Sugiyama, T., Shimomura, M. & Asakura, K. 2021. The intertidal microbenthic fauna of the Hatakejima Experimental Field, Wakayama Prefecture, Japan, in 2019. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 46: 1-41.
- 5 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
- 6 野元彰人・渡部哲也・徳丸直輝・酒井 卓・石村理知・香田唯・和田恵次. 2020. 近畿地方における砂浜性スナガニ属4種の18年間にわたる分布の変容ー2002年・2010年・2019年の比較ー. 地域自然史と保全, 42: 45-59.
- 7 大阪市立自然史博物館所蔵標本 (和歌川河口、田辺湾池田浦、那智勝浦町粉白海岸から記録).
- 8 和田恵次. 1978. 和歌山県産スナガニ類とその分布について. 南紀生物, 20: 18-22.
- 9 和田恵次専門調査員現地調査記録 (名草の浜、西広海岸、小浦、玉之浦、那智浜から記録).
- 10 和田恵次・渡部哲也. 2019. 和歌山県田辺湾におけるスナガニ属4種の記録 (2010年). わだつみ, 1: 11-12.
- 11 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (和歌山市毛見から記録).
- 12 渡部哲也・淀 真理・木邑聡美・野元彰人・和田恵次. 2012. 近畿地方中南部沿岸域におけるスナガニ属4種の分布ー2002年と2010年の比較ー. 地域自然史と保全, 34: 27-36.
- 13 淀 真理・渡部哲也・中西夕香・酒野光世・木邑聡美・野元彰人・和田恵次. 2006. 南方系種を含むスナガニ属3種の和歌山市における生息状況: 2000-2003年. 日本ベントス学会誌, 61: 2-7.
- 14 淀 真理・渡部哲也・野元彰人・木邑聡美・和田恵次. 2020. 西日本の砂浜海岸におけるスナガニ属カニ類の記録 (2000-2002年). わだつみ, 2: 18-23.

写真: 和田恵次撮影

ハクセンシオマネキ	<i>Austruca lactea</i> (De Haan, 1835)	節足動物門	軟甲綱	十脚目	スナガニ科
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国 準絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

東京湾から種子島までの広い範囲に分布するが、記録される地域は限られる。やや礫混じりの砂泥性干潟の高潮部付近に穴居し、繁殖期の夏季にはダイナミックな雄の waving が見られる。和歌山県では紀の川河口、和歌川河口、琴の浦、有田川河口、江上川河口、比井川河口、日高川河口、切目川河口、田辺湾、ゆかし潟から記録がある。このうち比較的まとまった個体数が見られるのは、紀の川河口、和歌川河口、日高川河口くらいで、他の地域は生息数が少ない。和歌川河口では 1970 年代にごくわずかししか見られなかったが、1990 年代になって大幅に密度が増えた。しかし最近ではまた減少傾向にある。紀の川河口域では、平成 11 年からほぼ毎年生息個体数のモニタリングが国土交通省近畿地方整備局により行われている。それによれば、全域の個体数は 1,000 個体から 8,000 個体の間を推移しているが、紀の川大堰運用以降は減少傾向がみられており、2019 年には 2,000 個体前後の低い値となっている。



執筆者（和田恵次）

参考文献 ・情報

- 1 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第 7 回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査（干潟調査）報告書.
- 2 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. 平成 30 年度モニタリングサイト 1000 磯・干潟調査報告書.
- 3 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
- 4 切目川ダム環境委員会. 2009. 切目川ダムにおける環境評価について. 和歌山.
- 5 国土交通省近畿地方整備局. 2021. 令和 2 年度紀の川水系河川整備計画に基づく事業等の進捗点検に関する報告書.
- 6 丸村真弘. 1993. 日高川河口域のカニ. くろしお, (12): 54-55.
- 7 丸村真弘. 2000. 内之浦干潟でシオマネキ類 2 種の生息を確認. くろしお, (19): 62.
- 8 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.
- 9 大阪市立自然史博物館所蔵標本（田辺市内之浦から記録）
- 10 坂田直彦・古賀庸憲・柚原 剛・鈴木孝男・中川雅博・佐々木美樹. 2016. 和歌川河口妹背山周辺において 2010 年に実施した「干潟生物の市民調査」の結果. 和歌山大学教育学部紀要自然科学, 66: 25-29.
- 11 坂田直彦・古賀庸憲・柚原 剛・鈴木孝男・中川雅博・佐々木美樹. 2017. 和歌川河口干潟の妹背山観海閣周辺において 2011 年の春と秋に実施した「干潟生物の市民調査」の結果. 和歌山大学教育学部紀要自然科学, 67: 31-39.
- 12 和田恵次. 1978. 和歌山県産スナガニ類とその分布について. 南紀生物, 20: 18-22.
- 13 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟（和歌山県那智勝浦町）の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
- 14 和歌山県立自然博物館所蔵標本（片男波、紀の川、和歌川、船尾、日高川から記録）.
- 15 山本靖子・和田恵次. 2017. ハクセンシオマネキとチゴガニの間には生息場所利用・個体間関係において競争的關係がみられるか？ 日本ベントス学会誌, 71: 78-82.

写真：和田恵次撮影

ワダツミギボシムシ <i>Balanoglossus carnosus</i> (Wiley, 1899) 半索動物門 ギボシムシ綱 ギボシムシ目 ギボシムシ科						
県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

千葉県館山以南の太平洋岸、瀬戸内海、能登半島沿岸から知られる。潮間帯から潮下帯の砂泥底にU字型の巣穴を掘り、その一端に太い紐状の糞塊を積み上げることで生息が確認できる。潮間帯で本種の糞塊が見られるのは国内では田辺湾の畠島くらいしか知られていない。田辺湾からの本種の記録は古くは1911年の標本記録（奈良女子大学所蔵標本）に遡る。田辺湾内の畠島における本種の糞塊記録は1949年以降知られており、特に1973年から1988年までは生息域の広さと糞塊数のデータが得られている。それによれば1970年代には糞塊数は250～450個であったが、1980年代には100個を下回り、しかも年を追って減少し、1988年には13個まで落ち込んだ。近年でも10～15個しか見られていない。このようにかつての生息数から大幅に減少していることから、準絶滅危惧と評価した。



執筆者（和田恵次）

参考文献・情報

- 1 奈良女子大学所蔵標本.
 - 2 西川輝昭. 2018. 桑野久任教授が1911年に採集した奈良女子大学所蔵和歌山県田辺産ギボシムシ類標本. 南紀生物, 60:154-159.
 - 3 西川輝昭. 2020. 和歌山県田辺湾の畠島干潟におけるワダツミギボシムシ糞塊の数と分布 -1970年代の調査から-. 南紀生物, 62:13-18.
 - 4 大垣俊一・田名瀬英明. 1984. 畠島磯観察記録, 1949-1983 その2. 南紀生物, 26:105-111.
 - 5 和田恵次・山本善万. 1989. 畠島実験地におけるワダツミギボシムシ糞塊数の記録 - 1981-1988. 瀬戸臨海実験所年報, (3):47-50.
 - 6 和田恵次専門調査員現地調査記録.
- 写真: 和田恵次撮影

カイウミヒドラ <i>Scuchertinia epiconcha</i> (Stechow, 1908) 刺胞動物門 ヒドロ虫綱 刺糸目 ウミヒドラ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

房総半島以南の岩礁潮間帯のタイドプールに見られる巻貝シワホラダマシ *Cantharus mollis* の殻表上に群体ポリプとして共生する。和歌山県沿岸では、御坊市名田海岸、田辺湾、白浜町番所崎、白浜町見草海岸等から知られる。ただし白浜町番所崎の海岸では近年見られなくなった。田辺湾の畠島においても1949年から1970年まで、たびたび記録が上がっているが、それ以降は見られていない。記録地が限られており、他の岩礁海岸を詳細に調査する必要があるとみて、情報不足と評価した。



執筆者（和田恵次）

参考文献・情報

- 1 今原幸光. 私信.
 - 2 石田 惣. 私信.
 - 3 河村真理子. 私信.
 - 4 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所/白浜水族館. 2018. 白浜の海岸生物観察ガイドー動物・海藻・陸上植物ー. 94pp, 白浜.
 - 5 大垣俊一・田名瀬英明. 1984. 畠島磯観察記録, 1949-1983 その1. 南紀生物, 26:56-61.
 - 6 内田紘臣. 1998. 白浜町見草海岸で観察された刺胞動物と環形動物. くろしお, (17):56-58.
 - 7 和田恵次・渡部哲也専門調査員現地調査記録（御坊市名田海岸から記録）
- 写真: 渡部哲也提供

コマイハナゴケ <i>Cervera komaii</i> (Utinomi, 1950) 刺胞動物門 花虫綱 ウミトサカ目 ウミヅタ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

原始的な八方サンゴ類で、岩礁潮間帯上部の遮蔽された岩棚下面にポリプの群体として付着している。個虫はきれいな淡紅色を呈する。紀伊半島沿岸と三浦半島沿岸から知られ、田辺湾の畠島は基産地である。畠島では1972年以降近年まで記録があるが、年によっては見られないこともある。他には和歌山市加太の田倉崎と城ヶ崎で記録があるが、記録は限られている。なかなか目につきにくい環境にいるため、調査が不十分とみて情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 今原幸光. 私信.
- 2 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所/白浜水族館. 2018. 白浜の海岸生物観察ガイド - 動物・海藻・陸上植物 -. 94pp, 白浜.
- 3 大垣俊一・田名瀬英朋. 1984. 畠島磯観察記録, 1949-1983 その1. 南紀生物, 26: 56-61.
- 4 大阪湾海岸生物研究会. 2018. 大阪湾南東部の岩礁海岸生物相 -2011 ~ 2015 年の調査結果. 自然史研究, 4: 17-38.
- 5 和田恵次専門調査員現地調査記録 (田辺湾畠島から記録)
写真: 河村真理子提供

ホソイソギンチャク属の1種 <i>Metedwardsia</i> sp. 刺胞動物門 花虫綱 イソギンチャク目 ムシモドキギンチャク科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

本イソギンチャクはその形態から、ムシモドキギンチャク科のホソイソギンチャク属に属すると考えられる。本属はタイプ種ホソイソギンチャク *Metedwardsia akkeshi* をタイプ種とする単型属である。タイプ種の模式産地は厚岸 (厚岸湖と推定される) であり、和歌山県とはかなりの距離が離れている上、水温や水質も異なるため、本種はホソイソギンチャクとは別種である可能性が高い。しかし、標本を用いての検証がなされていないことから種を同定するには尚早である。

本イソギンチャクは和歌山県においてはイソギンチャクガイドブックのみの記録となり、執筆者も生体を採取できていないため、「情報不足」と評価した。

執筆者 (泉 貴人)

参考文献・情報

- 1 泉 貴人. 私信.
- 2 Izumi, T., Yanagi, K. & Fujita, T. 2018. Re-description of *Metedwardsia akkeshi* (Cnidaria : Anthozoa : Actiniaria : Edwardsiidae), discovered in Akkeshi, Hokkaido, almost 80 years after original description, with a revision of the diagnosis of genus *Metedwardsia*. Species Diversity, 23: 135-142.
- 3 内田紘臣・楚山勇. 2001. イソギンチャクガイドブック. 157pp. TBS ブリタニカ, 東京.

ムシモドキギンチャク属の1種 <i>Edwardsia</i> sp. 刺胞動物門 花虫綱 イソギンチャク目 ムシモドキギンチャク科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

和歌山市の名草ノ浜で採集された本イソギンチャクは体が前後方向に細長いこと、体壁に刺胞をため込むためのカプセル状の構造である刺胞弾があることから、ムシモドキギンチャク科のムシモドキギンチャク属と判断される。

日本産の同属においては形態が近い種が存在しないため、本種は未記載種である可能性
選定理由 があるが、ムシモドキギンチャク属は 60 種以上の有効種を含んでいるため種同定が難しく、現状では断定はできない。

ムシモドキギンチャク科は砂泥底に埋没して生息するため、個体数の評価が極めて難しい。よって、今回は情報不足 (DD) とした。

執筆者 (泉 貴人)

- 参考文献・情報**
- 1 泉 貴人. 私信.
 - 2 内田紘臣・楚山 勇. 2001. イソギンチャクガイドブック. 157pp. TBS ブリタニカ, 東京.
 - 3 和田恵次専門調査員現地調査記録 (和歌山市名草ノ浜から記録)

オロチヒモムシ <i>Cerebratulus</i> cf. <i>oroichi</i> Kajihara, 2020 紐形動物門 担帽綱 異紐虫目 リネウス科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由 *Cerebratulus marginatus* Renier, 1804 という名で呼ばれるヒモムシは、イタリアのアドリア海北部から原記載されて以降、世界各地から報告されており、国内では「オロチヒモムシ」という和名が当てられてきた。しかし、タイプ産地であるアドリア海以外の場所に棲む「*Cerebratulus marginatus*」は真の *C. marginatus* とは異なる別種であることが 2010 年以降、次第に明らかとなっている。日本に生息する「オロチヒモムシ」に関しては、北海道の厚岸をタイプ産地とする *Cerebratulus oroichi* という学名が提唱されている。和歌山県からは 1954 年に紀伊半島の沖からトロールによって得られた標本が *C. marginatus* として報告されている。これが *C. oroichi* と同種であるかどうかはゲノム情報や内部形態を比較してみないと分からないものの、未記載種である可能性は低くないと思われる。

執筆者 (柁原 宏)

- 参考文献・情報**
- 1 Iwata, F. 1954. Some nemerteans from the coasts of the Kii Peninsula. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 4 : 33-42.
 - 2 Kajihara, H. 2020. Redescription of *Cerebratulus marginatus* auct. (Nemertea : Pilidiophora) from Hokkaido, Japan, as a new species. Zootaxa, 4819 : 295-315.
 - 3 奥田四郎・岩田文男. 1965. おろちひもむし. In 岡田要 (編), 新日本動物図鑑 [上], p. 395. 北隆館, 東京.

ムラサキヒモムシ <i>Corsoua takakurai</i> Hookabe & Kajihara, 2020 紐形動物門 担帽綱 異紐虫目 リネウス科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	情報不足 (DD)

選定理由 本種は 1898 年に神奈川県三崎で発見されてから長い間 *Lineus longifissus* (Hubrecht, 1887) という学名で呼ばれ、ムラサキヒモムシという和名が当てられていた (実際の体色は紫色というよりは黒色に近い)。しかし *Lineus longifissus* のタイプ産地は南アフリカ共和国沖のインド洋マリオン島であり、分布域の違いだけでなく形態的な特徴からも誤同定の可能性が指摘されていた。2020 年に神奈川県三崎をタイプ産地として原記載された *Corsoua takakurai* は、和名で「ムラサキヒモムシ」と



呼ばれていた種を表す有効名である。2019年に和歌山県名草ノ浜から得られた標本は *C. takakurai* の原記載論文で比較観察対象とされ、塩基配列の情報から確実に同種とみなすことのできる記録のうち、これまで知られている中では最も南方のものである。ただし、ムラサキヒモムシは形態的特徴に基づいて熊本県富岡湾からも1952年に報告されているため、潜在的な分布域は本州だけでなく九州あるいはそれよりも南西に広がっている可能性は高い。

執筆者（柁原 宏）

参考文献 ・情報

- 1 Hookabe, N. & Kajihara, H. 2020. Taxonomic reappraisal of *Lineus longifissus* auct. (Nemertea : Pilidiophora) from Japan for the first time in 122 years. *Zoological Science*, 37 : 467-475.
- 2 Iwata, F. 1952. Nemertini from the coasts of Kyusyu. *Journal of the Faculty of Science, Hokkaido University, Series VI*, 11 : 126-148.
- 3 岩田文男. 1965. むらさきひもむし. In 岡田要 (編), 新日本動物図鑑 [上], p. 394. 北隆館, 東京.
- 4 高倉卯三磨. 1898. 三崎近傍産紐蟲 (Nemertine) ノ分類. *動物学雑誌* 10 : 38-44, 116-120, 184-187, 331-337, 424-429.

写真：柁原 宏撮影

ミドリシャミセンガイ類似種		<i>Lingula lepidula</i> A. Adams, 1863		腕足動物門	舌殻綱	舌殻目	シャミセンガイ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	情報不足 (DD)	

選定理由

背腹二枚の薄い殻と細長い肉茎を持つ腕足動物。潮間帯から潮下帯の砂泥に潜って生息する。小さい個体は薄茶色で、半透明の楕円形の殻を持つが、成長とともに殻は分厚く不透明になり、角張り、長方形に近くなる。大きい個体の殻は濃い茶色で殻の辺縁部等がしばしば緑色を呈する。田辺湾では、コアマモ帯や細かい砂泥の干潟において時々採集されるが、生息密度は低い。県内のシャミセンガイ類の生息数は、国内全体での傾向と同様に、干潟環境の減少・悪化によって急速に減少している可能性が高い。ミドリシャミセンガイは、国内では下北半島から南西諸島まで広く分布するとされてきたが、DNA解析によって遺伝的に分化した複数種に分かれることが示唆されている。隠蔽種各種は比較的限られた地域にのみ生息する可能性があり、効果的な保護のために早急な分類の整理と分布域の把握が必要である。最新の系統分類学的研究によって、少なくとも田辺湾の干潟の個体群は、明石をタイプ産地として記載された *Lingula lepidula* であることが示唆されている。



執筆者（後藤龍太郎）

参考文献 ・情報

- 1 Endo, K., Osawa, T. & Kojima, S. 2001. Nuclear and mitochondrial gene sequences reveal unexpected genetic heterogeneity among northern Pacific populations of the brachiopod *Lingula anatina*. *Marine Biology*, 139 : 105-112.
- 2 Goto, R., Takano, T., Seike, K., Yamashita, M., Paulay, G., Rodgers, K.S., Hunter, C.L., Tongkerd, P., Sato, S., Hong, J.S. & Endo, K. 2022. Stasis and diversity in living fossils : Species delimitation and evolution of lingulid brachiopods. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 175 : 107460.
- 3 広瀬雅人・大塚 攻・近藤裕介・平林丈嗣・富川 光・清水則雄. 2012. 瀬戸内海中央部で発見された腕足類 2 種について. 広島大学総合博物館研究報告 4 : 43-48.
- 4 環境省自然環境局生物多様性センター. 2021. 2020 年度モニタリングサイト 1000 磯・干潟調査報告書. 332 pp. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 5 Nishizawa, A., Sarashina, I., Tsujimoto, Y., Iijima, M. & Endo, K. 2010. Artificial fertilization, early development and chromosome numbers in the brachiopod *Lingula anatina*. *Evolution and Development of the Brachiopod Shell : Special Papers in Paleontology*, 84 : 309-316.

写真：後藤龍太郎撮影

スズメガイダマシ	<i>Discradisca stella</i> (Gould, 1862)	腕足動物門	舌殻綱	舌殻目	盤殻科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	国	—

腕足動物の一種。東京湾以南の太平洋岸に分布する。和歌山県では北部の岩礁潮間帯から記録がある。平たい腹殻で基質に付着し、カサガイ様の背殻で背部を覆う。殻周からは棘毛が放射状に生える。継続的に記録はあるが採集箇所が少なく、生息状況の把握が不十分と判断し情報不足とした。

執筆者 (渡部哲也)



- 参考文献・情報
- 1 今原幸光 編著. 2016. 新装改訂 フィールド版 写真でわかる磯の生き物図鑑. 279pp. トンボ出版, 大阪.
 - 2 大阪湾海岸生物研究会. 2018. 大阪湾南東部の岩礁海岸生物相 - 2011~2015 年の調査結果. 自然史研究, 4: 17-38.
 - 3 大谷道夫. 2019. 大阪湾潮間帯で記録されたスズメガイダマシ *Discradisca stella* (Gould, 1860) (腕足動物門, 盤殻科). わだつみ, (1): 7-10.
- 写真: 渡部哲也撮影

ニッポンオフエリア	<i>Travisia japonica</i> Fujiwara, 1933	環形動物門	頭節綱	オフエリアゴカイ目	オフエリアゴカイ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	国	—

日本各地に分布するが、潮間帯から記録があるのは和歌山県以南の西南日本。和歌山県内では和歌山河口や西広海岸から記録がある。保全状態の良好な前浜干潟に生息する。比較的大型かつ独特の強いガス臭を発するため、掘り返すとすぐにわかる。採集地点数が限られており、生息状況の把握が不十分と判断し、情報不足とした。

執筆者 (渡部哲也)

- 参考文献・情報
- 1 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
 - 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (I). 南紀生物, 46: 31-36.
 - 3 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 4 内田紘臣. 1994. 広川町唐尾干潟の多毛類. くろしお, (13): 49-50.
 - 5 和田恵次・渡部哲也専門調査員現地調査記録 (西広海岸から記録).

タマシキゴカイ	<i>Arenicola brasiliensis</i> Nonato, 1958	環形動物門	頭節綱	イトゴカイ目	タマシキゴカイ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	国	—

日本各地に分布するが、東北や関東に比べると瀬戸内海、九州での記録は少ないとされる。和歌山県内では広川町や白浜町、串本町で記録がある。砂質から砂泥質の干潟に生息し、巣穴から特徴的な糞塊を出す。また繁殖期には吹き出しのようなゼラチン状卵塊を地表に形成する。採集地点数は比較のあるものの、近年の情報が少ないため、情報不足とした。

執筆者 (渡部哲也)



- 参考文献・情報
- 1 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.

参考文献
・情報

- 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (I). 南紀生物, 46: 31-36.
- 西村三郎 編著. 1992 原色検索日本海岸動物図鑑 I. 425pp. 72pls. 保育社. 大阪.
- 大垣俊一・田名瀬英朋. 1984. 島嶼観察記録, 1949-1983 その 2. 南紀生物, 26: 105-111.
- 内田紘臣. 1994. 広川町唐尾干潟の多毛類. くろしお, (13): 49-50.
- 和田恵次・渡部哲也専門調査員現地調査記録 (串本町橋杭岩から記録)
写真: 和田恵次提供

シダレイトゴカイ <i>Notomastus latericeus</i> Sars, 1851		環形動物門	頭節綱	イトゴカイ目	イトゴカイ科	
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

赤褐色の細長い紐状のゴカイ。日本全国の砂泥質干潟に分布するが、各地で個体群が減少傾向にある（日本ベントス学会, 2012）。和歌山県では、これまで日高川河口、田辺湾内之浦、ゆかし潟から記録があるだけである。産地が少ないが、埋在性のものなので調査が不十分の可能性が高く、また分類学的検討を要する種ともされているため、情報不足と評価した。

執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査（干潟調査）報告書.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. 平成30年度モニタリングサイト1000 磯・干潟調査報告書.
- 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 泰野.
- 内田紘臣. 1993. 御坊市日高川河口干潟の多毛類. くろしお, (12): 56.
- 山西良平. 私信.

チリメンイトゴカイ <i>Dasybranchus caducus</i> (Grube, 1846)		環形動物門	頭節綱	イトゴカイ目	イトゴカイ科	
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

日本産のイトゴカイ科では最大の種で、本州中部以南南西諸島までの広い範囲の砂泥質干潟に分布するが、東海から四国・中国地方までの地域からの記録はほとんどない（日本ベントス学会, 2012）。和歌山県では、串本町錆浦から記録があるだけである。干潟に埋在して生息するため、見つけにくいこともあり、情報不足と評価した。

執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 内田紘臣. 2008. 和歌山県沿岸の潮間帯における多毛類の近年の推移 - I. 岩礁海岸. 南紀生物, 50: 175-184.

イトメ <i>Tylorrhynchus osawai</i> (Izuka, 1903) 環形動物門 足刺綱 サシバゴカイ目 ゴカイ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

北海道から沖縄までの汽水域の干潟に普通の種で、汽水域上流部（低塩分濃度地域）の指標ベントス種とされてきた。主にヨシ原の根元付近の泥場に穴居するが、近年各地で生息場所が減少しつつある（日本ベントス学会, 2012）。10~11月の大潮の日没後満潮直後に生殖群泳することが知られている。和歌山県沿岸では元々記録が少なく、日高川河口と熊野川河口から知られているに過ぎない。ヨシ原周辺の泥地に埋没して生息するため、見つけにくいこともあり、調査不十分とみて情報不足と評価した。



執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 1 国土交通省. 2021. 河川環境データベース <http://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/>
 - 2 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 3 内田紘臣. 1993. 御坊市日高川河口干潟の多毛類. くろしお, (12): 56.
 - 4 内田紘臣. 2009. 和歌山県沿岸の潮間帯における多毛類相の近年の推移一Ⅱ. 河口干潟. 南紀生物, 51: 99-104.
- 写真: 佐藤正典提供 (県外産)

クロブチボウセキウロコムシ*Polyodontes kuroshio* Jimi, Tomioka, Orita & Kajihara, 2019

環形動物門 足刺綱 サシバゴカイ目 ボウセキウロコムシ科

県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—
--------	-----------	----	------	---	---	---

選定理由

2019 年に高知県沖と和歌山県田辺湾畠島から採れた標本に基づいて新種として報告された。高知県沖は水深 12 m の岩底であるのに対し、畠島では潮間帯の砂底から得られている。比較的大型のウロコムシ類で、背面にある背鱗はきれいな黒ぶち模様を呈する。畠島の記録は 1966 年で、それ以降は見つかっていない。古い記録だけなので、今後見つかる可能性はあるため情報不足と評価した。

執筆者 (和田恵次)

- 参考文献
・情報
- 1 Jimi, N., Tomioka, S., Orita, R. & Kajihara, H. 2019. A new species of *Polyodontes* (Annelida : Acoetidae) from western Japan. *Species Diversity*, 24: 275-279.

ニッポンフサゴカイ <i>Thelepus</i> cf. <i>setosus</i> (Quatrefages, 1866) 環形動物門 溝副触手綱 フサゴカイ目 フサゴカイ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

多数の口触手をもつゴカイで、本州中部から九州までの潮間帯転石下に砂粒を付けた棲管に入って生息する。全国的には個体群の減少傾向が見られる (日本ベントス学会, 2012)。和歌山県では海南市琴の浦、田辺湾、すさみ町里野海岸等から記録があるに過ぎない。砂泥中に埋在するため見つけにくいことと、分類学的検討が必要な種であることから、情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- 1 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (I). 南紀生物, 46: 31-36.
 - 2 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 3 大垣俊一・田名瀬英朋. 1984. 畠島磯観察記録, 1949-1983 その 2. 南紀生物, 26: 105-111.
 - 4 大垣俊一・田名瀬英朋・和田恵次. 2001. 和歌山県田辺湾内之浦の海岸生物記録種, 1976-2001. 南紀生物, 43: 102-108.
 - 5 内田紘臣. 1995. すさみ町里野海岸の花虫類および多毛類. くろしお, (14): 34-36.
 - 6 内田紘臣. 2011. 春の観察会で鳥ノ巣半島沿岸で見られた環形動物多毛類その他. くろしお, (30): 41-49.
- 写真: 渡部哲也提供 (県外産)

クビレクガビル <i>Orobdella angustata</i> Nakano, 2018							環形動物門	環帯綱	ヒル目	クガビル科
県カテゴリー	情報不足 (DD)		旧県	2012	—		国	—		

2012年に和歌山県田辺市護摩壇山より採集された4個体の標本に基づいて新種として記載された。採集地点の標高は約1280 mで、護摩壇山山頂付近に位置する。性成熟時のサイズは不明だが、恐らく5 cm以上、10 cm以下の中型種だと考えられている。生きている



選定理由 時の体色は青黒色を呈する。紀伊半島を含む近畿地方に生息する同属他種よりも、中国・四国・九州地方に生息する種と近縁であることが明らかになっている。現在確認されている生息地は、2012年に発見された田辺市護摩壇山山頂付近のみであるが、より低標高地点を含む周辺の森林環境にも生息している可能性があるため、情報不足と評価した。

執筆者 (中野隆文)

- 参考文献・情報 1 Nakano, T. 2018. A new quadrannulate species of *Orobdella* (Hirudinida : Arhynchobdellida : Orobdellidae) from Kii Peninsula, Japan. *Species Diversity*, 23 : 43-49.
写真：中野隆文撮影

サナダユムシ <i>Ikeda taenioides</i> (Ikeda, 1904) 環形動物門 ミドリユムシ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	情報不足 (DD)

濃褐色の横縞模様のあるテープ状の長い口吻と濃赤褐色のソーセージ状の細長い体幹を持つユムシ類。日本固有種。口吻は2 m以上、体幹は65 cm以上になり、おそらくユムシ類最大種。潮間帯から潮下帯の砂泥に垂直の深い巣穴を掘り、その中に生息する。海底の砂泥面に伸ばした口吻が時々観察されることがあるが、体幹部は常に巣穴深部に留まる



選定理由 ため本体の採集は至難である。実際本体の採集記録は長く途絶えていたが、2019年に88年ぶりに瀬戸内海の干潟において採集された。陸奥湾以南の太平洋、日本海、瀬戸内海等日本各地から報告があるが、その多くの産地で個体群の減少が指摘されている。和歌山県では、1949年出版の書籍に西牟婁郡白浜町からの記録があるのみで、その後報告はなかったが、2018年に田辺湾の干潟から口吻1個体分が採集された。本種は自然度の高い砂泥干潟やアマモ場にしか生息しないため、干潟環境の減少や悪化の影響を強く受けると予想される。大型種だが、砂泥に深く潜る生態ゆえに生息情報は限られている。

執筆者 (後藤龍太郎)

- 参考文献・情報 1 Goto, R., Henmi, Y., Shiozaki, Y. & Itani, G. 2021. Giant spoon worms pumped out of their deep burrows : First collection of the main bodies of *Ikeda taenioides* (Annelida : Thalassematidae : Bonelliinae) in 88 years. *Plankton and Benthos Research*, 16 : 155-164.
2 Goto, R., Monnington, J., Sciberras, M., Hirabayashi, I. & Rouse, G.W. 2020. Phylogeny of Echiura updated, with a revised taxonomy to reflect their placement in Annelida as sister group to Capitellidae. *Invertebrate Systematics*, 34 : 101-111.
3 Goto, R., Sakamoto, S., Hayakawa, J. & Seike, K. 2017. Underwater observations of the giant spoon worm *Ikeda taenioides* (Annelida : Echiura : Ikedidae) in a subtidal soft-bottom environment in northeastern Japan, which survived tsunamis of the 2011 off the Pacific Coast of Tohoku Earthquake. *Journal of Oceanography*, 73 : 103-113.
4 駒井卓. 1949. 動物学上著名な日本産動物. 212 pp. 甲文社, 京都.
5 西川輝昭. 2012. サナダユムシ. In 日本ベントス学会 (編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 238pp. 東海大学出版会, 秦野.

参考文献
・情報

- 大城匡平・平林勲・邊見由美・後藤龍太郎. 2019. サナダユムシ（環形動物門：ユムシ綱：サナダユムシ科）の紀伊半島，日本海及び奄美大島からの記録. 日本ベントス学会誌，74：93-97.
 - 田中正敦・多留聖典. 2021. 写真および標本に基づくサナダユムシ（環形動物門ユムシ類）の駿河湾からの初記録. みちのくベントス，4：36-40.
- 写真：大城匡平提供

スジホシムシモドキ <i>Siphonosoma cumanense</i> (Keferstein, 1867) 環形動物門 ホシムシ綱 スジホシムシ目 スジホシムシ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

陸奥湾以南沖縄までの砂泥質干潟の中下部に生息する。かつて釣り餌用に漁獲されていたこともあるが、現在は各地で減少傾向にあるとされる（日本ベントス学会，2012）。和歌山県沿岸では、和歌山市加太、田辺湾、ゆかし潟から記録がある。特に田辺湾の内之浦のアマモ場では多産し、その生息密度が15~30 / m²と報じられている（上出，2013）。砂泥中に埋没して生息するため、生息状況の把握は不十分とみて情報不足と評価した。



執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. 平成30年度モニタリングサイト1000 磯・干潟調査報告書.
 - 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会，秦野.
 - 大垣俊一・田名瀬英明. 1984. 島嶼磯観察記録，1949-1983 その2. 南紀生物，26：105-111.
 - 大阪湾海岸生物研究会. 2018. 大阪湾南東部の岩礁海岸生物相 - 2011~2015年の調査結果. 自然史研究，4：17-38.
 - 上出貴士. 2013. 和歌山県田辺湾内之浦の潮間帯におけるスジホシムシモドキ *Siphonosoma cumanense* とイケダホシムシ *Golfingia margaritacea margaritacea*（星口動物門，スジホシムシ綱）の分布と生息環境. 南紀生物，55：145-151.
 - 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟（和歌山県那智勝浦町）の大型底生動物相. 南紀生物，64：26-31.
- 写真：和田恵次撮影

ムラクモスジホシムシモドキ <i>Siphonosoma vastum</i> (Selenka & Bulow, 1883) 環形動物門 ホシムシ綱 スジホシムシ目 スジホシムシ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

日本からは、三宅島、和歌山県串本町、沖縄県瀬底島からのみ記録がある希少種。和歌山県串本町の記録では潮間帯から得られたとされている。記録がこのような極めて限定的で、和歌山県沿岸での生息状況も不明であるため、情報不足と評価した。

執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- Cutler, E.B., Cutler, N.J. & Nishikawa, T. 1984. The Sipuncula of Japan : their systematics and distribution. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 29：249-322.
- 大城匡平. 私信.
- 佐藤正典. 私信.

アンチラサメハダホシムシ*Antillesoma antillarum* (Grübe & Oersted, 1858) 環形動物門 ホシムシ綱 サメハダホシムシ目 サメハダホシムシ科

県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—
--------	-----------	----	------	---	---	---

瀬戸内海、有明海、奄美大島、それに和歌山県から記録される（日本ベントス学会，2012）。ただし和歌山県内の産地は不明。潮間帯から潮下帯の砂泥底や礫底から得られる。メキシコのカリブ海側と太平洋側、それに西部太平洋のタイの集団間で分子系統解析が行われた結果（Siva-Morales *et al.*, 2019）によるとこれら3つの集団は互いに遺伝的に異なっており、西部太平洋産のものは別種になる可能性が高い。そのため日本産の本種は分

類学的課題を残すものである。県内における記録が不明な点があるとともに、本種の分類学的課題も考慮し、情報不足と評価した。

執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 1 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 2 大城匡平. 私信.
- 3 Silva-Morales, I., López-Aquino, M. J., Islas-Villanueva, V., Ruiz-Escobar, F. & Bastida-Zavala, J. R. 2019. Morphological and molecular differences between the Amphiamerican populations of *Antillesoma* (Sipuncula : Antillesomatidae), with the description of a new species. Revista de Biología Tropical, 67 (SS) Suplemento : S101-S109.

キイコナダニモドキ *Malaconothrus kiensis* Yamamoto, 1996 節足動物門 クモ形綱 ダニ目 コナダニモドキ科

県カテゴリー 情報不足 (DD) 旧県 2012 国 -

選定理由

すさみ町・琴の滝周辺のかかなり湿った森林腐植土壌から新種として報告されたもので、体長は 0.45 mm と中型の種である。以後、美里町の高城谷からも報告されている。新種として報告されて以来、20 数年が経つが、他地域からの報告はなく、生息は限られた場所と思われる。本種に似た種としては、神奈川県箱根の湿原からヨシノリコナダニモドキ、沖縄県西表島カンピレーの滝付近の腐植からイリオモテコナダニモドキが報告されている。本種は紀伊半島から採集されたので、キイコナダニモドキと命名された。頭部先端の毛の形状で、近縁他種から区別される。今までに採集されている場所をみると、滝や溪谷等といった高湿な環境であり、この科に含まれる多くの種は、その生息に同じような特徴を持っている。そのため、森林が伐採されたりして河川の環境に変化が起こったり、腐植が乾燥したりするようになると生息していない種と思われる。



執筆者（山本佳範）

参考文献
・情報

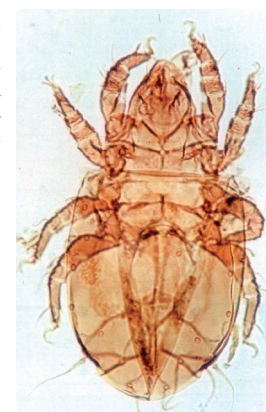
- 1 Yamamoto, Y. 1996. Two new oribatid mites of the family Malaconothridae in Wakayama Prefecture, central Japan (Acari : Oribatei). Acta Arachnologica, 45 (2) : 119-124.
- 2 山本佳範. 2005. 美里町誌・自然編 私たちの町. 第3章 土壤動物-特にササラダニ類相について. 127-144. 美里. 写真：山本佳範撮影

アラゲコナダニモドキ *Trimalaconothrus barbatus* Yamamoto, 1977 節足動物門 クモ形綱 ダニ目 コナダニモドキ科

県カテゴリー 情報不足 (DD) 旧県 2012 国 -

選定理由

神奈川県箱根畑宿の沢にある岩上のコケから新種として報告された種で、体長は 0.53 mm と中型の種である。胴体部背面の毛が非常に荒々しいため、この名前を付けられた。紀の川市・龍門山山頂付近に広がるイワシモツケ群落のコケ類から採集され、田辺市本宮町の大杉谷・黒蔵谷からも報告されている。和歌山県外の分布としては、愛媛県小田町本谷から記録があるのみである。本種の生息にも高湿な環境が不可欠であり、森林伐採等で林床が乾燥すると生息できなくなるおそれがある。



執筆者（山本佳範）

参考文献
・情報

- 1 Yamamoto, Y. 1977. Oribatid fauna of the experimental forest of Tamagawa University in Hakone, central Japan. 1. *Oribatei inferiores*. Bulletin of Biogeographical Society of Japan, 32 (4) : 33-42.
- 2 山本佳範. 1981. 龍門山（蛇紋岩地帯）における土壌小形節足動物相，特にササラダニ類について. 和歌山県自然環境保全地域候補地調査報告書，92-117.
- 3 山本佳範. 2002. 大杉谷・黒蔵谷におけるササラダニ類. 大塔山系大杉大小屋国有林自然環境調査報告集. 195-207. 和歌山県自然環境研究会，田辺.
- 4 山本佳範・山本栄治. 2000. 小田深山とその周辺地域におけるサラダニ類. 小田深山の自然 I, 725-800. 小田.

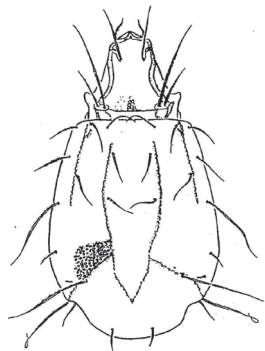
写真：山本佳範撮影

ツノコナダニモドキ *Trimalaconothrus wuyanensis* Yamamoto, Aoki, Wang & Hu, 1993 節足動物門 クモ形綱 ダニ目 コナダニモドキ科

県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	国
			-	-

選定理由

中国浙江省烏岩嶺の照葉樹林内にある、滝壺近くの腐植から新種として報告された種で、田辺市本宮町の黒蔵谷から出現したものが、日本新記録として報告されている。体長は 0.57 mm と中型のササラダニ類である。最初の発見は、神奈川県箱根畑宿であったが、1 個体のみの出現であったため、新種記載が出来ていなかった。和歌山県外では滋賀県高島市朽木生杉のブナ林から出現しており、滋賀県のレッドデータ種としても掲載されている。また、青木が日本列島 2,900 地点を調査した標本を検鏡し、長崎県の対馬から 1 個体を確認した。また、筆者が全国調査をした際、鹿児島県の霧島町からも採集している。本種の生息にも高湿な環境が不可欠で有り、森林伐採等により腐植が乾燥すると生息できない。



執筆者（山本佳範）

参考文献
・情報

- 1 滋賀県生きもの総合調査委員会編. 2020. 滋賀県で大切にすべき野生生物 滋賀県レッドデータブック 2020 年版. 滋賀県自然環境保全課，大津.
- 2 山本佳範. 2002. 大杉谷・黒蔵谷におけるササラダニ類. 大塔山系大杉大小屋国有林自然環境調査報告集. 195-207. 和歌山県自然環境研究会，田辺.
- 3 Yamamoto, Y., Aoki, J., Wang, X. & Hu, S. 1993. Oribatid mites from subtropical forest of Wu-yan-ling, East China. (1) Two new species of the family Malaconothridae (Acari : Oribatei). Edaphologia, 49 : 25-31.

図：山本佳範原図

オオギホソダニ *Licnodamaeus pulcherrimus* (Paoli, 1908) 節足動物門 クモ形綱 ダニ目 オオギホソダニ科

県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	国
			-	-

選定理由

ハンガリー、オーストリア、ポーランド、スペイン、チェコ等、ヨーロッパ各地に分布する種である。体長は 0.3 mm と小型の種であり、体型は細長い。この仲間は体表面全体が顆粒状の構造を持つグループと、網目状の構造を持つグループに別れ、本種は後者に当たる。頭部の両側にある胴感毛が、扇のように広がっていることから、この名前が付けられた。国内では 3 種が知られており、1 種は樹上環境からである。天神崎から日本新記録種として報告され、その後、鹿児島県徳之島、伊丁島、伊江島、渡名島等の南西諸島からも報告されているものの、発見から 40 数年を経過しても報告例が少ない。



執筆者（山本佳範）

参考文献
・情報

- 1 青木淳一. 2009. 南西諸島のササラダニ類. 222pp. 東海大学出版会，秦野.
- 2 山本佳範. 1979. 天神崎自然観察地域設置調査報告書 (7) ササラダニ類. 日本自然保護協会調査報告書，59 : 43-50, 99-101, 写真 : 84-88.
- 3 山本佳範. 1979. ササラダニ類の日本新記録種 2 種について. 南紀生物，21 (2) : 78-80. 写真：山本佳範撮影

ケタスケチビイブシダニ	<i>Microtegeus asiaticus</i> Aoki & Yamamoto, 2000	節足動物門	クモ形綱	ダニ目	チビイブシダニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国

中国雲南省にある玉龍雪山の、標高 2,800 m 付近のマツ林から新種として報告された種で、和歌山県下では田辺市の大杉谷、黒蔵谷から日本新記録種として報告されている。ササラダニ類の中では 0.27 mm と小型の種である。日本でチビイブシダニ科の種は、本種以外は 2 種知られているが、いずれも南西諸島からの報告である。頭部の桁が幅広く発達しており、網目状に透けていることからこの名前が付けられた。国内では、和歌山県のみからの出現で、他地域からの報告はない。

執筆者 (山本佳範)



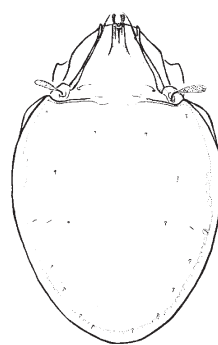
参考文献 ・情報

- 1 青木淳一. 2009. 南西諸島のササラダニ類. 222pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 2 Aoki, J. & Yamamoto, Y. 2000. Three new species of oribatid mites from Mt. Yulongxueshan, Yunnan Province in China (Acari : Oribatida). Taxonomical studies on the soil fauna Province in southwest China. 7-12. Tokai University Press, Hadano.
- 3 山本佳範. 2002. 大杉谷・黒蔵谷におけるササラダニ類. 大塔山系大杉大小屋国有林自然環境調査報告集. 195-207. 和歌山県自然環境研究会, 田辺.

写真：山本佳範撮影

チビハネアシダニ	<i>Microzetorchestes emeryi</i> (Coggi, 1989)	節足動物門	クモ形綱	ダニ目	ハネアシダニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国

この種はイタリアで新種記載されたもので、ハンガリー、チェコ等、ヨーロッパの各地とロシアから報告されている。田辺市天神崎の丸山において、ウバメガシ林の腐植土壌から見つかり、日本新記録種として報告された。ハネアシダニ科の中では、体長が 0.36 mm と小さいので、新たに属が設けられ、和名もチビハネアシダニと名付けられた。世界で本属は 1 種のみである。天神崎で見つかった当時、アジアでも初めての記録であったが、その後、韓国からも見つっている。国内での分布は天神崎の他、東京都渋谷区にある常陸松御用邸の竹林から見つっているだけで、非常に分布の限られた種である。



執筆者 (山本佳範)

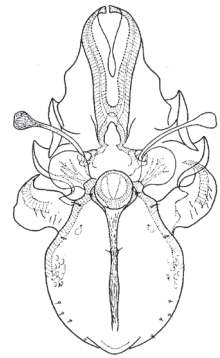
参考文献 ・情報

- 1 青木淳一. 2005. 常陸松御用邸のササラダニ類. 国立科学博物館専報, (39) : 479-483.
- 2 Choi, S. S. 1986. The oribatid mites (Acari : Cryptostigmata) of Korea (6). Thesis Collection Won Kwang University, 20 : 109-127.
- 3 山本佳範. 1979. 天神崎自然観察地域設置調査報告書 (7) ササラダニ類. 日本自然保護協会調査報告書, 59 : 43-50, 99-101, 84-88.
- 4 山本佳範. 1979. ササラダニ類の日本新記録種 2 種について. 南紀生物, 21 (2) : 78-80.

図：山本佳範原図

エボシダニ <i>Idiozetes erectus</i> Aoki, 1976 節足動物門 クモ形綱 ダニ目 エボシダニ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

西マレーシアから新科・新属・新種として報告された熱帯系の種で、体長が0.29 mmと、ササラダニ類の中では小型である。体型が特異で、烏帽子に似ていることからこの名前を付けられた。和歌山市の友ヶ島（沖ノ島）から日本新記録種として報告されたもので、和歌山県下で見ついているのは友ヶ島のスダジイ林のみであり、県外では福岡県の姫島、鹿児島県の悪石島、中之島、沖縄県の久米島、石垣島、西表島等の南西諸島から報告がある。1983年の友ヶ島での発見当時、スダジイ林から多くの個体が採集されたが、タイワンジカ（交雑種）が、当時よりもかなり増加していることに起因してか、下草がなくなり、低木も育たないことから林床が乾燥し、森林も荒廃し、エボシダニにおいては、30数年を経て個体数を減じており、2020年10月の調査では、1個体も採集されなかった。



執筆者（山本佳範）

- 参考文献・情報
- 1 Aoki, J. 1976. Oribatid mites from the IBP study area, Pasoh Forest Reserve, West Malaysia. Nature and Life in South East Asia, 7, 39-59.
 - 2 青木淳一. 2010. 南西諸島のササラダニ類. 222pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 3 久保田直. 1987. 姫島（福岡県）におけるササラダニ類の群集構造. 生物福岡, 27: 9-16.
 - 4 山本佳範. 1983. 友ヶ島における土壌小形節足動物相, 特にササラダニ類相について. 友ヶ島学術調査, 133-160. 和歌山.
- 図: Aoki (1976) 典拠

イソタナグモ <i>Paratheuma shirahamaensis</i> (Oi, 1960)		節足動物門		クモ形綱	クモ目	ハグモ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

頭胸部は幅広く、黄褐色。腹部は長卵形で腹部背面の黒褐色の地に、かすかに山形斑紋が見える。メスは6~8 mm、オスは7~8 mm。海浜性のクモで、潮上帯の転石のすき間やくぼみ、砂浜海岸の石下等に管状の住居をつくり、入口に棚網を張る。満潮時に海面下になるような場所にも営巣することがある。コンクリート護岸には見られない。日本全土に分布。

選定理由 和歌山県（白浜町白浜）が種の模式産地。友ヶ島および紀南地方で記録があるが採集例は少ない。海浜という生息環境に適応したクモとして重要な種である。



本種の生息に適した転石の多い干潟や岩場のある自然海岸が減っており、愛媛県松山市では、近縁な外来種であるシマイソタナグモが確認され、生息環境が競合する可能性が指摘されている。今後の生息状況の動向に注意が必要であることから情報不足（DD）に選定した。

執筆者（関根幹夫）

- 参考文献・情報
- 1 大井良次. 1960. 京都瀬戸臨海実験所附近に産する海浜性の蜘蛛について. Acta Arachnologica, 17 (1): 3-8.
 - 2 東條 清. 2001. 和歌山のクモ. 242pp. 著者自刊.
 - 3 八木沼健夫. 1990. イソタナグモの学名と分布. 南紀生物, 32 (1): 1-6.
- 写真: 関根幹夫撮影

ヤマトウシオグモ <i>Desis japonica</i> Yaginuma, 1956							節足動物門	クモ形綱	クモ目	ウシオグモ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)		旧県	2012	—		国	情報不足 (DD)		

体全体黒褐色。頭部と胸部の境界は不明瞭。腹部に長毛が見られる。サイズはメス及びオスともに 6 mm 前後で、上顎を加えると体長は 8 mm に達する。海岸の岩場、サンゴ礁、干潟等の潮間帯に生息し、岩のすき間やくぼみ、石の下等に住居を作り中に潜む。満潮時には住居は海水中に没するが、海水は住居の中までは侵入しない。潮が引くと、岩の上を歩き回って海浜性の等脚類や昆虫類等の小さな節足動物を捕食する。和歌山県（白浜町湯崎）が本種の模式産地である。日本固有種。和歌山県・長崎県・熊本県・式根島・宝島・沖縄島で生息が確認されているものの、分布は極めて局所的である。潮間帯という特異な生息環境に適応したクモで、ミズグモ等とともにクモ類の水環境への適応進化を研究する上で重要な種である。

和歌山県では、1954 年の採取記録以降の情報が無いことから、情報不足 (DD) に選定した。
執筆者（関根幹夫）

参考文献・情報	1 東條 清. 2001. 和歌山のクモ. 242pp. 著者自刊. 2 Yaginuma, T. 1956. A new species of marine spider <i>Desis</i> from Japan. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 5 : 363-366.
---------	--

ヒトエグモ <i>Plator nipponicus</i> (Kishida, 1914) 節足動物門 クモ形綱 クモ目 ヒトエグモ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

日本のクモ類の内、最も体が扁平なクモである。頭胸部と歩脚は黄褐色ないし明赤褐色、腹部は灰褐色。メス 6~8 mm、オス 5~8 mm。旧家や古い社寺の屋内外の柱と敷居のすき間、石灯籠のすき間や大木の樹皮下等に身を潜めている。隙間から外に眼を向けて待ち伏せ、近づいた獲物（アリ類やダンゴムシ・ヤスデ）を左右の第 1 脚・2 脚で抱え込み挟んで捕え咬みついて食べる。静岡県・滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県でのみ生息が確認されており、全国的にみて特異な分布をしている。



和歌山県では、湯浅町の 1 ヶ所での記録（2007 年、2008 年）があるのみで希少である。この記録以降の情報が無いため、情報不足 (DD) に選定した。
執筆者（関根幹夫）

参考文献・情報	1 楠井善久. 2008. ヒトエグモの和歌山県湯浅町における分布記録. 南紀生物, 50 (1) : 163-164. 写真：関根幹夫撮影（県外産）
---------	--

カシマセスジアカムカデ ^a <i>Scolopocryptops rubiginosus kashimensis</i> (Miyosi, 1957) 節足動物門 ムカデ綱 オオムカデ目 アカムカデ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

本亜種は、1956 年に田辺市新庄町神島で採集され、同属のセスジアカムカデの亜種として 1957 年に記載された。体長は約 40~50 mm、体は紅褐色あるいは暗褐色をする。セスジアカムカデに似て胴節背面の背板に並行する 2 縦溝があるが、最後の 2 対の歩肢（第 22・23 番目）の前腿節後端部、腿節、脛節、第 1・第 2 付節に短刺毛が密生する点で区別される。和歌山県の他に東京や伊豆諸島から記録される。平地の人家周辺や森林の土壌中、石の下、倒木下や樹皮下に生息する。晩冬から初夏にかけて産卵期を迎え、産み付けた卵を体の腹側で卵塊にして歩肢で包み、幼虫が孵化して独立行動ができるまで保護する。

選定理由

これまで、県内各地で現地調査が行われたが田辺市の神島にのみ生息が確認されている。本亜種の生息域が限定的な可能性があり、その場合土地開発や森林伐採等が個体群維持に直接影響することが考えられる。今後の詳細な調査が求められる。

執筆者（石井 清）

参考文献・情報

- 1 三好保徳. 1957. 日本産倍足類及び唇足類の分類学的研究, 20. ヤスデの 1 新属とムカデの 1 新種及び 1 新亜種. 動物学雑誌, 66 (6) : 264-267.
- 2 吉田元重. 1997. 和歌山県のムカデ類. 南紀生物, 49 (2) : 135-136.

モモジムカデ		<i>Momophilus serratus</i> Takakuwa, 1937		節足動物門	ムカデ綱	ジムカデ目	マツジムカデ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—	

選定理由

本種は、体長が約 35 mm、体は黄色を呈し、歩肢は 45~49 対を有する細長いジムカデ類の一種である。1935 年に三重県鳥羽市答志島西端の桃取の海岸で波打ち際から 2 匹が採集され、1937 年に新属新種として記載された。本属のムカデは本種のみである。その後、高知県高知市の桂浜から記録され、和歌山県においては和歌山市の友ヶ島に生息することが報告された。日本においてはこれらの産地以外に発見されていない。和歌山県においても詳細な分布や生態等の情報が乏しく、また海岸という限られた生息域の改変による個体群へのダメージも懸念される。

執筆者（石井 清）

参考文献・情報

- 1 Takakuwa, Y. 1937. Über eine neue Gattung und eine neue Art von Schendylidae aus Japan. Zoological Magazine, 49 (1) : 1-4.
- 2 吉田元重. 1997. 和歌山県のムカデ類. 南紀生物, 49 (2) : 135-136.

クロヒメヤスデ ^a <i>Karteroiulus niger</i> Attems, 1909 節足動物門 ヤスデ綱 ヒメヤスデ目 クロヒメヤスデ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

本種は、体が黒褐色で丸紐状をなし、胴部が 56-62 節からなり、体長約 65 mm に達する大型のヤスデである。雄の第 1 歩肢は肥厚しており、その第 4 節が膨大となって内側に長毛束が生える。眼は約 70 個の単眼が約 8 列に並ぶ。本州、四国、九州に分布する。和歌山県では護摩壇山、東牟婁郡那智勝浦町的那智大滝付近の森林地帯や、大塔山ブナ林から記録されている。自然度の高い森林に生息する代表種である。倒木や立ち枯れ木の樹皮下に集中して生息することが多く、個体数が必ずしも多くない。森林伐採等の環境改変は生息に直接的な影響をもたらすと考えられるが、本種の詳細な分布や生態に関する情報が不足している。



執筆者（石井 清）

参考文献・情報

- 1 湊 宏. 1968. 紀伊半島南部の倍脚類について. 南紀生物, 10 (1 & 2) : 19-25.
 - 2 湊 宏. 1982. 6. ヤスデ類. 白浜の自然. 白浜町誌 (自然編). p.139. 白浜町誌編さん委員会, 白浜.
 - 3 湊 宏. 2002. 黒蔵谷を中心とする大塔山系のヤスデ類 (倍脚類) 相. 大塔山系大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林自然環境調査報告集. p. 189-194. 和歌山県自然環境研究会, 田辺.
- 写真：石井 清撮影

キイギボウシヤスデ <i>Siphonophora</i> sp. 節足動物門 ヤスデ綱 ギボウシヤスデ目 ギボウシヤスデ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

ギボウシヤスデ類は熱帯、亜熱帯地方に分布する。日本では沖縄、九州（執筆者採集）、本州に生息する。和歌山県での発見は、1969年に旧西牟婁郡大塔村富里大塔山ブナ林（標高1,000 m）で湊 宏博士によってなされ、更に田辺市中辺路町大内川（春日神社）での生息も確認された。同博士は、1987年にギボウシヤスデ属に関する論文（南紀生物，29（2）：127-128）の中でキイギボウシヤスデの仮称名を与えた。本種の新種としての記載はまだ行われていない。本種は、体長約10 mm、体は黄白色を呈する。触覚は頭部に対して太く大きい。口器構造は、一般的なヤスデ類の構造とは異なり頭部前方が吻状に突出し、退化した顎唇と一体化する。詳細な分布と生態についての情報は少なく、また種属の分類学上の再検討が必要である。

執筆者（石井 清）

参考文献・情報

- 1 湊 宏. 1973. 南紀における南方系のヤスデについて, TAKAKUWAIA, (6) : 1-2.
- 2 湊 宏. 1987. 紀伊半島のヤスデ類相 (I) —ギボウシヤスデ属, 南紀生物, 29 (2) : 127-128.
- 3 湊 宏. 2002. 黒蔵谷を中心とする大塔山系のヤスデ類 (倍足類) 相. 大塔山系大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林自然環境調査報告集, p. 189-194. 和歌山県自然環境研究会, 田辺.

ネンジュヤスデ <i>Sinostemmiulus japonicus</i> Murakami, 1980		節足動物門		ヤスデ綱	ヒメヤスデ目	カザアナヤスデ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

本種は体長約17 mm、頭部と第1~4 胴節が白色、それ以降が褐色を呈する。頭部ははっきりとした単眼をもつ。胴部は約40 節からなり毛が生えず、節間のくびれは明らかである。後環節の背面正中に縫合隆起線がある。日本では本州（奈良県、和歌山県、岡山県）と九州（大分県、熊本県）に分布する。県内では大塔山山頂ブナ林、西牟婁郡白浜町庄川、那智勝浦町から記録される。調査地点数が少ないながらも、他県での生息地を参考にするに自然植生を代表する指標種と考えられる。今後、更に県内の分布状況を明らかにし、生息地の改変等の影響について調べる必要がある。

執筆者（石井 清）

参考文献・情報

- 1 湊 宏. 2002. 黒蔵谷を中心とする大塔山系のヤスデ類 (倍足類) 相. 大塔山系大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林自然環境調査報告集, p. 189-194. 和歌山県自然環境研究会, 田辺.
- 2 西川喜朗・村上好央. 1991. 日本産倍脚類の分布記録 (I). 追手門学院大学文学部紀要, (25) : 291-313.

シマトラフヒメシャコ <i>Bigelowina phalangium</i> (Fabricius, 1798)		節足動物門		軟甲綱		口脚目		ヒメシャコ科	
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—		国	—		

選定理由

国内では神奈川県から瀬戸内海、九州と沖縄で記録があるが、和歌山県内では1930年代に箕島で記録があるのみ。潮間帯下部から浅海域の砂底や砂泥底に生息する。和歌山県内では古い記録しかないが、近年になって近隣海域での報告もあるため情報不足とした。

執筆者（渡部哲也）

参考文献・情報

- 1 Komai, T., 1938. Stomatopoda occurring in the vicinity of Kii Peninsula. Annotationes Zoologicae Japonenses, 17 : 264-275.
- 2 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 3 塩崎祐斗・邊見由美・後藤龍太郎・伊谷 行・有山啓之. 2020. 瀬戸内海四国沿岸からのシマトラフヒメシャコの記録. Cancer, 29 : e130-e135.

和名なし <i>Phreatoasellus minatoi</i> (Matsumoto, 1978) 節足動物門 軟甲綱 等脚目 ミズムシ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

本種は色素がなく、本属の中ではやや小型で体長 6.3 mm まで。体長は体幅の 5.3 倍。腹尾節は長方形で幅は長さの 4 分の 3。第 1 触角の鞭部は 7 節、第 2 触角は体長とほぼ同長で、鞭部は 42 節まで。第 1 小顎底節内葉に 5 本の剛毛がある。雄第 1 腹肢原節に 2 本の鉤がある。雄第 2 腹肢内肢は豆型で強く膨らむ。腹尾節は丸みを帯びた長方形で長さは幅の 1.35 倍。尾肢は腹尾節とほぼ同長で、内肢は原節とほぼ同長で、外肢は内肢よりやや短い。

本種は旧西牟婁郡大塔村鮎川下平の遮蔽された横坑道からみついている。地下水生ミズムシ類の分布は断続的であることが多く、その後の発見例がないと思われるが、地下種の調査は困難であるのでその状況は不明。

執筆者 (布村 昇)

- 参考文献・情報 1 Matsumoto, K. 1978. Three new species of subterranean aselids from southern Kyushu and the Kii Peninsula, Japan. Journal of the Speleological Society of Japan, 3 : 20-34.

ツノホラワラジムシ <i>Nippononethes cornutus</i> (Nunomura, 1983) 節足動物門 軟甲綱 等脚目 ナガワラジムシ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

体長 4.7 mm までで最大幅の 2.1 倍。黄白色で無眼。第 1 触角の第 3 節に 2 本の剛毛がある。第 2 触角鞭部は 3 節あるが、分節が不明瞭。頭部前側縁に突起が明瞭。頭部や胸部背面には微小な顆粒が見られる。雄第 1 小顎基節内葉に 12 本の歯がある。腹尾節は短く、その後端は截形。雄第 1 腹肢内肢末節は細く短い剛毛が疎らにみられる。雄第 2 腹肢内肢先端は腎臓形で歯状の刺がない。今まで旧龍神村や旧大塔村の廃坑だけから知られている。既知の産地が人工的な環境であることから、近隣の土壌中にも生息している可能性が高いと思われるので、このような環境の調査が必要である。

執筆者 (布村 昇)

- 参考文献・情報 1 Nunomura, N. 1983. Studies on the terrestrial isopod crustaceans in Japan I. Taxonomy of the families Ligiidae, Trichoniscidae and Olbrinidae. Bulletin of the Toyama Science Museum, 5 : 23-68.

キイホラワラジムシ <i>Nippononethes kiiensis</i> (Nunomura, 1990) 節足動物門 軟甲綱 等脚目 ナガワラジムシ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

体長 4.5 mm までで体幅の 2.2 倍。白色で眼がない。頭部前側縁の突起が明瞭。第 1 触角の第 3 節に 3 本の剛毛がある。第 2 触角の 3 節は明瞭。頭部や胸部の背面は平滑。第 1 小顎基節内葉に 10 本の歯がある。腹尾節は短く、その後端は低い台形。雄第 1 腹肢の内肢末節は細い。雄第 2 腹肢内肢の先端はふくらみ、細かい剛毛が生えている。

従来、川辺町や白浜町の洞穴だけから知られている。この科には洞穴種とされていたもので近隣土壌の中にも生息している例があり、本種もその可能性があるため、このような環境の調査が必要である。

執筆者 (布村 昇)

- 参考文献・情報 1 Nunomura, N. 1990. Studies on the terrestrial isopod crustaceans in Japan V. Taxonomy of the families Armadillidiidae, Armadillidae and Tylidae, with taxonomic supplements to some other families. Bulletin of Toyama Science Museum, 13 : 1-58.

ミナカタハヤシワラジムシ <i>Lucasioides minakatai</i> Nunomura, 2003 節足動物門 軟甲綱 等脚目 ハヤシワラジムシ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

体長 8.2 mm までで最大幅の 2.1 倍。褐色胸部背面各節に丸い濃色部がある。第 2 触角鞭節第 2 節の長さは第 1 節の 2.5 倍。第 1 胸脚長節と腕節に剛毛が密生する。雄第 1 腹肢の内肢先端は外側に曲がり、外肢の外側基部付近に小さなくぼみがある。雄の第 2 腹肢の内肢はまっすぐで、外肢は台形。腹尾節は三角形。

今までタイプ産地の田辺市の神島だけから知られている。原記載に関連した調査以来、神島での調査が行われていないので現状は不明。

執筆者 (布村 昇)

参考文献・情報 1 Nunomura, N. 2003. Four new terrestrial isopod crustaceans from Kashima Islet and its neighboring, Tanabe Bay. Bulletin of the Toyama Science Museum, 26 : 13-24.

イシダコシビロダンゴムシ <i>Spherillo ishidae</i> Nunomura, 2011 節足動物門 軟甲綱 等脚目 コシビロダンゴムシ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

体長 7.6 mm まで。背面は黄色っぽいが不規則な濃色部があり、色彩の差が明瞭。第 2 触角鞭節第 2 節の長さは第 1 節の 3 倍。第 1、2 胸脚腕節に剛毛が密に生える。雄第 1 腹肢内肢は、先端がいくぶん尖り、外側に反っている。外肢は長方形。雄の第 2 腹肢内肢は長く、外肢末端を明瞭に超える。外肢はごく浅くくぼんでいる。腹尾節は砂時計型でやや長く、基部の長さの 4 分の 3 以上。



みなべ町の西岩代海岸がタイプ産地であるが、他に愛媛県愛南町の海岸に近い公園からも報告されており、きわめて限られた海浜域に生息するもののようである。和歌山県や他府県の他の海岸でも生息している可能性があり、このような環境の調査が必要である。

執筆者 (布村 昇)

参考文献・情報 1 Nunomura, N. 2011. A new species of the terrestrial isopod genus *Spherillo* (Crustacea : Isopoda : Armadillidae) from Kii Peninsula, Japan. Bulletin of the Toyama Science Museum, 34 : 67-71.
写真：布村 昇撮影

ケナガコシビロダンゴムシ <i>Spherillo longispinus</i> (Nunomura, 2003) 節足動物門 軟甲綱 等脚目 コシビロダンゴムシ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

体長 8.0 mm まで。背面は黒っぽい、不規則な淡色部がある。第 2 触角の鞭節第 2 節の長さは第 1 節の 3 倍。全体に胸節の剛毛は長い、特に第 1 胸脚の腕節に特に長い剛毛がある。雄第 1 腹肢内肢はやや太く、外肢は低い扇型。雄の第 2 腹肢内肢はまっすぐで、外肢は深くくびれている。腹尾節は砂時計型。



今までタイプ産地の田辺市の神島から知られているだけである。原記載に関連した調査以来、神島での調査は行われていないので、最近の状況は不明。

執筆者 (布村 昇)

参考文献・情報 1 Nunomura, N. 2003. Four new terrestrial isopod crustaceans from Kashima Islet and its neighboring, Tanabe Bay. Bulletin of the Toyama Science Museum, 26 : 13-24.
写真：布村 昇撮影

オニヌマエビ <i>Atyopsis spinipes</i> (Newport, 1847) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 ヌマエビ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

淡水域に棲み、体長は 5 cm 程度になるヌマエビ科の種。本種の顎角は短く、下縁にのみ 1~8 本の鋸歯がある。第一、第二胸脚に多数の剛毛をもち、この毛を広げて水中の懸濁物等を濾し取って食べる。体側部には赤褐色の縦筋模様が多数ある個体が多い。両側回遊型の生活史を送る。



- 選定理由** 本種は、2000 年代初期から和歌山県内での目撃情報があったものの、確実な画像資料や標本は採取されることはなかった。2018 年に正式に報告され、その後も確認できる地点は多くない。また、県内淡水域での越冬もできていないと思われる。
- 和歌山県内では、いまだに 2018 年以降の報告がなく、本種の再生産の状況や加入状況について不明な点が多いため、情報不足とした。

執筆者 (平嶋健太郎)

参考文献・情報

- 1 阿久沢拓生. 2018. 和歌山県におけるオニヌマエビの記録. 南紀生物, 60 (1) : 123-125.
 - 2 日淡こぼれ話. 2015. オニヌマエビ in 日本淡水魚愛護会, <https://tansuigyo.net/m/diary.cgi?no=1125> (2021 年 6 月参照)
 - 3 西村俊明. 私信.
 - 4 豊田幸詞. 2019. 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑. 339pp. 緑書房, 東京.
- 写真: 渡部哲也提供 (県外産)

ザラテナガエビ <i>Macrobrachium australe</i> (Guérin-Ménéville, 1838) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 テナガエビ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

主に淡水域に棲み、体長は 8 cm 近くになるテナガエビ科の種。本種のオスの第二胸脚 (ハサミ脚) は左右で大きさが異なり、大きい方は小突起が多く、小さい方の掌節には軟毛が密生する。また、頭胸部の側面に黒筋模様が 3 本あり、ミナミテナガエビに似るが、顎角は上向きであることで区別できる。両側回遊型の生活史を送る。

- 選定理由** 本種は、2000 年代初期から和歌山県内での目撃情報があったものの、確実な画像資料や標本は採取されることはなかった。2013 年に正式に報告され、その後は紀南地域の小河川で認められることがあるが、出現状況は安定していないことから、和歌山県内淡水域での越冬はできていないと思われる。
- 和歌山県内では、本種の再生産の状況や加入状況について不明な点が多いため、情報不足とした。

執筆者 (平嶋健太郎)

参考文献・情報

- 1 今井 正・大貫貴清. 2013. 紀伊半島南西部の河川で採集されたザラテテナガエビとコンジテナガエビの未成体. 南紀生物, 55 (1) : 11-14.
- 2 丸山智朗. 2017. 神奈川県および伊豆半島の河川から採集された注目すべき熱帯性コエビ類 5 種. 神奈川自然誌資料, 38 : 29-35.
- 3 豊田幸詞. 2019. 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑. 339pp. 緑書房, 東京.

コンジテンナガエビ <i>Macrobrachium lar</i> (Fabricius, 1798)		節足動物門	軟甲綱	十脚目	テナガエビ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国

淡水域に棲み、体長は 15 cm 以上になるテナガエビ科の種。本種のオスの第二胸脚（ハサミ脚）は左右同じ大きさで長く伸び、ハサミの部分基部が橙色になる。また、成熟したオスのハサミ部分が外側に湾曲することが特徴。両側回遊型の生活史を送る。



本種は、2000 年代初期から和歌山県内紀南地域で選定理由 和歌山県立自然博物館の調査によって採取されていたが、報告がなされていなかった。2013 年に正式に報告され、その後も紀南地域の小河川で認められるが、出現状況は安定していないことから、県内淡水域での越冬はできていないと思われる。

和歌山県内では、いまだに 2013 年以降の報告は少なく、本種の再生産の状況や加入状況について不明な点が多いため、情報不足とした。

執筆者（平嶋健太郎）

- 参考文献・情報
- 1 今井 正・大貫貴清. 2013. 紀伊半島南西部の河川で採集されたザラテナガエビとコンジテンナガエビの未成体. 南紀生物, 55 (1): 11-14.
 - 2 丸山智朗. 2017. 神奈川県および伊豆半島の河川から採集された注目すべき熱帯性コエビ類 5 種. 神奈川自然誌資料, 38: 29-35.
 - 3 豊田幸詞. 2019. 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑. 339pp. 緑書房, 東京.
- 写真：平嶋健太郎撮影

シラタエビ <i>Exopalaemon orientis</i> Holthuis, 1951		節足動物門	軟甲綱	十脚目	テナガエビ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国

河口等の安定した汽水環境に生息している体長 7 cm 程度の小型のテナガエビ科の種。顎角は細長く、眼の前方付近でとさか状に盛り上がる。



近年、本種が生息するような汽水環境が人為的攪乱により危機的状況にある。

選定理由 本種はこれまで、紀の川、和歌浦干潟、日高川河口干潟、内之浦干潟等で和歌山県立自然博物館の調査によって確認されているが、近年は減少傾向にあると推測される。ただ、本種の減少要因や隣接する府県の生息状況が不明であるため、今回は情報不足とした。

執筆者（平嶋健太郎）

- 参考文献・情報
- 1 国土交通省. 2021. 河川環境データベース <http://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/> (2021 年 6 月参照)
 - 2 三浦知之. 2008. 干潟の生きもの図鑑. 197pp. 南方新社, 鹿児島.
 - 3 和歌山県立自然博物館における画像資料等 (平嶋健太郎. 私信).
- 写真：平嶋健太郎撮影

ハシボソテッポウエビ <i>Alpheus dolichodactylus</i> (Ortmann, 1890)	節足動物門	軟甲綱	十脚目	テッポウエビ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—
				国
				準絶滅危惧種 (NT)

選定理由

国内温帯域の軟泥干潟に生息する固有種で、体長は 50 mm 程になる。東京湾をタイプ産地とするが、関東域では原記載以後 100 年以上にわたって採集記録はない。現在の生息地は和歌山県と、福岡県（大川市、柳川市、大和町）、佐賀県江北町の有明海に限られる。汚染の少ないシルト質の軟泥干潟を好むが、このような環境は開発によって国内から失われつつある。そのため、環境省レッドリストでは準絶滅危惧種に、日本ベントス学会の海岸ベントスレッドデータブックでは絶滅危惧 II 類にそれぞれランクされている。

県内では御坊市日高川河口と海南市船尾から記録されているが、十分な情報は得られていない。

執筆者（野村恵一）



参考文献・情報

- 1 林 健一. 1998. 日本産エビ類の分類と生態 (102), テッポウエビ科—テッポウエビ属①. 海洋と生物, 118: 390-395.
 - 2 木呂聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
 - 3 小山彰彦・乾竜帝・菅野一輝・鬼倉徳雄. 2018. 希少種ハシボソテッポウエビ *Alpheus dolichodactylus* の九州における分布記録. 日本生物地理学会会報, 72: 89-92.
 - 4 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 5 Ortmann, A. 1890. Die unterordnung Natantia Boas. Theil. I. Die Decapoden-Krebse des Strassburger Museums, mit besonderer Berücksichtigung der von Herrn Dr. Döderlein bei Japan und bei den Liu-Kiu-Inseln gesammelten und z. Z. im Strassburger Museum aufbewahrten Formen, I. Zoologische Jahrbücher Abteilung für Systematik, Geographie und Biologie der Tiere, 5: 437-542.
 - 6 鯖浦海中公園研究所所蔵標本（御坊市日高川河口産、海南市船尾産）.
 - 7 和歌山県立自然博物館所蔵標本（海南市船尾から記録）.
 - 8 吉郷英範. 2009. 日本の河口域とアンキアラインで確認されたテッポウエビ科エビ類（甲殻類：エビ目）. 比和科学博物館研究報告, 20: 221-273.
- 写真：野村恵一撮影

カワテッポウエビ <i>Alpheus</i> sp.	節足動物門	軟甲綱	十脚目	テッポウエビ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—
				国
				—

選定理由

和歌山県から八重山諸島にかけての砂礫質河口に生息する中型のテッポウエビ類で、体長は 30 mm ほどになる。国内に産するテッポウエビ類の中では最も塩分濃度の低い環境に適応した種で、河川感潮域に限産する。

県内では、串本町ならびに那智勝浦町から記録があり、これらは本種の北限域の産地とみなされる。未記載種と考えられるが、分類学的・生態学的情報が不十分である。

執筆者（野村恵一）



参考文献・情報

- 1 野村恵一. 1996. カワテッポウエビ（仮称）*Alpheus* sp. マリンパピリオン, 25: 43.
- 2 鯖浦海中公園研究所所蔵標本（串本町有田川河口産、串本町闔野川河口産）.
- 3 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟（和歌山県那智勝浦町）の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.

参考文献
・情報

- 吉郷英範. 2009. 日本の河口域とアンキアラインで確認されたテッポウエビ科エビ類 (甲殻類: エビ目). 比和科学博物館研究報告, 20: 221-273.
写真: 野村恵一撮影

クボミテッポウエビ <i>Stenalpheops anacanthus</i> (Miya, 1997) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 テッポウエビ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧種 (NT)

国内温帯域ならびに韓国の干潟に生息する中型のテッポウエビ類で、体長は 20 mm ほどになる。泥底もしくは砂泥底干潟に生息するアナジャコ類やスナモグリ類の巣穴に同居する特異な生態を持ち、環境省レッドリストならびに日本ベントス学会海岸ベントスレッドデータブックにおいて共に準絶滅危惧種にランクされている。



県内では御坊市日高川河口のみから記録されているが、十分な情報は得られていない。

執筆者 (野村恵一)

参考文献
・情報

- 林 健一. 1999. 日本産エビ類の分類と生態 (104), テッポウエビ科—クボミテッポウエビ属・ミカワエビ科—ミカワエビ属. 海洋と生物, 120: 52-55.
- 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- Miya, Y. 1997. *Stenalpheops anacanthus*, new genus, new species (Crustacea, Decapoda, Alpheidae) from the Seto Inland Sea and the Sea of Ariake, south Japan. Bulletin of the Faculty of Liberal Arts, Natural Science, Nagasaki University, 38: 145-161, figures 1-4.
- 鏑浦海中公園研究所蔵標本 (御坊市日高川河口産).
- 吉郷英範. 2009. 日本の河口域とアンキアラインで確認されたテッポウエビ科エビ類 (甲殻類: エビ目). 比和科学博物館研究報告, 20: 221-273.
写真: 野村恵一撮影

アナジャコ <i>Upogebia major</i> (De Haan, 1841) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 アナジャコ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

甲長 30 mm に達する大型のアナジャコ類で、砂泥質の干潟に深さ 2 m を超える深い巣穴を形成して生息する。北海道から熊本県に至る全国各地の干潟に生息するが、温帯性であり、沖縄県、鹿児島県には分布が確認されていない。高知県では、黒潮の影響を受けにくい浦ノ内湾の湾奥部にのみ生息が確認されている。和歌山県では、和歌山市や海南市では近年の生息も確認されているが、県南部では 1982 年に田辺湾内之浦での記録以降、確実な生息記録は得られていない。本種の古い記録は、ヨコヤアナジャコやバルスアナジャコと混同されている可能性があるため、和歌山県においても標本に基づく再調査が必要である。そのため、情報不足と評価した。



執筆者 (伊谷 行)

参考文献
・情報

- Itani, G. 2002. Ecology of crustaceans and bivalves symbiotic with thalassinidean shrimps. Doctoral Thesis, Kyoto University, 103pp.
- Itani, G. 2004. Distribution of intertidal upogebiid shrimp in Japan. Contributions from the Biological Laboratory, Kyoto University. 29: 383-399.

参考文献
・情報

- 3 Itani, G. 2004. Host specialization in symbiotic animals associated with thalassinidean shrimps in Japan. Tamaki, A. (ed), Proceedings of the symposium on "Ecology of large bioturbators in tidal flats and shallow sublittoral sediments - from individual behavior to their role as ecosystem engineers." Nagasaki University, pp. 33-43.
 - 4 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査(干潟調査) 報告書.
 - 5 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相(II). 南紀生物, 46: 137-141.
 - 6 高知県林業振興・環境部環境共生課編. 2018. 高知県レッドデータブック 2018 動物編. 279pp. 高知.
 - 7 野村恵一. 1993. 日高川河口のエビ類及びエビ類類似甲殻類. くろしお, (12): 55-56
 - 8 大垣俊一・田名瀬英朋. 1984. 島島磯観察記録, 1949-1983 その2. 南紀生物, 26: 105-111.
 - 9 大垣俊一・田名瀬英朋・和田恵次. 2001. 和歌山県田辺湾内之浦の海岸生物記録種, 1976-2001. 南紀生物, 43: 102-108.
 - 10 大和茂之・丸村真弘. 1992. 富田川河口域の甲殻類. くろしお, (11): 28.
- 写真: 伊谷 行撮影(県外産, マゴコロガイの寄生を受けている)

コブシアナジャコ	<i>Upogebia sakaii</i>	Ngoc-Ho, 1994	節足動物門	軟甲綱	十脚目	アナジャコ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

甲長 15 mm 程度の小型のアナジャコ類で、砂質から砂泥質の干潟に巣穴を形成して生息する。これまで、和歌山県、徳島県、高知県、奄美大島、宮古島から記録が得られている。宮古島では普通種であるが、他の生息域では減少傾向にあり、特に奄美大島では個体数が激減している。和歌山県では、和歌山市、御坊市、那智勝浦町および田辺湾内の小湾にて生息が確認されていたが、田辺湾の生息地では護岸工事に伴い干潟域が減少してしまった。そのため、情報不足と評価した。



執筆者(伊谷 行)

参考文献
・情報

- 1 Itani, G. 2002. Ecology of crustaceans and bivalves symbiotic with thalassinidean shrimps. Doctoral Thesis, Kyoto University, 103pp.
 - 2 Itani, G. 2004. Distribution of intertidal upogebiid shrimp in Japan. Contributions from the Biological Laboratory, Kyoto University, 29: 383-399.
 - 3 Itani, G. 2004. Host specialization in symbiotic animals associated with thalassinidean shrimps in Japan. Tamaki, A. (ed), Proceedings of the symposium on "Ecology of large bioturbators in tidal flats and shallow sublittoral sediments - from individual behavior to their role as ecosystem engineers." Nagasaki University, pp. 33-43.
 - 4 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相(II). 南紀生物, 46: 137-141.
 - 5 高知県林業振興・環境部環境共生課編. 2018. 高知県レッドデータブック 2018 動物編. 279pp. 高知.
 - 6 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 7 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟(和歌山県那智勝浦町)の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
- 写真: 渡部哲也提供

イザナミツノヤドカリ <i>Diogenes izanamae</i> Asakura, 2006		節足動物門	軟甲綱	十脚目	ヤドカリ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国

選定理由

比較的近年に石川県産の標本を基に記載された種で、大阪湾でも記録がある。和歌山県内では田辺湾から記録がある。同属のトゲツノヤドカリと同所的に見られるが、本種はやや小さく、第2触角が比較的小さい。現時点では生息地が限定されているため、情報不足とした。

執筆者（渡部哲也）



参考文献・情報

- 1 環境省自然環境局生物多様性センター．2019．平成30年度モニタリングサイト1000 磯・干潟調査報告書．
- 2 山田浩二・和田太一．2018．二色の浜のアマモ場の生物調査（2015年）．貝塚の自然，19：35-38．
写真：渡部哲也撮影

ヨモギホンヤドカリ <i>Pagurus nigrofascia</i> Komai, 1996		節足動物門	軟甲綱	十脚目	ヤドカリ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国

選定理由

国内では函館湾以南九州まで分布する。和歌山県内では北部の岩礁域や那智勝浦町から記録があり、和歌山市産の標本がパラタイプに指定されている。本種は本州等の暖温帯域では夏眠することが知られており、水温が高い時期に記録されることが少なく、このため記録が断片的であり情報不足とした。

執筆者（渡部哲也）



参考文献・情報

- 1 Komai, T. 1996. *Pagurus nigrofascia*, a new species of hermit crab (Decapoda : Anomura : Paguridae) from Japan. Crustacean Research, 25 : 59-72.
- 2 日本ベントス学会．2012．干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック．285pp．東海大学出版会，秦野．
- 3 大阪湾海岸生物研究会．2018．大阪湾南東部の岩礁海岸生物相 - 2011～2015年の調査結果．自然史研究，4：17-38．
- 4 和歌山県立自然博物館所蔵標本（那智勝浦町から記録）．
写真：渡部哲也撮影（県外産）

アリアケヤワラガニ <i>Elamenopsis ariakensis</i> (Sakai, 1969)		節足動物門	軟甲綱	十脚目	ヤワラガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国

選定理由

国内では大阪湾から瀬戸内海、有明海、八代海と沖縄で記録があり、和歌山県内では田辺湾から記録がある。潮間帯下部から浅海域の砂底や砂泥底に生息する。本種はトゲイカリナマコの棲営に共生することが知られている。和歌山県内では非常に記録に乏しいことから情報不足とした。

執筆者（渡部哲也）



参考文献・情報

- 1 日本ベントス学会．2012．干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック．285pp．東海大学出版会，秦野．

参考文献
・情報

- 2 上出貴士・高橋芳明. 2008. 和歌山県田辺湾内及び内之浦の潮間帯のコアマモ群落におけるベントス群集. 日本ベントス学会誌, 63: 42-55.
写真: 渡部哲也撮影 (県外産)

ヒメテナガオウギガニ		<i>Chlorodiella cytherea</i> (Dana, 1852)		節足動物門	軟甲綱	十脚目	オウギガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—	

選定理由

主として奄美大島以南のサンゴ礁に分布するカニだが、和歌山県の潮岬の潮間帯転石地から複数個体採集されている。潮岬の記録は、南方の主分布域からの一時的な遇来ともみられているが、記録個体は明らかに成体の体サイズをしており、かつ抱卵雌も得られていることから当地で個体群が維持されている可能性が高い。しかしこれ以降、和歌山県沿岸では本種の記録は知られていない。記録が1例だけであり、転石海岸の調査が不十分であることも考慮し、情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- 1 山本妙子・木村昭一. 1987. 三重県および和歌山県産初記録のテナガオウギガニ属 (*Chlorodiella*) の2種. 南紀生物, 29: 121-125.
写真: 渡部哲也提供 (県外産)

ミナミオカガニ <i>Cardisoma carnifex</i> (Herbst, 1796) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 オカガニ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

海岸林や海岸の草地に巣穴を掘って生息する大型の陸生ガニで、主分布域は小笠原諸島や琉球列島であるが、静岡県や和歌山県からも記録がある。和歌山県の記録としては白浜町で成体サイズの個体が採集されたという情報がある <https://mainichi.jp/articles/20161006/dtl/k30/040/427000c> (2021年6月参照)。記録個体が成体サイズなので、繁殖している可能性もある。海岸の陸域に深い巣穴を掘って生息しており、昼間活動することがほとんどないため見つけにくいことを考慮し、情報不足と評価した。

執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- 1 豊田幸詞. 2019. 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑. 339pp. 緑書房, 東京.

ヘリトリオカガニ <i>Tuerkayana rotundum</i> (Quoy & Gaimard, 1824) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 オカガニ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧 (NT)

選定理由

琉球列島・小笠原諸島を主分布域として海岸付近の岩場・草地等で見られる陸ガニである。日本本土からは和歌山県串本町からの記録しか知られていない。串本での記録は、成体サイズの雄1個体と雌1個体であることから、当地で繁殖している可能性もある。記録が1例しかないことと、夜行性で深い巣穴を掘って生息するため見つけにくいことを考慮して、情報不足と評価した。

執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- 1 野村恵一. 2014. 串本海中公園センター施設内で採集されたヘリトリオカガニ. マリンパピリオン, 43(5): 35.
2 豊田幸詞. 2019. 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑. 339pp. 緑書房, 東京.

カクレイワガニ <i>Geograpsus grayi</i> (H. Milne Edwards, 1853)		節足動物門		軟甲綱		十脚目		イワガニ科	
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—		国	—		

選定理由

和歌山県、高知県、鹿児島県、八丈島、小笠原諸島、南西諸島から記録される大型の陸生ガニ。体色はきれいな紫色を呈する。海岸の草地灌木の根元や堤防等に穴居する。和歌山県からは白浜町からの記録が2例あるだけである。夜行性のため見つけにくいことと、記録が限られていることを考慮し、情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 永井誠二. 1990. 和歌山県沿岸のカニ類相 IV. 南紀生物, 32: 115-119.
 - 2 豊田幸詞. 2019. 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑. 339pp. 緑書房, 東京.
 - 3 和田恵次. 1978. 本州産新記録のカニ、カクレイワガニ. 南紀生物, 20: 62.
- 写真: 渡部哲也提供 (県外産)

ハシリイワガニモドキ		<i>Metopograpsus thukuhar</i> (Owen, 1839)		節足動物門	軟甲綱	十脚目	イワガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—	

選定理由

神奈川県以南の岩礁・転石海岸に生息する。本土から記録される地域は多くなく、和歌山県でもこれまで記録があるのは、和歌川河口、田辺湾、串本町、ゆかし潟と限られており、かつ確認個体数も多くない。南方系の種であるが、和歌山県では成体サイズのものが採集されており、繁殖して個体群が維持されているとみられる。行動がかなり敏速で採集しにくいことと、生息場所が岩場の隙間や転石下と見つけにくい環境であることを考慮し、情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 福井康雄・和田恵次. 1983. 田辺湾南岸の異尾類・短尾類とその分布. 南紀生物, 25: 159-167.
 - 2 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
 - 3 永井誠二. 1990. 和歌山県沿岸のカニ類相 IV. 南紀生物, 32: 115-119.
 - 4 和田恵次専門調査員現地調査記録 (ゆかし潟から記録).
 - 5 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.
 - 6 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (和歌川河口から記録).
- 写真: 渡部哲也提供

ウモレマメガニ <i>Pseudopinnixa carinata</i> Ortmann, 1894							節足動物門	軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)		旧県	2012	—		国	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		

選定理由

千葉県、東京都、神奈川県、紀伊半島沿岸から瀬戸内海にかけての地域から記録がある日本固有属種である。砂泥質干潟から砂泥質の潮下帯までに生息するが記録は限られている。和歌山県沿岸では、和歌川河口と田辺湾から記録があるだけで、その生息数も少ない。アナジャコ類やスナモグリ類の巣穴を利用する場合もあるが、砂中に埋も



選定理由

れたままで生息する場合もある。県内の記録がごくわずかであることと、砂上で活動することがないため見つかりにくいことを考慮し、情報不足と評価した。

執筆者（和田恵次）

参考文献・情報

- 1 古賀庸憲・溝口和子・栗田剛史・池田幸右・池田三智子・上水流裕司・北山貴巳・小山貴子・里中美哉・出口弘美・根ヶ山 亮・和田恵次. 2003. 和歌川河口干潟で採集されたウモレマメガニ *Pseudopinnixa carinata* (Ortmann, 1894) (カクレガニ科). 南紀生物, 45: 145-146.
 - 2 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 3 上出貴士・高橋芳明. 2008. 和歌山県田辺湾内及び内之浦の潮間帯のコアマモ群落におけるベントス群集. 日本ベントス学会誌, 63: 42-55.
- 写真: 渡部哲也提供 (県外産)

ヒメアカイソモドキ	<i>Sestrostoma depressum</i> (Sakai, 1965)	節足動物門	軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国
					情報不足 (DD)

選定理由

小型のモクズガニ科のカニで、転石干潟に生息するバルスアナジャコやスナモグリの巣穴内で生活する。これまで、千葉県以西の太平洋岸、瀬戸内海、沖縄県での生息が確認されている。和歌山県では、白浜町と串本町からのみ記録がある。本種は、その生息環境の特殊性と採集が難しいため、採集例は極めて少ない。しかし、内湾の転石干潟や、外洋の磯のれきの下等にバルスアナジャコやスナモグリが生息していれば、本種も生息している可能性がある。和歌山県における近年の生息状況は分かっていないため、情報不足と評価した。

執筆者（伊谷 行）

参考文献・情報

- 1 Itani, G. 2002. Ecology of crustaceans and bivalves symbiotic with thalassinidean shrimps. Doctoral Thesis, Kyoto University, 103pp.
- 2 Itani, G. 2004. Host specialization in symbiotic animals associated with thalassinidean shrimps in Japan. Tamaki, A. (ed), Proceedings of the symposium on "Ecology of large bioturbators in tidal flats and shallow sublittoral sediments - from individual behavior to their role as ecosystem engineers." Nagasaki University, pp. 33-43.
- 3 高知県林業振興・環境部環境共生課編. 2018. 高知県レッドデータブック 2018 動物編. 279pp. 高知.
- 4 丸村真弘・小阪 晃. 2003. 永井誠二コレクション カニ類標本目録. 73pp. 和歌山県立自然博物館, 海南.
- 5 Naruse, T. 2015. Description of a new genus and a new species of gaeticine crab (Crustacea: Brachyura: Varunidae) from the Ryukyu Islands, and a review of *Acmaeopleura* Stimpson, 1858, and *Sestrostoma* Davie & N. K. Ng, 2007. Zootaxa, 3925: 211-228.

シタゴコロガニ	<i>Sestrostoma</i> sp.	節足動物門	軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国
					絶滅危惧 I B 類 (EN)

選定理由

小型のモクズガニ科のカニで、干潟域に生息するアナジャコ類の腹部にしがみついて生活する未記載種である。これまで、瀬戸内海、紀伊半島、四国太平洋岸、奄美大島での生息が確認されている。和歌山県では約 20 年前に、田辺湾内の池田浦において、コブシアナジャコに共生する個体が採集されたことがある。本種がしがみついたアナジャコ類には、腹部に食痕として、黒いかさぶた状の傷が形成される。そのために、本種の生息を宿主の傷の有無により判別することができるが、富田川や日高川等の干潟において、傷を有するアナジャコ類は得られていない。和歌山県における近年の生息状況は分かっていないため、情報不足と評価した。

執筆者（伊谷 行）

参考文献・情報

- 1 Itani, G. 2002. Ecology of crustaceans and bivalves symbiotic with thalassinidean shrimps. Doctoral Thesis, Kyoto University, 103pp.

参考文献
・情報

- Itani, G. 2004. Host specialization in symbiotic animals associated with thalassinidean shrimps in Japan. Tamaki, A. (ed), Proceedings of the symposium on "Ecology of large bioturbators in tidal flats and shallow sublittoral sediments - from individual behavior to their role as ecosystem engineers." Nagasaki University, pp. 33-43.
- 高知県林業振興・環境部環境共生課編. 2018. 高知県レッドデータブック 2018 動物編. 279pp. 高知.
- 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

スネナガイソガニ <i>Hemigrapsus longitarsis</i> (Miers, 1879)		節足動物門		軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

北海道から九州までの潮間帯中下部から潮下帯の砂泥底に分布する。比較的良好に見つかるのはアマモ場からである。和歌山県沿岸からは和歌川河口と田辺湾からしか記録がない。同属の他種に比べて歩脚が細長いのと、雄の鉗脚が華奢である点特徴的である。記録が少ないのと、潮間帯下部から潮下帯にかけてが主分布域であるため、これまでの踏査が不十分な点があるとみて情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書.
- 上出貴士・高橋芳明・山内 信. 2011. 和歌山県田辺湾の潮間帯におけるコアモ群落の甲殻類群集構造. 水産増殖, 59: 351-361.
- 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (浜の宮ビーチから記録).
写真: 渡部哲也提供 (県外産)

ヒメケフサイソガニ <i>Hemigrapsus sinensis</i> Rathbun, 1929							節足動物門	軟甲綱	十脚目	モクズガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)		旧県	2012	—		国	準絶滅危惧 (NT)		

選定理由

紀伊半島沿岸、瀬戸内海沿岸、有明海沿岸に分布する。潮間帯中下部のカキ礁や転石下から見つかるが、記録される地域は限られている。動きが緩慢で、はさみには雄雌ともに毛の房を具えるほか、最大サイズが雌の方が雄よりも大きいという同属他種とは違った特徴をもっている。繁殖期は3~6月で、これも夏~秋が繁殖期である同属他種とは大きく異なる。和歌山県沿岸では、紀の川河口、和歌川河口、有田川河口、ゆかし潟から記録があるが、いずれもその記録個体数は少ない。記録地が少ないだけでなく、カキ礁や転石の隙間に住むため見つけにくいことも考慮し、情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2007. 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査 (干潟調査) 報告書
- 木邑聡美・野元彰人・和田恵次・杉野伸義. 2004. 和歌山県北中部の河口・干潟における大型底生動物相 (II). 南紀生物, 46: 137-141.
- Miyajima, A. & Wada, K. 2017. Relationships between life history traits and sexual dimorphisms in two varunid crabs, *Hemigrapsus takanoi* Asakura & Watanabe, 2005 and *H. sinensis* Rathbun, 1931 (Brachyura: Varunidae). Journal of Crustacean Biology, 37: 21-28.
- 野元彰人・木邑聡美・唐澤恒夫・杉野伸義. 2002. 有田川河口汽水域の大型底生動物相. 南紀生物, 44: 115-121.

参考文献
・情報

- 野元彰人・淀 真理・木邑聡美・岸野 底・酒野光世・和田恵次. 1999. 紀ノ川河口域で記録されたイワガニ科の6稀種. 南紀生物, 41:5-9.
- 和歌山県立自然博物館所蔵標本(和歌川河口から記録).
写真:渡部哲也提供(県外産)

アゴヒロカワガニ <i>Ptychognathus altimanus</i> (Rathbun, 1915) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 モクズガニ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧 (NT)

紀伊半島以南の河川汽水域に生息する。和歌山県では、紀の川河口、芳養川河口、太田川河口、熊野川河口から記録があるものの、いずれもその記録個体数は少ない。生息場所が潮間帯から潮下帯の砂礫下であるため、見つかりにくいことを考慮し、情報不足と評価した。雄のはさみ上には、同属他種でよく見られる毛の房がないのが特徴的である。

執筆者(和田恵次)

参考文献
・情報

- 浜崎健児・山田 誠・青木美鈴・田中薫子・遊佐陽一・保智巳・和田恵次. 2014. 紀伊半島河川群における十脚甲殻類・水生昆虫・魚類の生息と流域環境との関連性評価. 和田恵次(編), 源流から河口域までの河川生態系と流域環境との連環構造—紀伊半島の河川群の比較より—, 75-101. 奈良女子大学共生科学研究センター, 奈良.
- 岸野 底・野元彰人・木邑聡美. 2008. 和歌山県太田川河口域で採集されたアゴヒロカワガニ(モクズガニ科). 南紀生物, 50:233-234.
- 国土交通省. 2021. 河川環境データベース <http://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/>
- 野元彰人・淀 真理・木邑聡美・岸野 底・酒野光世・和田恵次. 1999. 紀ノ川河口域で記録されたイワガニ科の6稀種. 南紀生物, 41:5-9.
- 豊田幸詞. 2019. 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑. 339pp. 緑書房, 東京.
- 和歌山県立自然博物館所蔵標本(芳養川から記録).

ケフサヒライソモドキ <i>Ptychognathus barbatus</i> (A. Milne Edwards, 1873) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 モクズガニ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

神奈川県以南南西諸島までに分布するが、本州での記録は極めて少ない。同属のタイワンヒライソモドキに似るが、甲面が平坦な点と前側縁に3歯ある点等から識別できる。和歌山県では、芳養川、富田川、田並川からしか記録がなく、そこでの記録個体数も少ない。これまでの記録地がごくわずかであることと、河川汽水域の転石下に生息するため見つかりにくいことを考慮し、情報不足と評価した。



執筆者(和田恵次)

参考文献
・情報

- 浜崎健児・山田 誠・青木美鈴・田中薫子・遊佐陽一・保智巳・和田恵次. 2014. 紀伊半島河川群における十脚甲殻類・水生昆虫・魚類の生息と流域環境との関連性評価. 和田恵次(編), 源流から河口域までの河川生態系と流域環境との連環構造—紀伊半島の河川群の比較より—, 75-101. 奈良女子大学共生科学研究センター, 奈良.
- 野元彰人. 2004. 和歌山県串本町で採集された本州初記録のケフサヒライソモドキ(モクズガニ科). 南紀生物, 46:159-160.
- 大和茂之・丸村眞弘. 1992. 富田川河口域の甲殻類. くろしお, (11):28.
写真:渡部哲也提供(県外産)

ヒメカクオサガニ	<i>Chaenostoma crassimanus</i> Stimpson, 1858	節足動物門	軟甲綱	十脚目	オサガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国
					準絶滅危惧 (NT)

選定理由

小型のオサガニ科のカニで、岩礁潮間帯に生息する。これまで神奈川県、和歌山県、沖縄島から *Macrophthalmus boscii* として記録がある。和歌山県では白浜町と串本町からのみ記録がある。白浜町沿岸では、本種は初夏の頃に定着し、その後、生長して繁殖もするが、冬季に死滅するものとされていた。しかし近年、明らかに越冬したとみられる大型個体が夏季に見つかっている。小型種であるが、雄個体は、岩上ではさみ脚を上下させる waving display をすることも観察されている。白浜町沿岸では比較的生息個体数は多いが、他に生息する地域が串本以外知られておらず、小型個体で見つけにくいことも考慮し、情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 Kitaura, J. & Wada, K. 2004. Allocleaning, fighting, waving and mating behavior in sentinel crabs (Brachyura : Ocypodidae : *Macrophthalmus*). Crustacean Research, 33 : 72-91.
 - 2 永井誠二. 1990. 和歌山県沿岸のカニ類相 IV. 南紀生物, 32 : 115-119.
 - 3 大阪市立自然史博物館所蔵標本 (白浜町臨海、串本町袋から記録).
 - 4 和田恵次. 1985. 白浜町沿岸におけるヒメカクオサガニの季節的消長. 南紀生物, 27 : 27-29.
 - 5 和田恵次専門調査員現地調査記録 (白浜町臨海から記録).
- 写真：和田恵次撮影

メナガオサガニ	<i>Macrophthalmus serenei</i> Takeda & Komai, 1991	節足動物門	軟甲綱	十脚目	オサガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国
					—

選定理由

眼柄が甲から大きく突出する特徴をもつオサガニ属のカニである。以前は *Macrophthalmus verreauxi* とされていた。潮間帯砂泥底から潮下帯砂泥底に分布し、日本沿岸では、伊豆半島以南沖縄諸島までに分布するが記録される地域は多くない。和歌山県では和歌山市の水軒浜と田辺湾の内之浦からの記録が知られているに過ぎない。記録が極めて稀であることと、潮下帯まで分布する特徴からこれまでの踏査が不十分とみて情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 酒井 恒. 1976. 日本産蟹類. 461pp. 講談社, 東京.
 - 2 和田恵次. 1978. 和歌山県産スナガニ類とその分布について. 南紀生物, 20 : 18-22.
 - 3 上出貴士・高橋芳明. 2008. 和歌山県田辺湾内及び内之浦の潮間帯のコアマモ群落におけるベントス群集. 日本ベントス学会誌, 63 : 42-55.
- 写真：渡部哲也提供 (県外産)

ギボシマメガニ <i>Pinnixa balanoglossana</i> Sakai, 1934							節足動物門	軟甲綱	十脚目	カクレガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)		旧県	2012	—		国	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		

選定理由

本種は腸鰓類ミサキギボシムシの巣穴内に共生することが知られている。国内では千葉県・石川県以南有明海までに分布。和歌山県内では田辺湾で記録がある。田辺湾には古くから宿主ミサキギボシムシが生息することが知られているが、本種についての情報はほとんどなく、記録例が少ないため情報不足とした。



執筆者（渡部哲也）

参考文献・情報

- 1 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 西川輝昭. 2018. 桑野久任教授が 1911 年に採集した奈良女子大学所蔵和歌山県田辺産ギボシムシ類標本. 南紀生物, 60: 154-159.
 - 3 上出貴士・高橋芳明. 2008. 和歌山県田辺湾内及び内之浦の潮間帯のコアマモ群落におけるベントス群集. 日本ベントス学会誌, 63: 42-55.
- 写真: 渡部哲也撮影 (県外産)

アカホシマメガニ <i>Indopinnixa haematosticta</i> (Sakai, 1934) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 カクレガニ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	準絶滅危惧 (NT)

選定理由

国内では神奈川県以種子島までに分布。和歌山県内では田辺湾で記録がある。本種については Komai *et al.* (2022) により詳細な再記載が行われたが、それによると別の未記載種を本種として掲載している図鑑等もあり (三宅, 1983; 日本ベントス学会, 2012)、現状では正確な分布は不明である。しかしながら、本種としての報告が数例あることから情報不足とした。

執筆者（渡部哲也）

参考文献・情報

- 1 環境省自然環境局生物多様性センター. 2020. 2020 年度モニタリングサイト 1000 磯・干潟調査報告書データファイル. <http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/> (2021 年 6 月閲覧)
- 2 Komai, T., Naruse, T., Yokooka, H., Taru, M., Shimetsugu, M. & Watanabe, T. 2022. Redescription of *Pinnixa haematosticta* Sakai, 1934, its transfer to *Indopinnixa* Manning & Morton, 1987, and a reappraisal of *Indopinnixa kumejima* Naruse & Maenosono, 2012 (Decapoda: Brachyura: Pinnotheridae). Zootaxa, 5100: 361-389.
- 3 三宅貞祥. 1983. 原色日本大型甲殻類図鑑 II. 277pp. 保育社, 大阪.
- 4 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

ホンコンマメガニ <i>Pinnixa</i> aff. <i>penultipedalis</i> Stimpson, 1858							節足動物門	軟甲綱	十脚目	カクレガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)		旧県	2012	—		国	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		

選定理由

瀬戸内海、隠岐諸島、九州で記録があり、和歌山県では田辺湾からの記録がある。従来国内で報告されていたホンコンマメガニ *Pinnixa penultipedalis* Stimpson, 1858 とされる種は *Indopinnixa* 属の未記載種の可能性が高いとされている (Komai *et al.*, 2022)。和歌山県における記録は極めて少なく、情報不足とした。

執筆者（渡部哲也）

参考文献・情報

- 1 Komai, T., Naruse, T., Yokooka, H., Taru, M., Shimetsugu, M. & Watanabe, T. 2022. Redescription of *Pinnixa haematosticta* Sakai, 1934, its transfer to *Indopinnixa* Manning & Morton, 1987, and a reappraisal of *Indopinnixa kumejima* Naruse & Maenosono, 2012 (Decapoda: Brachyura: Pinnotheridae). Zootaxa, 5100: 361-389.

参考文献
・情報

- Naruse, T. & Maenosono, T. 2012. Two new species of *Indopinnixa* Manning & Morton, 1987 (Decapoda : Brachyura : Pinnotheridae) from the Ryukyu Islands, Japan. *Zootaxa*, 3367 : 222-231.
- 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 上出貴士・高橋芳明. 2008. 和歌山県田辺湾内及び内之浦の潮間帯のコアマモ群落におけるベントス群集. *日本ベントス学会誌*, 63 : 42-55.
- Yamauchi, T. & Konishi, K. 2005. Notes on rare *Pinnixa* crabs (Decapoda, Brachyura, Pinnotheridae) of Japan. *Crustaceana*, 77 : 1237-1243.

フタハピンノ	<i>Pinnotheres bidentatus</i> Sakai, 1939	節足動物門	軟甲綱	十脚目	カクレガニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国
					絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

比較的大きな河川河口域の砂底から砂泥底に生息する。イソシジミやソトオリガイ等の二枚貝外套膜内部に寄生することが知られている。静岡県、和歌山県、徳島県及び九州で記録があり、和歌山市が基産地である。和歌山県下からは原記載以来長らく記録はないが、対岸の徳島県からは比較的多数の個体が記録されているため、今後、和歌山県でも再発見される可能性があることから情報不足とした。



執筆者 (渡部哲也)

参考文献
・情報

- 日本ベントス学会. 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - Sakai, K. 2000. On the occurrence of three species of crabs on Shikoku Island, Japan, and a new species, *Pinnotheres taichungae* nov. spec., from Taiwan (Decapoda, Brachyura). *Crustaceana*, 73 : 1155-1162, figs 1-3.
 - Sakai, T. 1976. 日本産カニ類. 461pp. (日本語版), 773pp. (英語版), 251pp. (図版), 講談社, 東京.
- 写真: 渡部哲也撮影 (県外産)

ヒメギボシムシ	<i>Ptychodera flava</i> Eschscholtz, 1825	半索動物門	ギボシムシ綱	ギボシムシ目	ギボシムシ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国
					—

選定理由

体長 10 cm 以下の小型のギボシムシ。トカラ列島以南のサンゴ礁の潮間帯には比較的普通に見られるが、本土では稀で、和歌山県の串本が数少ない本種生息地である。串本の生息地は潮間帯の中位にある平坦な岩礁の間に溜まった砂地で、そこに小さな糞塊を出している。生時の体色はきれいな黄色で目立つ。和歌山県では他に和歌山市加太の田倉崎からの記録が知られている。記録情報がこのように限られているのと、なかなか見つけにくい種でもあるので情報不足と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献
・情報

- Nishikawa, T. 1977. Preliminary report on the biology of the enteropneust, *Ptychodera flava* Eschscholtz, in the vicinity of Kushimoto, Japan. *Publications of the Seto Marine Biological Laboratory*, 23 : 393-419.
 - 和田恵次・渡部哲也専門調査員現地調査記録 (串本町見草浜から記録)
 - 山西良平. 2009. 関西自然保護機構会誌. 31 (2). 表紙説明 (和歌山市田倉崎海岸から記録).
- 写真: 和田恵次撮影

ミサキギボシムシ *Balanoglossus misakiensis* Kuwano, 1902 半索動物門 ギボシムシ綱 ギボシムシ目 ギボシムシ科

県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—
--------	-----------	----	------	---	---	---

選定理由

同属のワダツミギボシムシと同じように、潮間帯から潮下帯の砂泥底に巣穴を掘って生息する紐状の動物。陸奥湾から九州までの地域から記録されるが、知られる地域は限られている。ワダツミギボシムシのような糞塊を出すことはないので本種の生息確認は困難である。和歌山県における記録は、本種の命名者である桑野久任氏による 1911 年の田辺湾からの標本記録（奈良女子大学所蔵標本）が最も古い。しかしこれ以外には田辺湾からの本種の記録は知られていない。他には和歌山市の和歌浦と毛見浦にいらしい情報があつたが、近年名草ノ浜の干潟に比較的数量多く生息していることが判明した。生息するところでは、巣穴口のへこみがわずかに認められ、そこを掘り返すと本体が見つかる。希少種であることは間違いがないが、糞塊を出さないため、生息を把握しにくいことを考慮し、情報不足と評価した。



執筆者（和田恵次）

参考文献・情報

- 1 奈良女子大学所蔵標本.
 - 2 西川輝昭. 2018. 桑野久任教授が 1911 年に採集した奈良女子大学所蔵和歌山県田辺産ギボシムシ類標本. 南紀生物, 60: 154-159.
 - 3 西川輝昭・浦田慎. 私信（名草ノ浜から採集された標本の DNA 鑑定結果）.
 - 4 大阪市立自然史博物館所蔵標本（名草ノ浜から記録）
 - 5 和田恵次専門調査員現地調査記録（名草ノ浜から記録）
- 写真：和田恵次撮影

イツツメクモヒトデ *Ophiarachnella differens* Murakami, 1944 棘皮動物門 クモヒトデ綱 トゲナガクモヒトデ目 アワハダクモヒトデ科

県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—
--------	-----------	----	------	---	---	---

選定理由

本種は、熊本県天草市富岡半島東部の巴崎にある砂地転石下（水深不明）から得られた 1 個体を基にして、1944 年に記載された種である。その後、1969 年に富岡半島南西部の白岩崎の潮間帯転石下から 1 個体が記録され、1981 年に和歌山県白浜町の島島、並びに瀬戸の潮間帯転石下から 1 個体ずつが記録された。それ以後、1980 年、1987 年、1989 年に串本町から 1 個体ずつ採集された記録があるが、それ以降の和歌山県からの公表記録はない。本種は、盤の表面の顆粒が粗であること、その顆粒の下には細かく密な鱗が並ぶこと、輻楯は小さく、互いに離れること、といった特徴から、他種と区別される。記録が限定的なため、情報不足と評価した。なお、沖縄から得られた本種の生時の写真は、オープンアクセスで閲覧ができる（Fujita *et al.*, 2015）。



執筆者（岡西政典）

参考文献・情報

- 1 Fujita, Y., Irimura, S., Kogure, Y., Okanishi, M., Michonneau F. & Naruse, T. 2015. Catalogue of Echinodermata specimens deposited in the University Museum (Fujikan), University of the Ryukyus. Okinawa, pp. 106. Available at <http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/bitstream/20.500.12000/30915/1/No10p09.pdf> (2021 June 22)
- 2 Irimura, S. 1969. Supplemental report of Dr. Murakami's paper on the ophiurans of Amakusa, Kyushu. Publications from the Amakusa Marine Biological Laboratory, Kyushu University, 2 (1) : 37-43.

参考文献
・情報

- Irimura, S. 1981. Ophiurans from Tanabe Bay and its vicinity, with the description of a new species of *Ophiocentrus*. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 26 (1/3) : 15-49.
- Irimura, S., Kubodera, T. & Ishida, Y. 1995. Catalogue of the specimens of the class Ophiuroidea (Echinodermata) donated by Dr. Seiichi Irimura in the National Science Museum, Tokyo. National Science Museum, Tokyo, pp. 181.
- Murakami, S. 1944. Notes on the ophiurans of Amakusa, Kyusyu. Journal of the Department of Agriculture, Kyusyu Imperial University, (8) : 259-280.

写真：岡西政典撮影

ウチノミクモヒトデ	<i>Ophioteichus utinomii</i> (Irimura, 1967)	棘皮動物門	クモヒトデ綱	ハナビラクモヒトデ目	ニホンクモヒトデ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国

選定理由

本種は、和歌山県田辺湾の畠島の潮間帯から得られた1個体を基に、1968年に記載された種である。その後、2014年にこの個体が再記載されたものの、原記載以外で本種の公表記録はない。本種は、盤の表面を大小二つの大きさの鱗が覆う、輻楯の外側に特徴的な突起が二つ並ぶ、といった特徴から、他種と区別される。記録が極めて限定的なため、情報不足と評価した。

執筆者（岡西政典）

参考文献
・情報

- Irimura, S. 1968. A new species of Ophiuroidea from the coast of Kii Peninsula, Japan. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 15 (5) : 353-356.
- Pineda-Eriquez, T., Solis-Marin, F. & Laguarda-Figueras, A. 2014. Revision of the genus *Ophioteichus* H.L. Clark, 1938 (Ophiuroidea : Ophiolipidae). Zootaxa, 3784 : 241-250.

ジンガサウニ	<i>Colobocentrotus mertensii</i> Brandt, 1835	棘皮動物門	ウニ綱	カマロドント目	ナガウニ科
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国

選定理由

陣笠に似た特異な外形の南方系のウニ。小笠原諸島や沖縄諸島が主分布域で、本土からの記録は極めて少ない。和歌山県沿岸ではこれまで白浜町、すさみ町、串本町の海岸から記録があるだけで、当地で経常的に見られるわけではない。波当たりの強い岩礁転石潮間帯に生息する。南方系種だが、見つかった個体は成体サイズに達しており、和歌山県沿岸でも越冬して個体群が維持されているものと思われる。記録が極めて少ないことと、生息地（波当たりの強い岩礁転石海岸）の踏査が不十分とみて情報不足と評価した。



執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

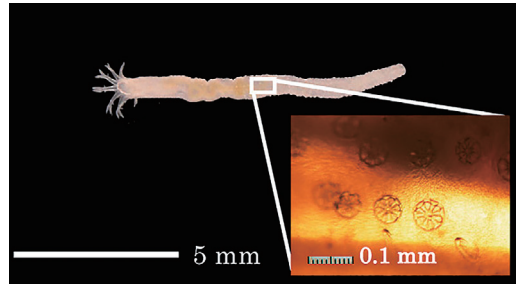
- 荒賀忠一. 1972. ジンガサウニの採集記録. 南紀生物, 14 : 59.
- 久保田 信. 2009. 和歌山県白浜町で発見された大型のジンガサウニ (ナガウニ科). くろしお, (28) : 1-2.
- 前岩 崇. 2012. 潮岬のジンガサウニ. 本覺寺杼貝, (66) : 20.
- 田名瀬英朋. 私信.
- 田名瀬英朋・土井紳吾・久保田 信. 2007. 和歌山県中部地域の海岸におけるジンガサウニ (ナガウニ科) の記録. 南紀生物, 49 : 175-176.

写真：中村公一提供

モトシマクルマカギナモドキ <i>Rowedota motoshimaensis</i> (Yamana, Tanaka & Nakachi, 2017) 棘皮動物門 ナマコ綱 無足目 クルマナマコ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

本県の田辺市天神崎元島内港側だけで発見されている砂礫間隙性のナマコ類であり、生物地理学的に貴重な存在である。触手が4指であること、表皮中の車輪状骨片の外輪内縁が六芒星形に彫り込まれること等から容易に識別される。本種を含む *Rowedota* は国内では本種を含む2種しか発見されていないことから、分類学的にも貴重な存在である。広範囲で普遍的な種組成が観察されやすい砂礫間隙性の海浜生物であるにもかかわらず、2017年の新種発表以来、県内外問わず、いまだに2例目の産地報告がないことから、本種の生息環境が相当に限定された状況であることが推測され、本種を情報不足とした。



執筆者 (山名裕介)

参考文献・情報

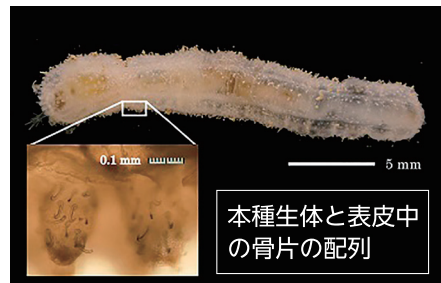
- 1 山名裕介. 2020. 日本産ナマコ類の水産学的・分類学的研究における最近の動向. 日本ベントス学会誌, 75: 6-18.
- 2 Yamana, Y., Tanaka, H. & Nakachi, S. 2017. Three new shallow species of *Taeniogyrus* and *Rowedota* (Echinodermata: Holothuroidea: Apodida: Chiridotidae: Taeniogyrinae) from southern Japan. *Species Diversity*, 22: 53-68.

写真: 山名裕介撮影

イボイボクルマカギナマコ <i>Taeniogyrus verruculosus</i> (Yamana & Tanaka, 2017) 棘皮動物門 ナマコ綱 無足目 クルマナマコ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

本県の田辺市天神崎元島内港側の狭い範囲から4個体だけが発見されている間隙性のナマコ類であり、小形の疣への鈎状骨片の特異な集合を有することから容易に識別される。近縁種は沖縄から1種が見つかるだけである。生物地理学的に貴重な存在であるのみならず、分類学的にも貴重な存在である。2017年の新種発表以来、県内外問わず、いまだに2例目の産地報告がないことから、本種の生息地・生息個体数ともに少ない状況であると推測され、本種を情報不足とした。



執筆者 (山名裕介)

参考文献・情報

- 1 山名裕介. 2020. 日本産ナマコ類の水産学的・分類学的研究における最近の動向. 日本ベントス学会誌, 75: 6-18.
- 2 Yamana, Y. & Tanaka, H. 2017. Two new species of *Taeniogyrus* and *Scoliorhapis* (Echinodermata: Holothuroidea: Apodida: Chiridotidae: Taeniogyrinae) from Wakayama and Okinawa, Japan. *Plankton & Benthos Research*, 12 (2): 83-94.

写真: 山名裕介撮影

ヒトエシモフリボヤ <i>Apilidium monotonicum</i> (Tokioka, 1954) 尾索動物門 ホヤ綱 マンジュウボヤ目 マンジュウホヤ科						
県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	—	国	—

潮間帯転石地の転石下面に付着して生息する群体性のホヤである。タイプ産地のトカラ列島宝島以外には生息が知られていなかったが、1978~1979年に田辺湾の畠島に付随する小丸島の転石潮間帯で見つかった。ただし、現在の状況は不明。群体ボヤの専門家が少なく、同様の環境での調査が不十分であるとみて、情報不足と評価した。

執筆者 (和田恵次)

参考文献 1 西川輝昭. 2019. 和歌山県田辺湾の子丸島岩礁海岸転石帯におけるホヤ類の季節的消長— 1978~79年の月別調査から—, 南紀生物, 61: 77-80.

エビヤドリミミズ <i>Holtodrilus truncatus</i> (Liang, 1963)				環形動物門	環帯綱	ヒルミミズ目	ヒルミミズ科
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—		国	—

ヌマエビ等の淡水エビ類に共生する体長 5 mm 以下のヒルミミズ類である。これまで日本からは兵庫県、和歌山県、三重県、そして沖縄県宮古島から記録があるが、このうち、兵庫県のものは中国から輸入されたミナミヌマエビに随伴した外来個体群で、他の集団は日本在来の個体群であろうとされている。和歌山県では富田川以南太田川までの河川の新マエビ、ミゾレヌマエビ、トゲナシヌマエビ、ミナミヌマエビから見ついている。最も共生率が高い宿主はヌマエビである。塩分条件に極めて弱いため、宿主の分布域の中でもより上流側に偏って出現する。ヒルミミズ類の多くがザリガニ類に共生するのに対してエビ類への共生種は稀であることと、紀伊半島南部地域に限定された分布は進化史を探る上で興味深いことから、学術的重要と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献 1 北藪順弥・大高明史・大和茂之. 2016. 紀伊半島南部におけるエビヤドリミミズ (環形動物門, 環帯綱, ヒルミミズ目, ヒルミミズ科) の共生生態. 南紀生物, 58: 190-196.
2 田中薫子・浜崎健児・和田恵次. 2014. ヌマエビ類に共生するヒルミミズ類の紀伊半島における分布. In 和田恵次 (編). 流から河口域までの河川生態系と流域環境との連環構造—紀伊半島の河川群の比較より—. pp. 122-128. 奈良女子大学共生科学研究センター, 奈良.
3 Tanaka, K., Wada, K. & Hamasaki, K. 2016. Distribution of *Holtodrilus truncatus*, a branchiobdellidan ectosymbiotic on atyid shrimps in the Kii Peninsular, western Japan, with reference to salinity tolerance and host preference. Zoological Science, 33: 154-161.
4 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (古座川、田原川から記録).
写真: 田中薫子提供

ヒコナミザトウムシ <i>Nelima nigricoxa</i> Sato & Suzuki, 1939 節足動物門 クモ形綱 ザトウムシ目 カワザトウムシ科						
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—

体長 8 mm 内外。年 1 化卵越冬で、成体は 8~10 月に樹幹上、湿った崖地、灌木上で普通に見られる。染色体数は県内で北から南に向かって、 $2n=18$ から 22 にまで地理的に分化している: 北部 (和泉山脈および高野山) では $2n=18$ 、紀美野町生石高原では集団内多型で $2n=16/18$ 、護摩壇山、有田川町和田尾山、鮎返の滝では $2n=20$ 、南部 (田辺市狼屹山、百間溪谷、那智勝浦町妙法山阿弥陀寺) では $2n=22$ 。



有田川町や田辺市龍神村周辺では18/19/20、20/21/22あるいは18/19/20/21/22で多型となる集団も見つかり、貴重である（浦崎 2014, 鶴崎 未発表）。

選定理由

2020年9月の調査では、本種はザトウムシ中最普通種で、かつ本種の最盛期であるにも関わらず、護摩壇山～龍神岳では本種を1個体も発見できなかった。シカによる林床植物の食害で林内の乾燥が進行しているためと思われる。

執筆者（鶴崎展巨）

参考文献・情報

- 1 鶴崎展巨・湊 宏. 2000. 和歌山県のザトウムシ類. 南紀生物, 42 (1) : 3-8.
- 2 浦崎智小. 2014. 和歌山県におけるヒコナミザトウムシの染色体数の地理的分化. 鳥取大学地域学部卒業論文.
写真: 鶴崎展巨撮影

アカサビザトウムシ <i>Gagrellula ferruginea</i> (Loman, 1902)		節足動物門	クモ形綱	ザトウムシ目	カワザトウムシ科
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	国	—

選定理由

体長5 mm内外。腹部背甲第2背板に1本の棘がある（和歌山県内で背に1本の棘がある種は他にはヒトハリザトウムシのみなので、山地森林内で棘のある種がいればまず本種と考えて間違いない）。ヒコナミザトウムシとならぶ普通種で、和歌山県各地の森林に生息するが、染色体数が和歌山県内で変化する。北部（和泉葛城山、紀美野町生石高原）では $2n=16$ 、護摩壇山以南では $2n=14$ 。護摩壇山と生石高原の間におそらく $2n=14/15/16$ で集団内多型となる交雑帯があると推測されるが未調査である。卵越冬年1化で成体は7～9月に樹幹や草本上で見つかる。護摩壇山周辺ではシカ害が進行しているため、今後、要注意である。



執筆者（鶴崎展巨）

参考文献・情報

- 1 明石 香. 2008. 紀伊半島におけるザトウムシ数種の染色体数の地理的分化. 鳥取大学地域学部卒業論文.
- 2 鶴崎展巨・湊 宏. 2000. 和歌山県のザトウムシ類. 南紀生物, 42 (1) : 3-8.
写真: 鶴崎展巨撮影（県外産）

コシビロザトウムシ <i>Parabeloniscus nipponicus</i> Suzuki, 1967		節足動物門	クモ形綱	ザトウムシ目	カマアカザトウムシ科
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	国	—

選定理由

短脚のアカザトウムシ亜目の種で、体長は5 mm内外、第2歩脚長は13 mm程度。雄は第4脚基節が太い。森林の地表の朽木や石下、リター中に生息。大阪府河内長野市の岩湧山がタイプ産地。紀伊半島の固有種で、和歌山県では那智勝浦町、古座川町、日高川町（旧 川辺町）で確認されているが、同じ科で同様の環境に生息するニホンアカザトウムシ *Pseudobiantes japonicus* 等と比べ、個体数ははるかに少ない。生活史不明であるが、アカザトウムシ亜目の種は普通、成体が周年見られるため、成体で1年以上生きると考えられる。



執筆者（鶴崎展巨）

参考文献・情報

- 1 Suzuki, S. 1967. A remarkable new phalangodid, *Parabeloniscus nipponicus* (Phalangodidae, Opiliones, Arachnida) from Japan. Annotationes Zoologicae Japonensis, 40 : 194-199.
- 2 Suzuki, S. 1973. Opiliones from the South-west Islands, Japan. Journal of Science of the Hiroshima University, Ser. B, Div. 1 (Zoology), 24 : 205-279.
- 3 鶴崎展巨・湊 宏. 2000. 和歌山県のザトウムシ類. 南紀生物, 42 (1) : 3-8.
写真: 鶴崎展巨撮影（県外産）

カシマイボテカニムシ	<i>Kashimachelififer cinnamomeus</i> Morikawa, 1957	節足動物門	クモ形綱	カニムシ目	カニムシ科
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国

選定理由

本種は昭和 32 年（1957 年）に和歌山県神島のクスノキ樹皮下より採集され、森川国康博士によって記載された。その後、1960 年に愛媛県南宇和郡御荘町および和歌山県西牟婁郡上富田町生馬の熊野高校芦谷演習林にてスギの倒木樹皮下から採集されている。本種は樹皮下で発見されているが、その生態は不明である。分布や生態の詳細は今後の調査に期待されるが、日本固有の属および種であり、これまで同属のカニムシ種は発見されていない。分類学的な特徴およびその個体数の少なさ等から、学術上きわめて貴重であると考えられる。



執筆者（佐藤英文）

参考文献・情報

- 1 湊 宏. 1972. カシマイボテカニムシの採集記録. 南紀生物, 14 (1) : 2.
- 2 湊 宏. 1988. カシマイボテカニムシとカシマセスジアカムカデ. 田辺市文化財審議会（編）, 神島の生物和歌山県田辺湾神島陸上生物調査報告書, 66. 田辺市教育委員会, 田辺.
- 3 森川国康. 1957. Cheliferidae の一真擬蠍 *Kashimachelififer cinnamomeus*. 動物学雑誌, 66 (10) : 399-402.
- 4 Morikawa, K. 1960. Systematic studies of Japanese pseudoscorpions. Memoirs of the Ehime University. Sect.II (Sci.), Ser. B (Biol), 4 (1) : 85-172.
- 5 佐藤英文. 1993. カニムシ目. 環境庁（編）, 日本産野生生物目録, 79-81. 自然環境研究センター, 東京. 写真：佐藤英文撮影

カチベニジムカデ	<i>Strigamia transsilvanica</i> (Verhoeff, 1928)	節足動物門	ムカデ綱	ジムカデ目	ベニジムカデ科
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国

選定理由

本種は体長が約 55 mm、体は紅褐色を呈する。頭は円形で小さく、胴部は後方に向かって体幅が次第に広くなり、中央部で最大幅、以降で次第に細くなる。歩肢は 43~57 対。日本産ベニジムカデ属は約 8 種知られるが、最終歩肢節の基側板前方にある側板を欠く点で他種と区別できる。日本における記録地点は少なく、東京都（三宅島）、千葉県（那古船形）、伊豆半島（下田）、三重県（答志島）および和歌山県から記録される。海岸地域の森林の落葉・腐植土中、倒木樹皮下等に生息する。和歌山県の場合はやや内陸寄りの有田郡広川町前田（霊巖寺）で得られている。一般に本種を含むジムカデ類は、環境の変化に極めて敏感で改変によって種数と個体数を著しく減少させる。そのため環境評価指標種の 1 つとなっている。本種の県内で詳細な分布や生態がほぼ未知な状態にあるため、学術的調査が求められる。

執筆者（石井 清）

参考文献・情報

- 1 石井 清. 2000. 皇居における多足類の生息密度. 国立科学博物館専報, (50) : 49-58.
- 2 吉田元重. 1997. 和歌山県のムカデ類. 南紀生物, 49 (2) : 135-136.

クロゾウヨシダヒメヤスデ <i>Yosidaiulus</i> sp. 節足動物門 ヤスデ綱 ヒメヤスデ目 ヒロウミヤスデ科						
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

ヨシダヒメヤスデ属は、ヨシダヒメヤスデとヨシダヒメヤスデモドキが知られ、前種が富士山麓の吉田浅間神社（模式産地）と房総半島（清澄山）、後種が富士西湖付近（模式産地）と三宅島（坪田）から記録されている。1971 年、湊 宏博士により既知種と異なる別種が大塔山系の黒蔵谷から発見され、新種記載されていないが、クロゾウヨシダヒメヤスデの和名（仮称）が与えられた。本種は体長 13~16 mm、体が淡褐色で背部の正中縫合線を欠き、頭部に 20 個ほどの単眼が三角形に配列する。県内では最初の発見地以外から生息が確認されておらず、分布や生態の詳細を解明する必要がある。

執筆者（石井 清）

参考文献・情報

- 1 湊 宏. 1971. 紀伊半島南部の倍脚類について (Ⅲ). 南紀生物, 13 (2) : 45-47.
- 2 湊 宏. 2002. 黒蔵谷を中心とする大塔山系のヤスデ類（倍脚類）相. 大塔山系大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林自然環境調査報告集. pp. 189-194. 和歌山県自然環境研究会, 田辺.

ヤケヤスデ属の 1 種 <i>Oxidus</i> sp. 節足動物門 ヤスデ綱 オビヤスデ目 ヤケヤスデ科						
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

和歌山県のヤケヤスデ属は、これまでヤケヤスデ（産地：西牟婁郡白浜町白浜、同鹿島神社）、キリシマヤケヤスデ（産地：紀州）およびヤケヤスデ属の 1 種（産地：西牟婁郡白浜町庄川郷地谷）が記録された。また、現地調査からは、ヤケヤスデ属の 1 種が御坊市明神川、有田郡有田川町の千葉山、田辺市の護摩壇山の樹洞から採集された。前 2 地点で採集された個体は、すべて幼体のため種の確定に至らなかったが、護摩壇山の 1 個体の標本が成体♂であった。本個体は、同属のヤケヤスデに似るが、体色や形態の特徴が異なること、一般にヤケヤスデが平地を主な生息域とするのに対し、護摩壇山の個体は自然植生に生息していたことから別種の新種として分類学的な検討することおよび生態的な視点から自然植生の指標種の可能性を調べる必要がある。

執筆者（石井 清）

参考文献・情報

- 1 現地調査プラパラート標本。（執筆者作製・保存）.
- 2 湊 宏. 1968. 紀伊半島南部の倍脚類について. 南紀生物, 10 (1/2) : 19-25.

キイオビヤスデ <i>Epanerchodus aculeatus</i> Miyosi, 1954 節足動物門 ヤスデ綱 オビヤスデ目 オビヤスデ科						
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

本種は東牟婁郡北山村（北山峡）を模式産地として記載され、紀伊の和名を持つ体長約 22 mm、黄褐色をしたヤスデである。日本では、和歌山県以外に愛媛県から記録され、地理的分布において重要な種である。これまで和歌山県では、白浜町（旧 日置川町安居）、大塔山山頂ブナ林、東牟婁郡那智勝浦町那智山原生林および田辺市本宮町静川（黒蔵谷・中小屋谷）から記録されている。これらの産地は自然植生が発達しており、県内全域での生息状況の把握とともに、自然植生の指標種になるかどうかの検討が求められる。

執筆者（石井 清）

参考文献・情報

- 1 湊 宏. 1968. 紀伊半島南部の倍脚類について. 南紀生物, 10 (1/2) : 19-25.
- 2 三好保徳. 1954. 日本産倍足類及び唇足類の分類学的研究 X. オビヤスデ属の 2 新種. 動物学雑誌, 63 (7) : 288-291.

ムラサキオカヤドカリ <i>Coenobita purpureus</i> Stimpson, 1858							節足動物門	軟甲綱	十脚目	オカヤドカリ科
県カテゴリー	学術的重要 (SI)		旧県	2012	—		国	—		

選定理由

小笠原諸島や南西諸島を主分布域とする熱帯性のオカヤドカリ類であるが、神奈川県以南鹿児島県までの海岸域から見つかっている。大型個体はきれいな紫青色をしており、夜行性のため夜間に見つかることが多い。和歌山県ではこれまで御坊市、印南町、田辺市、白浜町、すさみ町等の海岸陸上部から記録されている。成体サイズの個体も見つかっており、白浜町の海岸では幼生放出も確認されており、一部の個体は越冬して繁殖活動も行っているとみられる。国の天然記念物に指定されていることと、和歌山県の生息状況は北限近くの個体群の特性を見る上で重要であることから学術的重要と評価した。



執筆者 (和田恵次)

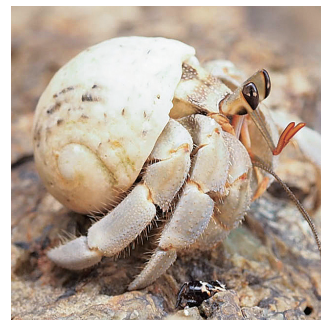
参考文献・情報

- 1 今福道夫・池田久和. 1987. 紀州産オカヤドカリ類について. 南紀生物, 29 (2): 81-83.
 - 2 久保田 信. 2011. ムラサキオカヤドカリ (甲殻類, 異尾類) の海岸での本州初の幼生の放出の確認. 日本生物地理学会会報, 66: 253-256.
 - 3 久保田 信. 2013. ムラサキオカヤドカリ (甲殻類, 異尾類) の和歌山県白浜町海岸での幼生放出. 日本生物地理学会会報, 68: 121-123.
 - 4 豊田幸詞・関 慎太郎. 2014. 日本の淡水性エビ・カニ. 254pp. 誠文堂新光社, 東京.
 - 5 和田恵次専門調査員現地調査記録 (白浜町臨海から記録)
 - 6 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (御坊市名田町から記録)
- 写真: 和田恵次撮影

ナキオカヤドカリ <i>Coenobita rugosus</i> H. Milne Edwards, 1837 節足動物門 軟甲綱 十脚目 オカヤドカリ科						
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—

選定理由

神奈川県以南に分布するが、主分布域は小笠原諸島や南西諸島の南方系のオカヤドカリ類である。体色は茶褐色ないし灰色で、前甲部の盛り上がりは小さい。和歌山県沿岸では名田、印南、田辺、白浜、椿、串本からの記録が知られている。海岸部の林地や草地で見つかる。越冬して個体群が維持されているかは不明。国の天然記念物であることと、分布の北限近くの個体群特性を見る上で重要とみて学術的重要 (SI) と評価した。



執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 池田久和・今福道夫. 1985. 白浜でナキオカヤドカリ採集. 南紀生物, 27: 112.
 - 2 今福道夫・池田久和. 1987. 紀州産オカヤドカリ類について. 南紀生物, 29 (2): 81-83. (白浜町湯崎から記録).
 - 3 三宅貞祥・今福道夫. 1980. 紀州産ヤドカリ類 I. 南紀生物, 22: 1-7.
 - 4 豊田幸詞・関 慎太郎. 2014. 日本の淡水性エビ・カニ. 254pp. 誠文堂新光社, 東京.
 - 5 和田恵次専門調査員現地調査記録 (白浜町臨海から記録).
 - 6 和歌山県立自然博物館所蔵標本 (串本町から記録).
- 写真: 渡部哲也提供 (県外産)

ミナミアカイソガニ <i>Cyclograpsus integer</i> H. Milne Edwards, 1837 節足動物門 軟甲綱 十脚目 モクズガニ科							
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—	

選定理由

与論島、琉球列島を主分布域とする転石潮間帯高潮部を生息場所とするアカイソガニ属の1種である。日本本土からの記録としては、和歌山県串本町潮岬からの採集記録があるに過ぎない。近縁のアカイソガニに比べて小型で、体表には斑紋がないことで区別できる。ただし同属のマメアカイソガニとはよく似ており、和歌山県の記録もその点の検討を残すものとみて学術的重要と評価した。

執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 永井誠二. 1990. 和歌山県沿岸のカニ類相 IV. 南紀生物, 32: 115-119.

タカノケフサイソガニ類似種 <i>Hemigrapsus</i> aff. <i>takanoi</i> Asakura & Watanabe, 2005 節足動物門 軟甲綱 十脚目 モクズガニ科							
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—	

選定理由

未記載種。外洋に面した岩礁の潮間帯上部にできる潮だまりに生息する。現在までに和歌山県串本町のみで記録がある。本種は同属のタカノケフサイソガニと酷似するが、メスの鉗脚の外面に毛房束が見られる点で異なる。また、紀伊半島から有明海の内湾カキ礁に生息し、本種同様にメスの鉗脚にも毛房を持つ同属のヒメケフサイソガニとは、生息環境の違いに加え、はるかに大型になる点で容易に区別できる。本種は夜間のみ活動が確認され、気温の低い2月の夜間にも活発に活動していたことから、南方系種が偶然辿り着いたものでもないと考えられる。



執筆者 (渡部哲也)

参考文献・情報

- 1 Asakura, A. & Watanabe, S. 2005. *Hemigrapsus takanoi*, new species, a sibling species of the common Japanese intertidal crab *H. penicillatus* (Decapoda: Brachyura: Grapsoidea). Journal of Crustacean Biology, 25: 279-292.
写真: 渡部哲也撮影

タイワンオオヒライソガニ <i>Varuna yui</i> Hwang & Takeda, 1986 節足動物門 軟甲綱 十脚目 モクズガニ科							
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	情報不足 (DD)	

選定理由

神奈川県以南南西諸島までの河川河口域から記録されるが、記録自体多くない。同属のオオヒライソガニと同じように河川の転石下から見つかるが、オオヒライソガニより稀である。オオヒライソガニに比べて甲の前側縁の丸みが弱いことと、雄の第1腹肢の切れ込みが深いことで区別されるが、非常によく似ているため、オオヒライソガニと査定されている標本もあると思われる。和歌山県では、ゆかし潟から記録されている。熊野川河口からオオヒライソガニ属の1種として報告されているものも本種の可能性があり、この点を検討する余地があるため学術的重要と評価した。

執筆者 (和田恵次)

参考文献・情報

- 1 国土交通省. 2021. 河川環境データベース <http://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/>
- 2 和田恵次・横山耕作・多留聖典・海上智央・横岡博之. 2022. ゆかし潟 (和歌山県那智勝浦町) の大型底生動物相. 南紀生物, 64: 26-31.

ミナミスナガニ <i>Ocypode cordimana</i> Latreille, 1818 節足動物門 軟甲綱 十脚目 スナガニ科						
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—

砂浜海岸の潮上帯に穴居する南方系のスナガニ属の1種である。形態的に類似している近縁のナンヨウスナガニ *Ocypode sinensis* と混同されやすく、1998年以前にミナミスナガニ *Ocypode cordimana* として日本各地から報告されていたものはほとんどがナンヨウスナガニとみられる。両種間の形態的相違としては、ミナミスナガニには眼窩下縁に切れ込みがあるのに対し、ナンヨウスナガニには切れ込み



選定理由 がないという点が上げられる。確実に本種と同定できる記録は、和歌山県沿岸、兵庫県淡路島、四国沿岸、それに南西諸島からのもので、このうち和歌山県を含む本土からの記録は幼ガニに限定される。つまり本土産の本種の分布は、南方からの幼生供給により成り立っているとみられる。和歌山県における記録は、白浜町、串本町、那智勝浦町からで、いずれも海浜潮上部の草地から見つかった。他の砂浜性スナガニ属の種に比べて、記録が極めて少ないことと、海岸のかなり陸寄りに深い穴を掘って生息するため調査が不十分な点を残すことから、学術的重要と評価した。

執筆者 (和田恵次)

- 参考文献・情報**
- 野元彰人・渡部哲也・徳丸直輝・酒井 卓・石村理知・香田 唯・和田恵次. 2020. 近畿地方における砂浜性スナガニ属4種の18年間にわたる分布の変容—2002年・2010年・2019年の比較—. 地域自然史と保全, 42: 45-59.
 - 和田恵次・渡部哲也. 2019. 和歌山県田辺湾におけるスナガニ属4種の記録 (2010年). わだつみ, 1: 11-12.
 - 渡部哲也・淀 真理・木邑聡美・野元彰人・和田恵次. 2012. 近畿地方中南部沿岸域におけるスナガニ属4種の分布—2002年と2010年の比較—. 地域自然史と保全, 34: 27-36.
- 写真: 和田恵次撮影

ヒメシオマネキ <i>Gelasimus vocans</i> (Linnaeus, 1758) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 スナガニ科						
県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—

南西諸島が主分布域の南方系のシオマネキ類である。近年、静岡県、和歌山県、大阪府、宮崎県といった本土の地域からも記録されるようになった。本土で記録されるのは幼ガニがほとんどなので、それらは南方からの幼生供給により成り立っているとみられるが、宮崎県や和歌山県では繁殖可能サイズのものが見つかり、越冬して個体群が維持されている可能性がある。砂泥干潟の中潮帯付近から見つかり、和歌山県沿岸では、広川町、田辺市、白浜町から記録がある。和歌山県の記録地は本土の他の地域に比べて際立って多いため、熱帯・亜熱帯性の本種と温帯性のシオマネキ類との競争関係が想定される点から、学術的重要と評価した。



執筆者 (和田恵次)

- 参考文献・情報**
- 大阪市立自然史博物館所蔵標本 (田辺市目良、白浜町垣谷から記録)
 - 田名瀬英朋・和田恵次. 2019. 田辺市・白浜町 (和歌山県) の沿岸で確認された南方系シオマネキ類の25年間の記録. 南紀生物, 61: 1-6.
 - 山下隆司・山西良平. 1999. 淀川, 男里川河口および西広海岸における注目すべきカニの記録. Nature Study, 45: 3-5.
- 写真: 田名瀬英朋提供

ベニシオマネキ *Paraleptuca crassipes* (White, 1847) 節足動物門 軟甲綱 十脚目 スナガニ科

県カテゴリー	学術的重要 (SI)	旧県	2012	—	国	—
--------	------------	----	------	---	---	---

屋久島以南を主分布域とする南方系のシオマネキ類で、砂泥性干潟の高潮部を生息場所としている。甲やはさみ脚がきれいな紅色のため、目立ちやすい。本土から記録があるのは和歌山県だけで、これまで田辺市と白浜町の砂泥性の干潟から 1994 年～1998 年に見つかっている。いずれも幼ガニサイズであることから、越冬も繁殖もできていないとみられる。和歌山県の分布は、南方からの幼生供給だけで成り立っているものの、本土からの記録は和歌山県に限定されることを考慮し、学術的重要と評価した。



執筆者（和田恵次）

参考文献
・情報

- 1 田名瀬英朋・和田恵次. 2019. 田辺市・白浜町（和歌山県）の沿岸で確認された南方系シオマネキ類の 25 年間の記録. 南紀生物, 61: 1-6.
写真: 和田恵次撮影（県外産）